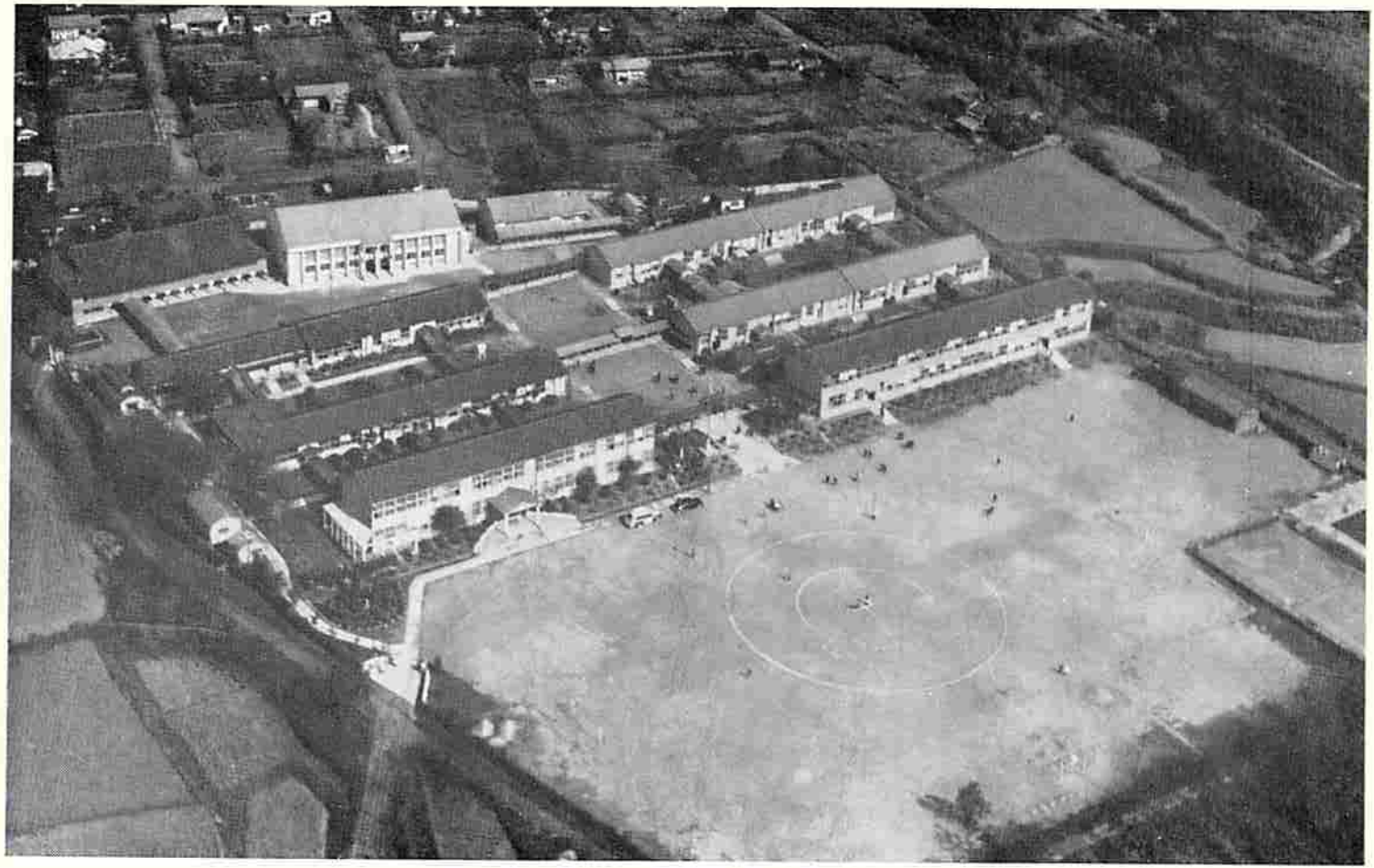
茅風

創立二十周年記念

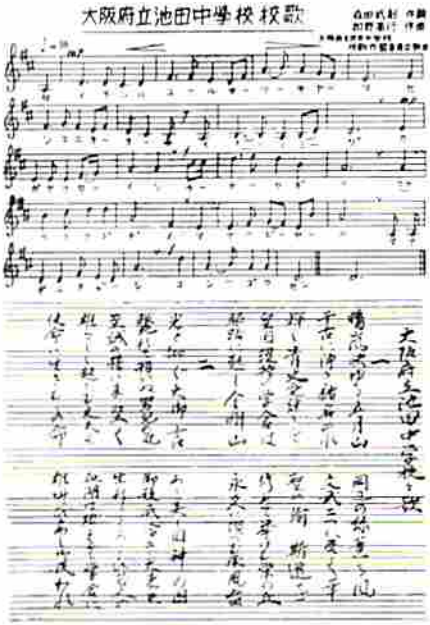
大阪府立池田高等学校



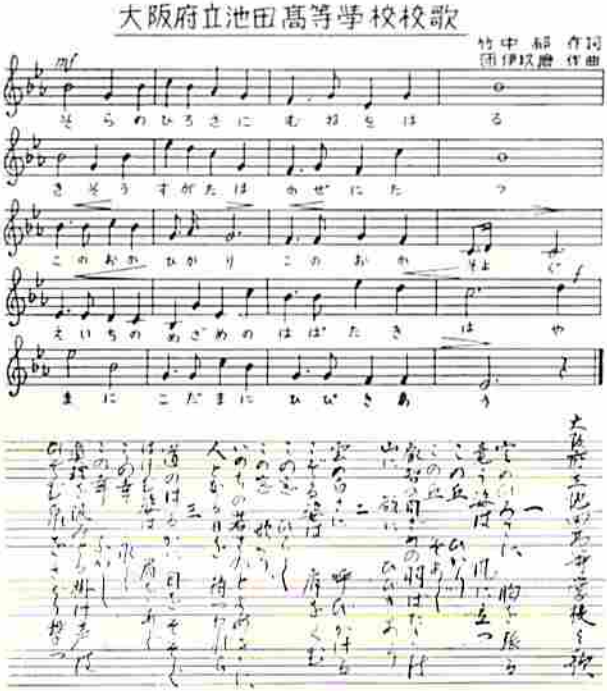
1　空からの現校舎全景

2 校章と校歌

大阪府立池田中学校校章



昭和19年2月制定



昭和29年2月制定

大阪府立池田高等学校校章

3 歴代学校長

二代 佐々木茂八先生

初代 庄 静夫先生

現 秋山 敏先生

四代 金子睦夫先生

三代 後藤安久先生

4 校門の変遷

天王寺時代

仮校舎時代

現校門

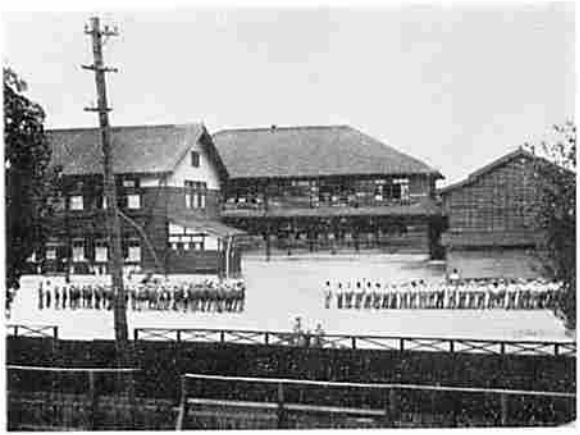
5 旧職員と現職員

創　立　時　代

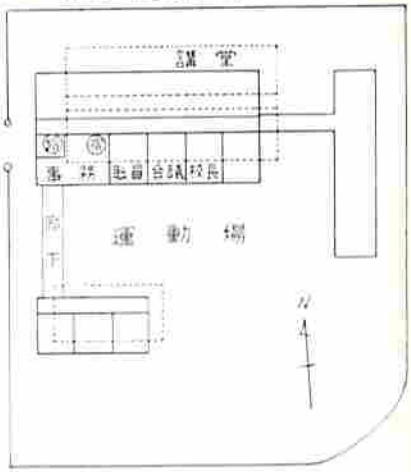
現　　在

変　遷　（その一）

天王寺時代



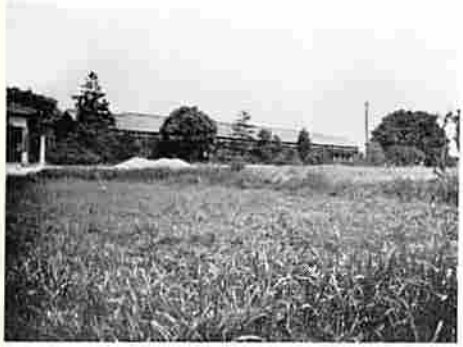
昭15　天王寺仮校舎



天王寺時代平面図

――港湾近辺にある王寺現場

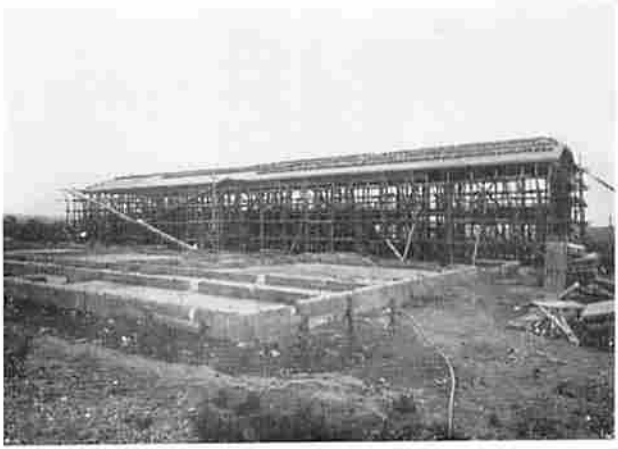
6 校舎の



仮校舎時代

仮校舎から新校舎——

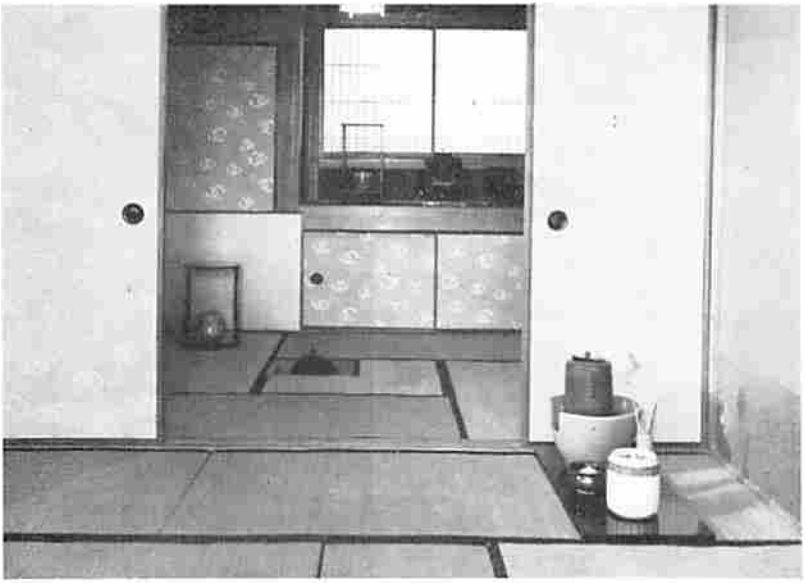
変　遷　（その二）



新　校　舎　（一号校舎の棟上、二・三号校舎の建設工事）

銃器庫の工事現場

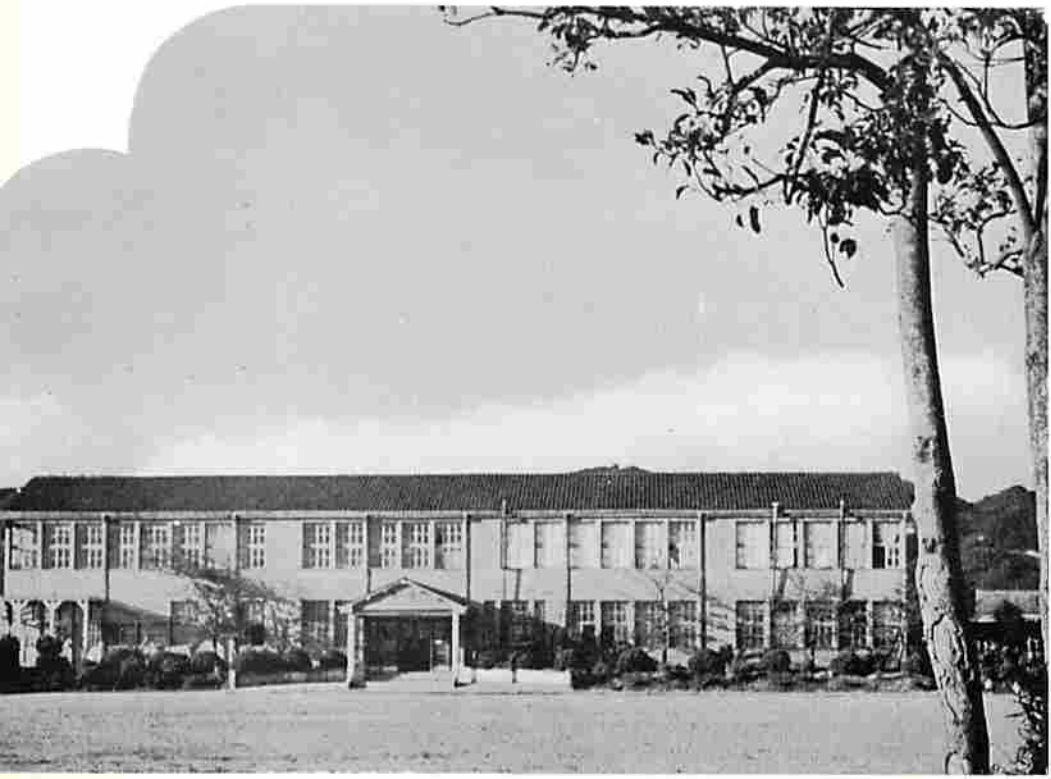
二・三号校舎の工事中現場



作 法 教 室

第 二 運 動 場 の 完 成

全　　景



7　現　校　舎

辺の変遷

今と昔

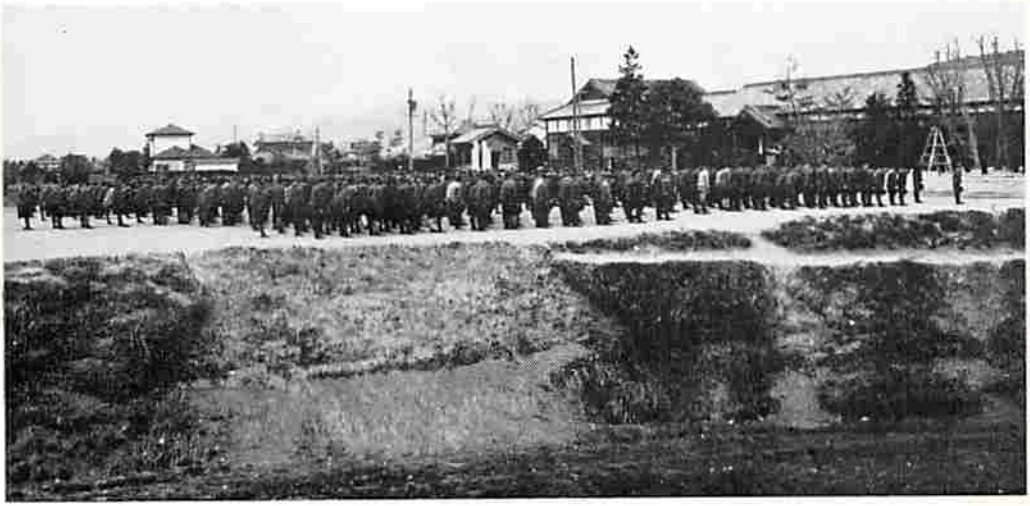
昔の狭間池

今　と　昔

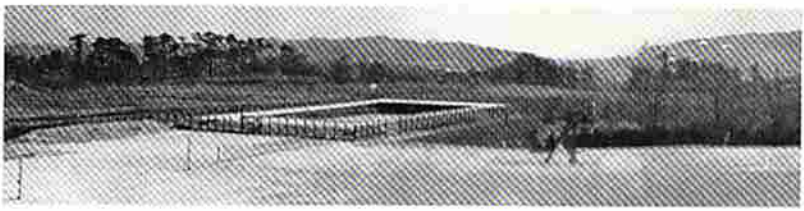
今　の　狭　間　池

南方を望む

見た朝礼場

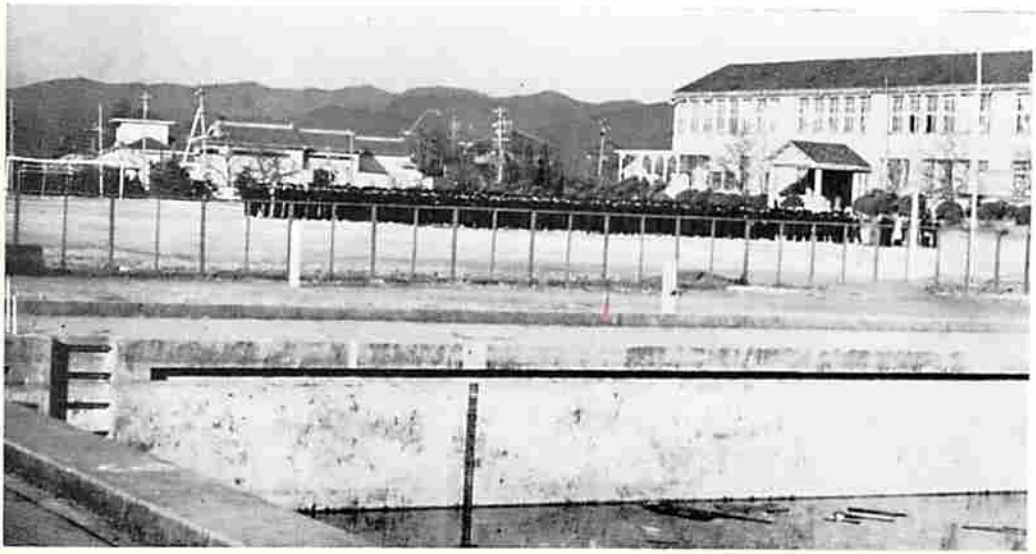


9 現校舎より



—10年前—

10 東南隅より



生　活（その一）

中学二期生入学式（昭16）

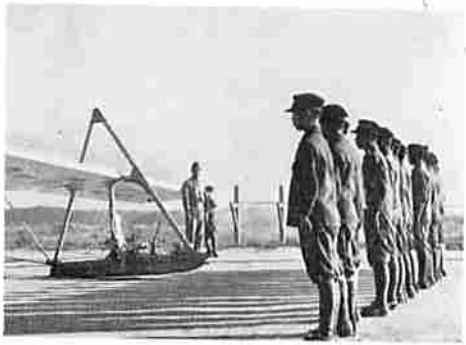
由良臨海訓練（昭16）

裏稽古風景（昭17）

炎天下の軍事教練（昭17）

駈　足　訓　練　(昭17)

防　空　演　習　(昭17)



報国団滑空訓練　(昭17)

馬　事　訓　練　(昭18)

生　　活（その二）

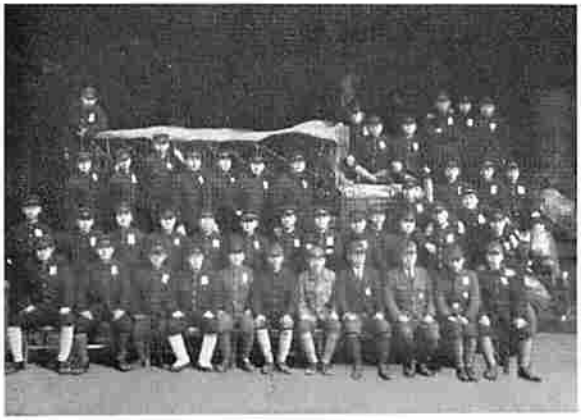
行　　軍　（昭18）

勤　　労　　奉　　仕　　（昭18）

登山訓練――伊吹山　(昭18)

大詔奉戴日　(昭19)

生　　活（その三）



学徒動員 ― 大安中央郵便局　（昭19）

戦災復興新校舍落成記念祭　（昭21）

初めての仮装行列　（昭24）

ファイア・ストーム　（昭34）

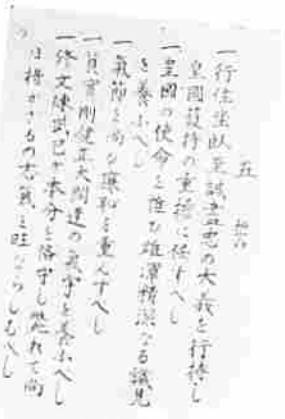
11 生徒生活 (その四)

憩のひととき (昭35)

登校風景 (昭35)

12　全　校　生　徒

の い ろ い ろ



大阪府立池田中学校校訓

五箇條

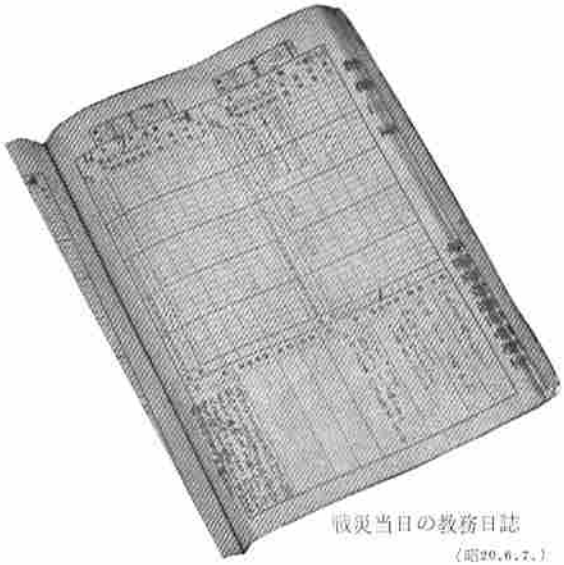
一 行住坐臥至誠忠孝の大義を行稽し
皇國護持の重任に任ずべし

一 皇國の使命を達し進取精鋭なる識見
を養ふべし

一 氣節を尚ぶ環和を重んずべし

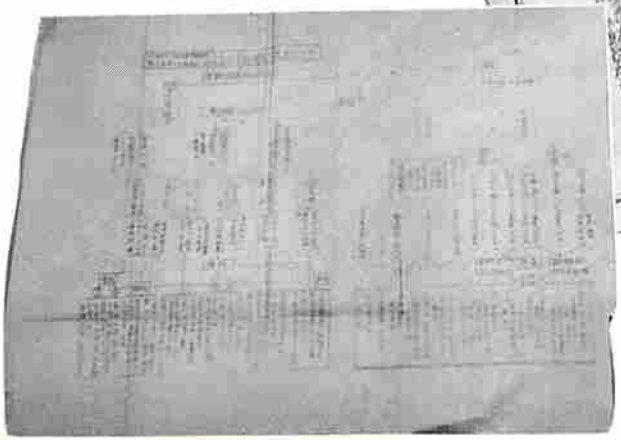
一 自治制健全大開進の氣運を養ふべし

一 終文律武已が本分と修守し勉れて尚
は稽古する志氣を旺ならしむべし



戦災当日の教務日誌

（昭20.6.7.）



学徒動員計画学

（昭19）

朝日新聞

昭24年(1949)2月27日 日曜日

十八教室を全

池田高校、二ケ

火災の新聞記事

昭和三十三年七月六日之

教務日誌

火災当日の教務日誌

復刻アルバイト名簿

14 歴代P.T.A会長

中山隆吉氏（昭和15）

故 高松 亨氏（昭和16・17）

長井明見氏（昭和19～22）

幾野重遠氏（昭和23）

上島恒造氏（昭和24・32・34）

故 飾磨為次郎氏（昭和25）

徳永善四郎氏（昭和26）

桐山秀雄氏（昭和27）

高橋義久氏（昭和28・29）

永田広海氏（昭和30）

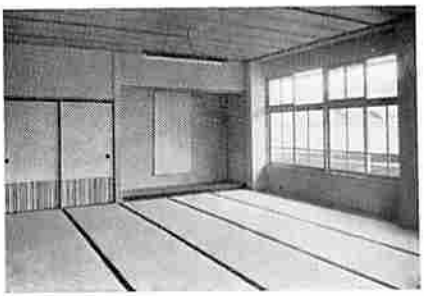
山岸正秋氏（昭和31）

井上道夫氏（昭和33）

15　承　風　会　館

工　事　中

階下食堂

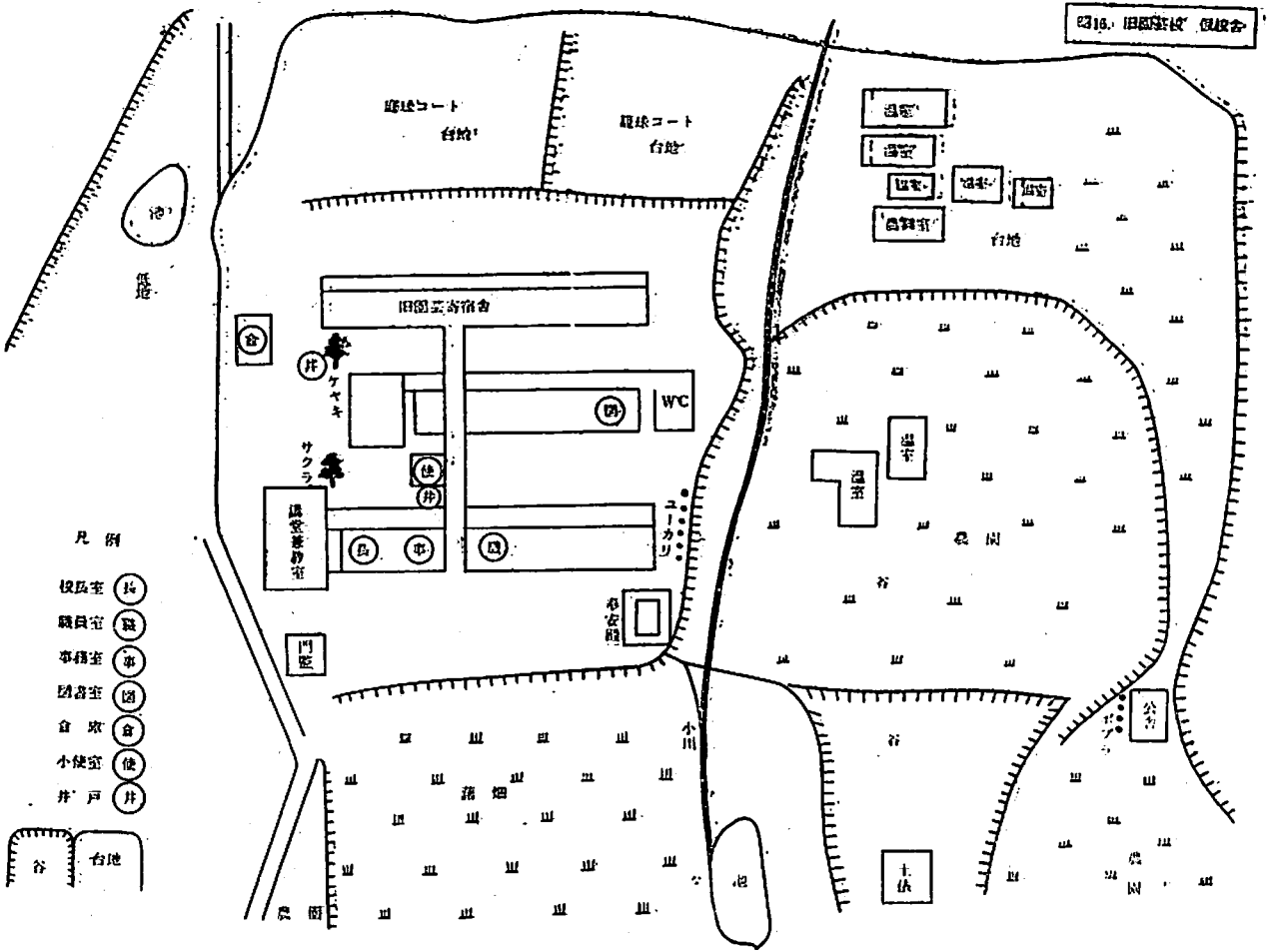


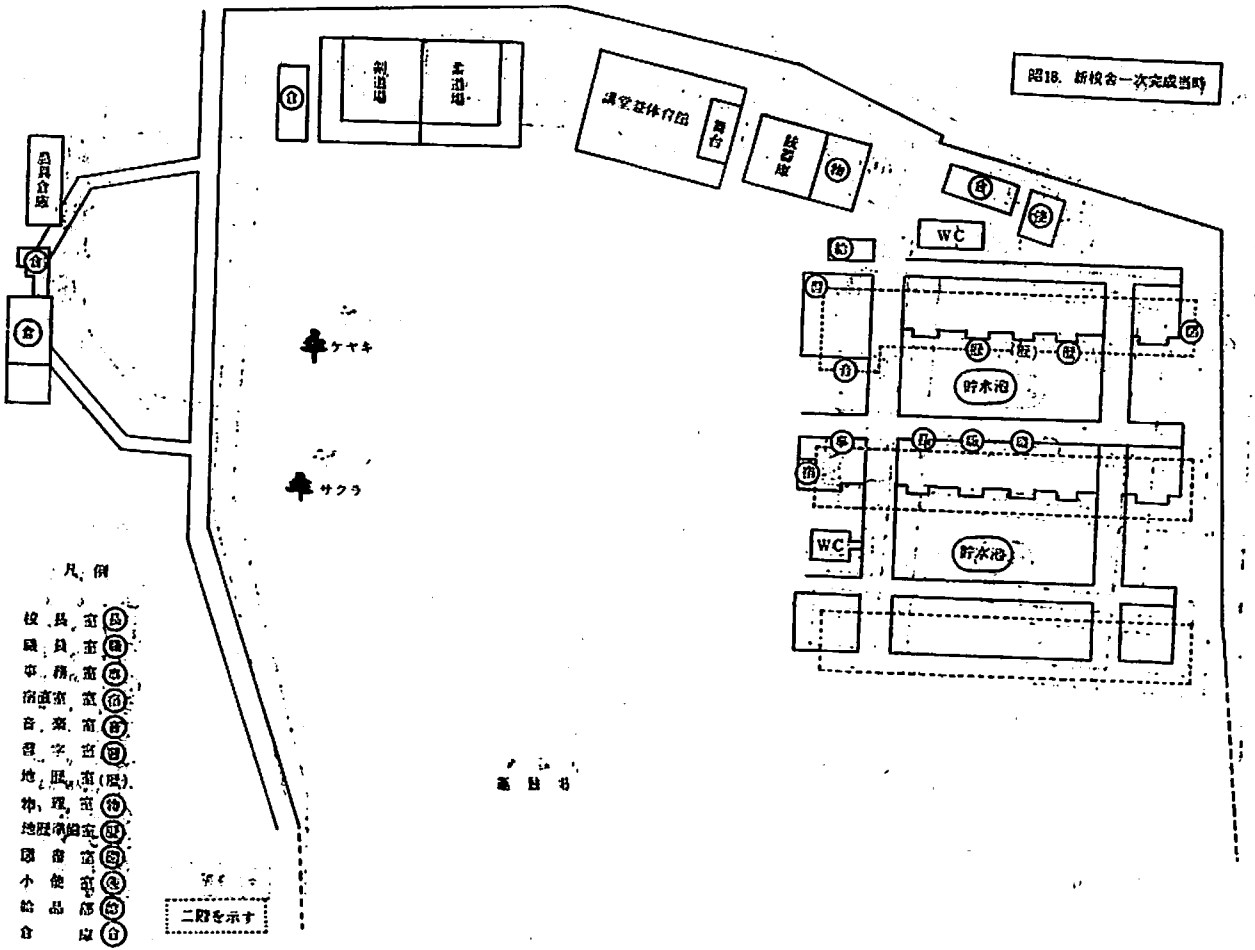
階上和室

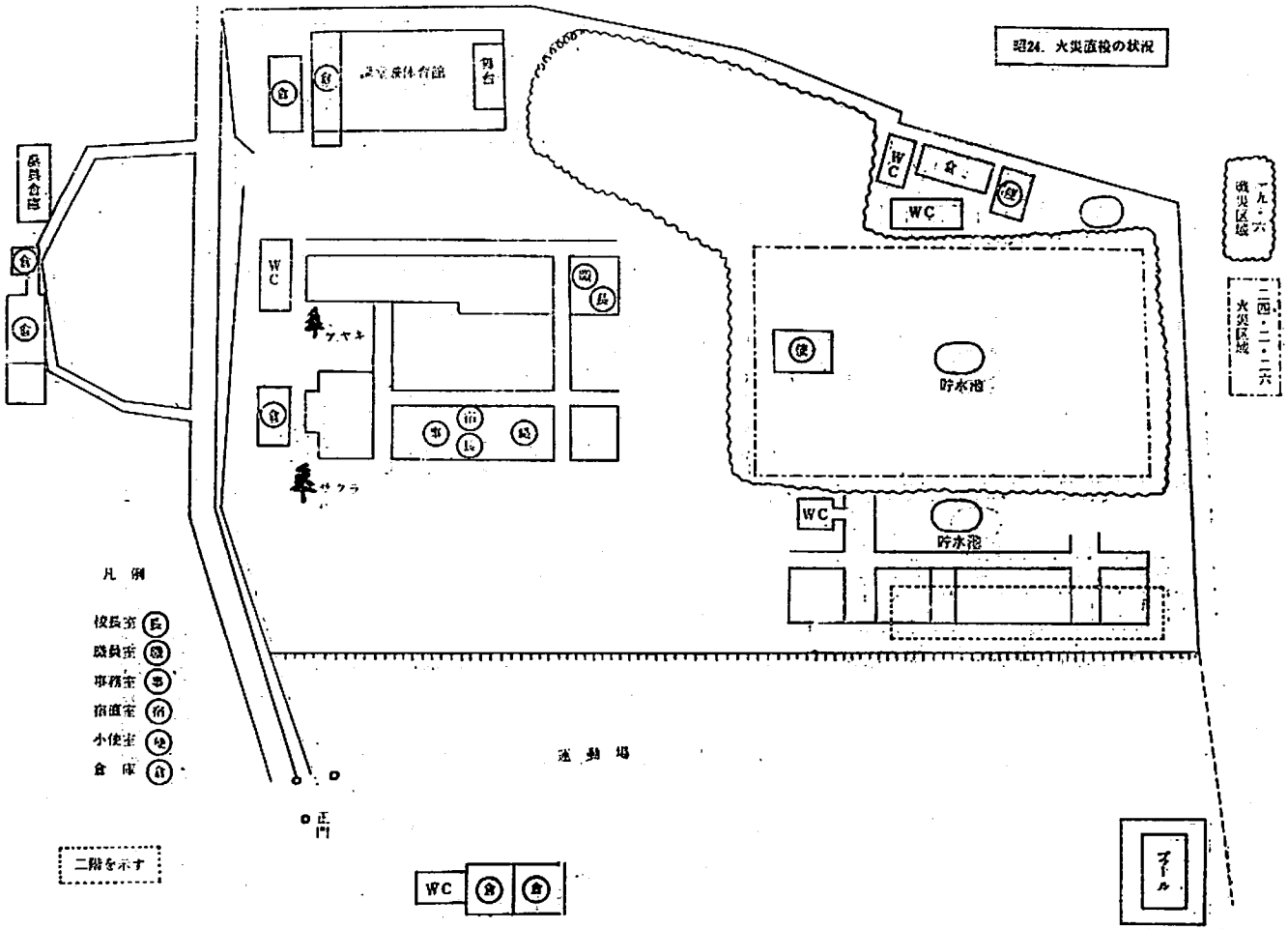
階上ホール

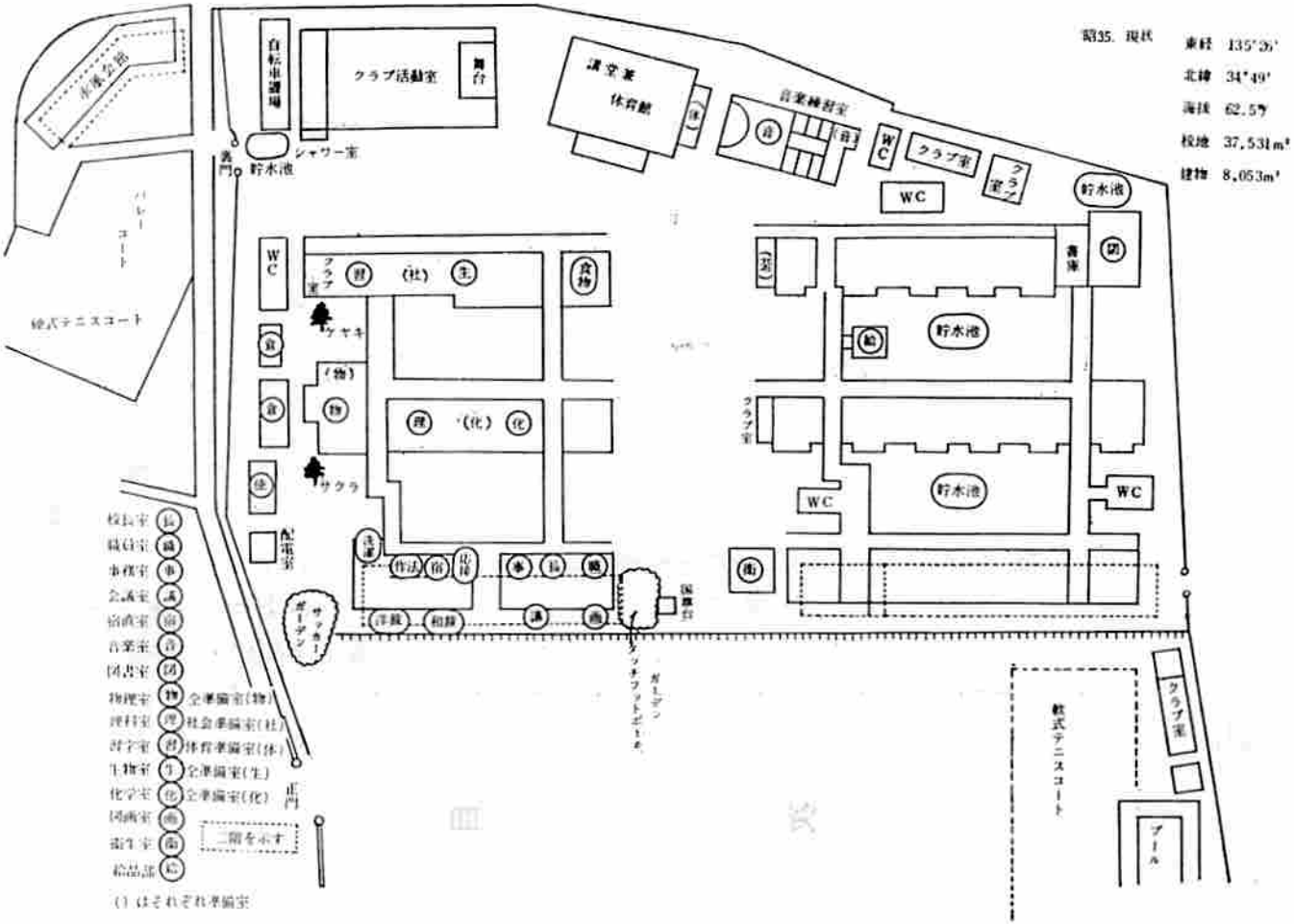
15　承　風　会　館　全　景

図16. 田園学校 (仮設)


バレーボールコート
台地
バレーボールコート
台地
温室
温室
温室
温室
温室
温室
台地
低地
池
田園学寮宿舎
食
井
ケヤキ
サクラ
使
井
WC
図
温室
温室
温室
農園
谷
ユーカリ
温室
長
職
事
図
事務室
門衛
小川
落畑
谷
公衆
農園
池
土俵
農園
谷
台地
凡例
校長室 長
職員室 職
事務室 事
図書室 図
食堂 食
小使室 使
井戸 井
谷
台地


昭18. 新校舎一次完成当時
講堂兼体育館
舞台
WC
貯水池
貯水池
WC
ケヤキ
サクラ
凡例
校長室
職員室
事務室
宿直室
音楽室
習字室
理科室
地理室
物理室
地歴室
図画室
家庭室
小使室
給食室
倉庫
二階を示す


昭24. 火災直後の状況
教員合宿
倉
倉
倉
倉
WC
WC
WC
WC
WC
倉
倉
倉
倉


第35. 現況
東経 135°26'
北緯 34°49'
海抜 62.5m
校地 37,531m²
建物 8,053m²
水泳プール
自転車置場
クラブ活動室
舞台
講堂兼体育館
音楽練習室
WC
クラブ室
貯水池
シャワー室
裏門
バレーコート
硬式テニスコート
食物
ケヤキ
サクラ
配電室
サッカーガーデン
ビオトープ
ガーデン
国旗台
正門
校長室
職員室
事務室
会議室
宿直室
音楽室
図書室
物理室
理科室
教室
生物室
化学室
図画室
家庭室
作品室
二階を示す
( ) はそれぞれ準備室
企準備室(物)
社会準備室(社)
体育準備室(体)
企準備室(生)
企準備室(化)
プール

目次

目でみる二十年……一頁
空からの現校舎・校章校歌・歴代校長・校門・職員・校舎・学校周辺・生徒生活・記録文献・PTA会長・氷風会館・校舎配置の変遷

二十年をかえりみる……学校長　秋山　敏……三五頁

この日を迎えて……二十周年記念事業実行委員長　上島　恒造……三六頁

沿革……四二頁

二十年のあゆみ……四三頁

歴代校長の言葉……五三頁

建学の礎　初代校長　庄　静夫　創立二十周年を御祝いして　第三代校長　後藤安久

終戦前後のことども　第二代校長　佐々木茂八　未来性を讃う　第四代校長　金子睦夫

思い出草……六六頁

創立当時の思い出　旧職員　尾上　恒雄　食糧増産　旧職員　藤　道雄　校章の今昔　教諭　高木　隆

断想　旧職員　奥村　和夫　風雪時代　教頭　大川　三郎　校歌の変遷　教諭　岩田　久郎

思い出　旧職員　寺田正一郎　共学当初の思い出　旧職員　尾崎　健三

むさんな青春　旧職員　宮田　明夫　スクールシティ　教諭　山崎　勝次

年輪……六七頁

天王寺時代　中一　島津　雄次
岡辺の緑　中一　野田　三朗
戦時下の学校生活　中二　中野　慶之
軍事教練　中二　山木　家道
中学時代の思い出　中四　四方　達也
勤労奉仕の頃　中五　井村　英夫
B・I―美化委員―　高二　原　武
思い出はみな楽し　高二　谷口　和寛
サッカー全国制覇　高二　藪　洋一
伝統樹立への努力　高二　木下　正利
共学開始のころ　高三　山中　英男
多感なりしロ　高三　松下　セツ
三とせの月日　高三　石沢小枝子（内海）
タッチフット
ボール全国制覇　高三　長手　功
自治会諸法の改正　高四　細見　英
あの頃　高四　藤原　晴江
男女共学時代の思い出　高四　桑木（上坂）琢子
制度の谷間　高五　阿閉　成美
自治会のことども　高六　西田　進
高校時代の思い出　高七　中谷　義孝
新桃花源記　高八　垣内　貞子
自治会生活の思い出　高九　梶山　勝
第二グラウンドの完成　高一〇　横尾　武夫
何かを求めて　高一〇　九津見　明
フォークダンス　高一二　海老　泰
歴史を感ず　高一二　久保田　譲
池高生活　三年　木藤　浩之
自由な校風　二年　石田　玲子

座談会〝この二十年を想う〟……八九頁

統計のページ……九六頁

1　現職員
2　旧職員
3　歴代生徒自治会長
4　歴代PTA会長
5　在校生徒数
6　生徒の居住地調
7　累年合格者数と合格率
8　卒業者数
9　卒業生の進学就職状況
10　大学進学者の内訳
11　生徒自治会クラブの変遷
12　図書館の現状

二十周年記念事業概観……一〇九頁

二十年をかえりみる

学校長　秋山　敏

本校は、昭和十五年四月十六日、大阪府立第十六中学校として創立されて以来、この春をもって満二十年を迎えました。ここに創立二十周年を祝うことができますことは、関係の皆さんとともに、まことに喜びに堪えません。

二十年という歳月は、学校の歴史として、決して長いとは言えません。しかしながら、本校の歩んだこの二十年は、世界史的にも日本歴史の上からも、およそ人間の地球上の営みの中で、もっとも画期的な時期であったと言えるのではないかと思います。その間に生起した内外の事件は、大多数の人々にとって、冷静に眺め得る果なる過去の史実ではなくて、今なおなまなましい感情をともなった現実の経験であったのであります。

本校が、初代校長庄静夫先生を中心として、天王寺区の府立盲唖学校跡に呱々の声をあげた昭和十五年は、第二次世界大戦の第二年目にあたり、わが国も、太平洋戦争の態勢を整えるべく、日独伊軍事同盟に踏みきった年であり、衣料や食糧はいうまでもなく、言論思想にいたるまで、その統制が極度に強化されるという時でありました。

翌十六年は、日本歴史上最大の転機を画した太平洋戦争突入の年でありますが、その年の春、本校は、府立園芸学校跡を永久の校地とし、その名も大阪府立池田中学校と正式に決定して、現在の位置に移ってまいりました。

その後の四年間、国運をかけた戦争のさ中、ひっぱくする生活苦と戦いつつ、本校創業のことに全力を傾けられた諸先生方、生徒諸君、保護者各位の苦心は察するにあまりあります。この間、府当局の力によって、校舎・

設備等もほぼ整備しましたが、敗戦直前の昭和二十年六月、不幸焼夷弾攻撃を受け、普通教室の大部分その他が焼失するという悲運に際会しました。その年の春に第二代校長となられた佐々木茂八先生をはじめ、全職員生徒諸君や保護者の皆さんは、敗戦直後の窮迫の中で、校舎復興のため、苦悩に満ちた努力を捧げられたのでありますが、その物語は聞くたびに感激を新たにせざるを得ないものがあります。

このようにして、敗戦の翌年、戦災校舎の一部は復旧をみたのでありますが、それがまだ不十分な状態の中にいわゆる六三三四制新教育制度が実施されるという段階を迎え、二十三年には全国の中等学校が正式に新制高校に切りかえられ、大阪府立高校はいっせいに男女共学となりました。校舎の問題や共学上の諸問題など山積する困難の際に、第三代後藤安久校長が米任され、鋭意その経営に当たられましたが、その困難に加えて不幸にも、昭和二十四年二月、戦災復旧仮校舎が放火のために再度焼失するという悲しむべき運命に見舞われました。戦災の全般的復興が完成をみないうちに、追いかけるごとくにこの痛撃が来たわけであります。まことに、本校々史最初の十年は、日本社会全般の苦難の時であったと同時に、本校自身も休む暇なき試練の日々であったと言わなければなりません。その苦しみが全く解消したのは、実に昭和二十七年、第四代金子睦夫校長を迎えてからのことでありました。

このたび、二十周年を迎えるにあたっては、PTAと同窓会を中心に、かねて記念事業実行委員会が結成されその結果、同窓会館兼学校食堂として承風会館が建設されました。この事業の計画と遂行とに献げられた委員会の方々の努力、これに協力を惜しまれなかった卒業生、保護者、地域社会の方々の好意は、筆舌に尽くしがたいものがあります。往年の学校関係者が本校今日の姿を見られたならば、おそらく感慨無量であろうと思います。わたくしどもは、過去現在を通じ、本校をここまで育成された幾多の方々に対し、ただただ深甚なる敬意と感謝とを捧げるのみであります。

さて、本校二十年の歩みの後段を画する昭和二十六年には、いわゆる講和条約が締結され、わが国は曲りなり

にも独立の地歩を築きました。以来十年、各方面における戦後の復興は、多分に跛行的ではあるけれども、世界の注目を浴びる程度のものであり、今日はもはや戦後ではないとさえ言われます。そのことの当否は別として、わが国が順調に生きていくためには、それほどの努力が必要であったのであり、今後はなおさらにその必要が国民生活の全分野にあるでありましょう。どの面も大巾な前進が要請されるのでありますが、中でも青少年教育の問題こそは最も重大事であると言うべきであります。革命を信ぜずして健全な変革を企図する途は他にないからであります。

今日、歴史の歩みを測る尺度は、世紀という単位ではなくて十年という単位を刻まねばならぬと言われます。物的進歩と社会変革とはそれほどに急テンポであります。教育に課せられる負荷は容易ならぬものがあると言わねばなりません。幸いにして広く社会全般の人がこのゆゆしい教育の問題に積極的関心をもたれ、その推進に惜しみなき努力を傾けられることを期待するとともに、日々直接これにたずさわるわたくしどもも、十分な識見をもち適切な工夫をこらすよう心がけなければなりません。

人は年令を重ねただけの故をもって尊しとすることはできません。本校は創立十年にしてようやく起伏の多かった道をぬけ、二十年にして成人としての一歩を踏みだそうとしております。二百名に近い旧職員の方々、四千数百名におよぶ卒業生諸君、それらの皆さんの築かれた伝統をふまえ、わたくしども後輩は、今日の栄えある機会に際し、真にこの幸を永くこの幸を深くするため、道のはるかに目をそそぎつつ、わが承風台にいやます栄光をそえると同時に、社会の進運に応分の力をいたす覚悟を新たにする次第であります。

この日を迎えて

二十周年記念事業実行委員長　上島恒造

私どもの池高が、ここに輝かしい創立二十周年を迎えましたことは、関係の皆様とともに、まことに御同慶に堪えません。この時に当たりまして、所感の一端を申し述べることができますことは、私にとりまして、大きな光栄であり、たいへん嬉しく存ずるところであります。

人生二十才にして成人に達するわけでありますが、わが池高は、その成人に達するまでに、いろいろと多事多難の道を歩んでまいりました。いまそれを回顧いたしますと、今日の二十周年記念日は、まことに意義深いものがあり、池高の今昔を考えまして、実に感無量のものがあります。卒直に申しまして、二十年というこの期間の長さが貴いのではなく、その間にわが池高が如何なる歩みを続けてきたか、また今日如何なる校風を樹立しているか、ということこそが最も問題となる点であり、二十周年記念祭を祝うにあたり、世人の最も深い関心をよぶところであると思います。

さてここで、私が声を大にして叫び得ますことは、わが池高は、それらの点からみて、名実ともにまことに立派な学校であるということであります。

そのように申すいわれはいろいろありますが、特に誇りをもって申し上げたいことは、過去二十年、その多事多難の中で、先生、生徒、父兄が真に渾然一体となって、いわゆる三位一体の実を遺憾なく発揮し、今日の立派な校風を築きあげたという一事であります。

もとよりそれは、幾多先生方が熱意あふれる生徒指導をされたこと、生徒諸君が純真で努力型であったこと、父兄が学校教育に深い理解をもたれて、常に協力を惜しまれなかったことなどの賜物でありまして、これを古い例について考えますならば、過去二回にわたる火災の大難の時に、不撓不屈の精神をもって見事にその苦難を克服し、再建の事を成しとげて、不変の愛校精神の金字塔をうちたてたこと、また最も近くは、過去現在の池高関係者が打って一丸となり、二十周年記念事業の一つとして、鉄筋コンクリート二階建延五百平方米の「承風会館」を完成せしめたこと等を挙げることができます。そのいずれにも私は関係させていただきましたが、特に今回の記念事業につきましては、諸先生、卒業生、ならびに、保護者の方々の絶大なる御協力は申すに及ばず、池田箕面両市をはじめ、公私各方面から寄せられました御懇情に対しましては、記念事業実行委員会本年度の会長として、まことに感激の極みであり、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

そのほか、本校々史の上には、全国高校サッカー大会に優勝の栄冠を獲得したこと、大阪教育界の大きな問題であった男女共学の実を見事に挙げたこと、高校としては府下随一とも言える第二運動場を設置したこと、四百メートルに及ぶ学校道路の舗装を完成したこと等々、池高をして今日あらしめた精神の発露は、数々の憶い出となって、次々と尽きないものがあります。私は、この三位一体の愛校精神こそが、偉大なる教育の真髄であるといっても決して過言ではないと思うのであります。

しかもわが池高はそれのみではありません。

環境は人物を生むと申します。五月山を脊に広大な天地に包まれたこの承風台上の校地校舎は、まことに風光明媚、府下高校にその比を見ない恵まれた教育環境であります。野に山に、水に空に、この清く美しい大自然に育まれた若人たちは、必ずや、一人残らず雄大な気魄にみちた有為の人材となって、将来大いに社会に雄飛することが約束づけられているとの感を深くせざるを得ません。

昨年の卒業式の時でしたか、若林箕面市長の祝辞の中に、「名門池高」の言葉がありました。その時、生徒諸君の一部に笑声に似たものが起こり、列席していた私も、正直なところ、いささか面映ゆい気持がしたことを記憶しております。それほどに私どもは純真であり、謙虚な気持でありました。しかし、考えてみれば、今日私どもは、「名門池高」の讃辞を、はばかるところなくお受けして少しも差し支えないのではありますまいか。そして、この二十周年を機会に、今後この「名門池高」の誇りをますます高めるよう、関係者一同一致協力して、さらに一段の努力を重ねようではありませんか。

沿革

昭和一五年　四月一六日	大阪府立第十六中学校として大阪市天王寺区大道二丁目府立盲唖学校跡を仮校舎として創立、大阪府天王寺師範学校教諭庄静夫学校長に転補
昭和一六年　三月三一日	大阪府池田市畑町百六拾番地大阪府立園芸学校跡に移転、大阪府立池田中学校と改称
昭和一八年　四月	新校舎第一期工事として教室三十六（二階建三棟）体育館（一棟）武道場（一棟）工作室銃器庫（一棟）及び小使室便所等竣工
昭和一九年　二月	校歌制定
昭和一九年　六月	校舎の一部（武道場・工作室・普通教室）を住友プロペラ製作所、食糧営団、交易営団にそれぞれ工場疎開ならびに疎開倉庫として転用
昭和一九年　七月	第二期工事特別教室（二棟）殆んど竣工のところこれを伊丹飛行隊が接収
昭和二〇年　三月三一日	第五学年（一期生）、第四学年（二期生）工場に動員
	学校長庄静夫依願退職
	大阪府立豊中高等女学校教諭佐々木茂八学校長に転補
昭和二〇年　六月七日	普通教室二十四（二階建二棟）体育館（一棟）工作室銃器庫（一棟）小使室（一棟）等被爆のため焼失
昭和二一年一一月	戦災復興仮校舎教室十二（平家建二棟）竣工
昭和二二年　四月	学制改革にともない上級二学年を新制高等学校生徒、下級二学年を併設新制中学校生徒と改称
昭和二二年　五月	学校長佐々木茂八教員適格審査の結果不適格となり再審査を要求、教諭大川三郎学校長事務取扱に任命
昭和二三年　四月一日	大阪府立池田高等学校設置（全日制）（昭和二十三年十月十五日附大阪府令第九十九号）。
昭和二三年　四月三〇日	男女共学実施され、池田市石橋以西に居住の大阪府立桜塚高等学校生徒二五二名、職員十名が本校に、豊中市蛍ケ池以南に居住の本校生徒一六八名、職員七名が大阪府立桜塚高等学校に交流
昭和二三年　五月	学校長佐々木茂八依願退職。

昭和二三年一〇月三一日	大阪府立四条畷高等学校長後藤安久学校長に転補、学校長事務取扱大川三郎同日附学校長事務取扱を解任
昭和二四年　一月	タッチ・フットボール部全国制覇
昭和二四年　二月二六日	放火により戦災復興仮校舎十二教室（平家建二棟）焼失
昭和二四年　四月	大阪府立海外商業学校廃止に伴い同校生徒八十名を受け入れ、大阪府立池田高等学校を綜合制として商業科を併設
昭和二五年　一月	サッカー部全国制覇
昭和二五年　三月	火災復興第一期工事として教室十二（平家建二棟）竣工
昭和二五年一二月	タッチ・フットボール部全国再制覇　火災復興第二期工事として本館（二階建）竣工
昭和二七年　二月一五日	体育館竣工
昭和二七年　三月三一日	商業科廃止
昭和二七年　四月　一日	学校長後藤安久大阪府立天王寺高等学校長に、大阪府教育委員会事務局教育調査課長金子睦夫学校長に転補
昭和二七年一〇月	理科施設設備完成
昭和二九年　二月	校歌制定
昭和三〇年　八月	硬式庭球部全国制覇
昭和三一年　三月	本館補強並びに図書室移転工事竣工
昭和三二年　三月	体育器具庫を男女各クラブ室兼更衣室ならびに器具庫に改築
昭和三二年　四月　一日	学校長金子睦夫大阪府立生野高等学校長に、大阪府教育委員会事務局指導第一係長指導主事秋山敏学校長に転補
昭和三二年　六月	第二運動場（ヴァレーコート二面・硬式庭球コート三面）竣工
昭和三三年　六月	池田市道本校校門間四百米の通学道路舗装完工
昭和三五年　二月一三日	創立二十周年記念事業として「承風会館」竣工
昭和三五年　三月	保健室新築ならびに旧保健室の応接室改造工事竣工
昭和三五年　四月一六日	創立二十周年記念式典挙行

二十年のあゆみ

◇昭和十五年呱々の声をあげて、本年でちょうど満二十年。成年に達した本校。思えば苦難の道でありました。その間、日本自身も、未曾有の大戦争、そして敗戦とまことに険しい道でありました。

◇本校は非常時体制下に誕生しました。しかも戦災、火災等の最悪の条件を克服して、やっと今日の記念日を迎えました。過去をかえりみて感無量という言葉がもっともふさわしいと思います。

◇ここに「二十年のあゆみ」を編纂して、この輝ける佳き日をともどもに喜びたいと思います。

昭和十四年十二月、大阪府では中学校入学難緩和策として、中学校の新設が決定した。中学校新設は十五年間も行なわれなかったので、各市の誘致運動が猛烈に展開し、特に池田市と布施市とが強く競ったので、設置場所の最後的決定がおくれた。ともかく府立中学校の十六番目であるというところから、名称は大阪府立第十六中学校の名称で発足することとなった。学校長には大阪府天王寺師範学校教頭庄静夫氏が任命された。

かくて最初の本校教職員の会合が行なわれ、教頭の中島遜氏をはじめ、綾仁信治郎氏（現府立旭高等学校長）、安良暁一氏（現大阪市大教授）等が集まられ、第一回の入学考査が天王寺師範学校で行なわれる事になった。

第一期生の募集人員は二五〇名と決定、出願者は七〇七名であった。入学事務は天王寺師範学校の友松会館で行なわれた。

昭和十五年四月十六日、開校式兼入学式が天王寺師範学校で行なわれることになった。十六日というのは第十六中学校という最初の校名を記念するためであった。差し当たり新校舎建築まで天王寺師範学校の東隣の府立盲唖学校跡で授業が行なわれることとなった。

盲唖学校あとは一時、府立航空工業学校が使用し、また長年盲唖学校生徒が寄宿舎生活をしたところであったので既に老朽化し、又近くに国鉄城東線があったので、実に騒

々しい場所であった。
校舎は三棟、一つは幽霊屋敷と称せられる寄宿舎あとで鬼気せまるものであった。
第一学年は五組編成、学校長以下比較的年齢が若く、皆張り切っていた。これも当時は戦前で、非常時と呼称せられていた時代であったので教育もそれにそって行なわれた。
即ち池中名物の着ゲートル、二列行進登校制度など、みなそれであった。
学校長は教育目標設定のため又教員の思想統一のため、哲学講習を曜日を定めて行なわれた。テキストとして西田幾多郎氏の「思索と体験」、懐奘筆録の「正法眼蔵随聞記」等が使用された。
五月に入って本校の設置場所は池田市、即ち現校地に最終的決定をみた。これについては当時大阪府議であった奥村七良兵衛氏をはじめ、池田、箕面両市関係者の並々ならぬ尽力の賜物でありまた逸翁小林一三氏の蔭の努力は忘れてはならない。
七月、校外教授として京都府由良海岸における全校生徒の水泳合宿訓練が行なわれた。毎朝、起床とともに由良神社において宮城遙拝、青少年に賜わりたる勅語、校訓の斉唱、ついで建国体操が行なわれ、その後水泳、夜は現地講演、坐禅があった。
この行事は毎年実施の予定であったが、時局の進展と共に実施困難となり、プール建設の話となり、後年、現在のプールが新設されたのである。
十月、第一回の運動会が奈良県吉野山で行なわれた。校庭にトラックもフィールドもない生徒に、せめて一日でも十二分に運動させようとの考えからであった。
生徒は元気横溢、一人で十回以上も出場する者さえあり、まことに創設時代の生徒の意気天を衝くものがあった。
冬は箕面山の兎狩も全校生徒が参加して勇壮活潑に行なわれた。
なお初代の保護者会長には当時、南海電鉄株式会社副社長であった中山隆吉氏が就任され、本校創設事業に多大の御尽力を賜わったものである。
昭和十六年三月、待望の池田市への移転が行なわれた。すなわち、現在の池田市畑町一六〇の大阪府立園芸学校跡である。これまでのごみごみした大阪市内から牧場のような広々とした場所へ移って、まるで投げ出されたような感じであった。今の正門の所から南には段々畑がつづき、老梅がちらほら咲きそめていた。当時は、現一号校舎の西端辺から南方に深さ十米、巾五十米位の谷間がずっと南につづき、その中に温室、農具舎、また椎茸をつくるコンクリートの建造物があった。使用可能の校舎は三棟あり、珍し

い樹木も多かった。今に残る運動場南側の樫の木、校務員室前の桜の大樹は当時のものである。

昭和十六年四月には第二期生が入学し、全校生徒数五五〇名となり、教室の不足を告げる事になったが、新築の気配は全然なく、不安であった。校庭の境もはっきりせず、段々畑と丈なす薄や谷間を生徒が走り廻る有様であった。なお敷地は志方同志土地会社その他より池田市に寄附され、それがさらに本校を池田市に設置する条件として大阪府に贈られたのである。

この頃になると職員数も倍加し、曽沢太吉氏（現奈良女子大教授）、森田武躬氏（現大阪市教委指導課長）、宮田明夫氏（現阪大助教授）、藤原悠紀雄氏（理博、現神大教授）、北川重男氏（現大阪学芸大池田分校主事）等を迎え、生徒も池田市、箕面市方面のものが中心をなすこととなった。

五月に入って、校訓五ケ条が制定され、本校の教育方針も明文化された。校訓は正式には「五誓」と呼ばれ、要旨は皇国護持の精神を養いて、尽忠報国発れてなお已まずという日本精神的なものであり、更に禅宗的な沈着、哲学的な重厚な人間を求め、質実剛健も強調された。

これらの実践のため、多くの行事が行なわれた。即ち毎月の神社参拝、校旗の制定、勤労奉仕又は学校周辺の開拓作業等がそれであった。

また祝祭日の式典の後には野試合が行なわれた。生徒を半分に分けて一方は石澄川に、他方は今の食堂の裏畑にそれぞれ陣を構えて、剣道防具をつけて、太鼓合図に、大いに勇戦奮闘して若人の意気を示したものであった。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争勃発し、日本もいよいよ国運を賭しての、戦争に驀進することになった。

生徒数増加による校舎増築も資材はすべて戦争目的のために使用することになったため、その見込みは全然立たず翌年度の生徒募集にも困難を感ずるようになった。

この頃、戦局はいよいよ苛烈となり、本校からも教頭中島遜氏、剣道教官大沢一氏が召集され、生徒は今の登校路の左右にならび両氏の出征を見送ったものである。

その後も職員に対する召集は続き、拾数名が出征された。また生徒にも時局が反映して、陸軍士官学校、海軍兵学校、海軍甲種飛行予科練習生の採用に応募する者が増加し、進んで苛烈な戦列に加わっていった。

昭和十七年四月、第三期生を迎えて生徒数は八五〇名を数え、教室はいよいよ不足を告げた。

戦時体制下、校舎増築などは及びもつかぬ事であったが各方面への必死の陳情の結果、やっと二階建三棟三十六教室、体育館、武道場、武器庫等の増築工事が認められて、工事は株式会社西本組によって施行せられることになった。

その喜びは苦しみが長かっただけに又格別であった。しかし、戦局は日増しに激しさを加えて、生徒は学校においての勉学は許されず、銃後における戦争協力のため、各方面の勤労奉仕に出動することになった。　（大川記）

昭和十八年四月、創立第四年目ともなれば前年末完成をみた新校舎と共に、全校生徒数も九二二名（第四学年まで）となり、ようやく学校の形体を整えて来た。戦時下にありながら当時、最も整備したものは図書室で、教職員は日曜日に京都あたりの書店まで買出しされる有様だった。クラブ活動は鍛錬班の名のもとに、銃剣術・剣道・送球・籠球等のクラブがあり、軍事訓練としてグライダー・馬術等も行なわれた。

生徒自治会は、先に創立と共に報国団の名で組織され、連絡網をもった隣保単位の学友団も編成され、「学友団は自治団体であって、正しく気高い自治生活を営もうというのが団の精神である。自ら正し自ら励むと共に学友相互が相互に匡正し合い切磋琢磨するのでなければ国民としての大成は期し難い」とあり、青少年の自覚が叫ばれていた。

二、三年前から勤労奉仕として農家の田植、稲刈の手伝に出動する事もしばしば行なわれていたが、戦況の苛烈化による農業や工場要員の召集につれてそれは益々激しさを示した。また将来に備える訓練として六月には水無瀬神宮参拝、十一月には有馬往復という三、四〇粁の徒歩鍛錬大行軍が実施された。九月には陸軍士官学校四名、海軍兵学校十二名の初合格者を出し、海軍甲種飛行予科練習生の強制的割当が求められた。なお軍事教練を指導監督する配属将校も十月に着任するに至った。

昭和十九年春ともなれば、連合国軍の反撃態勢に入った頃で、戦時体制も強化された。本校も軍人、高校、高専などの志望によるクラス編成が始まった。四月、工費六万円で二十五米のプールが新設された。これは創立当時の由良浜水泳訓練に端を発し前年夏の水泳訓練が宝塚プール、甲子園浜で開催された際、交通の不便から計画されたもので、海に遠い、しかも新設校（大抵の中学には既存）のなげきから防火用水の名で許可を受け、統制下の鉄材を闇輸送し、全校生徒の勤労奉仕で地盤を掘りさげ、ようやく完成したのであった。

六月、ついに学徒動員令による第四、五両学年、後に第三学年の工場動員が発令され、七月より二週間に一回の登校日を除いて、学徒報国団の名のもとに軍需産業の増産に参加した。当時は応召につぐ応召で、平和産業に従事する人々を徴用令で集めても人手不足という状況であった。出動した工場は、第五学年が大阪中央郵便局、サヨカ金属工業、米田鉄工所、第四学年が三浦航空機製作所・昌運工

作所・東邦自動車工業、第三学年が大阪工業試験所・ダイハツ工業・高尾鉄工所・住友化学工業等で、徹夜の作業、食糧の不足に加えてしばしばおこったB29の空襲の危険にさらされながら増産に従事したのである。

かくて永風台上には第一・二両学年のみが、晴耕雨読のたとえの如く、しばしば勤労奉仕を課せられながら、軍事教練・作業・武道等の授業を含めて、日夜、勉励したのである。また生徒達は七月には運動場を完全な蕩畑とし、また馬糧供出用の一人当たり数キログラムの乾草作りをしたのである。

昭和二十年、すでに前年、東条英機内閣は瓦解し、ドイツまた降伏するなど、戦局は敗戦直前となり、三月以来、大空襲が繰返され、学校長庄静夫氏は御退職され当時三十八才の府立豊中高女教頭佐々木茂八氏が転補された。（当時職員の平均年令は二十七才）参月卒業予定の第一・二期卒業生は卒業式後も動員継続のため学校にとどまるよう指令された。報国団も報国隊と改称強化され、特攻隊も編成され、敵の上陸に備えることとなった。

一方、空襲の激化と共に都市の重要事業場の疎開が始まり、本校も現第一号校舎に住友プロペラ製作所、現第四号校舎に陸軍螢ケ池飛行隊本部、現音楽ホールに日本食糧営団、現体育館に日本交易営団倉庫と続々徴用され、学校当局は僅か第二、三号両校舎のみしか使用していなかった。しかも空襲警報のある度に、東南の松林、または南の谷間の防空壕に待避し、機銃掃射をさけたのである。

六月七日、午後零時四十二分、大阪第二飛行場（現大阪国際空港）爆撃のB29群の一機が本校に油脂焼夷弾二百数十発を投下、瞬時にして油煙で大空は真黒となり、めらめらと赤い炎が上がった。職員・生徒の必死の防火にもかかわらず、やがて火災は第二、第三号校舎・体育館・武器庫等にひろがり、焼失、特に本校使用の部分は灰燼に帰した。着のみ着のままというか、僅かに焼失を免れた教員室から持出した重要書類と数十冊の図書のほかは何一つないあわれな学校となった。教員室は現食物教室、事務室・宿直室にはその廊下をあてる、という有様であった。

七月には第三学年と焼失工場動員生徒は、和歌山県の敵前上陸に備える築壕作業・池田市東山町の地下工場建設作業に動員され、血のにじむような日々が続いた。また終戦直前には、第一・二学年生は阪急池田駅前の家屋疎開作業が課せられた。

こうして終に八月十五日の終戦の日を迎えたのである。

（高木記）

昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅をきいたのは、ジリジリと灼きつける真昼の校庭に於てであった。今の食物教

室が当時の職員室になっていたので、そこのラジオに面して現体育館前の広場に在校の第一・二学年生全員が整列した。玉音はききとりにくかったが、それでもわかった事は「忍び難きをしのびポツダム宣言を受諾する」というのであった。放心したような皆の眼には、焦土に照りつける真昼の太陽だけが明るかった。

終戦直後の米軍進駐や、旧日本軍解散に関する種々の流言飛語の中にも本校は早くも虚脱感から立ち上った。即ち迫り来る飢餓の危機に備えて、在校生総出動で箕面市新稲の開墾に向かった。亭々たる巨木や、鬱蒼たる藪を切り開く。蜂に刺される生徒もあった。切り傷、とげ傷等々の負傷も物かは、誰もがただ一途であった。そして、もう爆撃しなくなった米軍機が、時々初秋の空を横切ってゆくのを、なお残るおびえと、次に思いかえした安堵との眼指でながめたものであった。

九月、それまでなお各工場に残務整理のために動員しつづけていた上級生が全員揃って帰校した。祖国のためという名の下に、ペンを打ち捨てて旋盤やボール盤にとっ組んでいた生徒諸君には、この帰校はどのような感慨をよんだ事であったろうか。帰校早々、新しく学級編成を行なって、また全校あげて新稲開墾に奮励したのであった。

終戦後、どうやら授業らしいものを開始したのは、九月二十一日の事であった。一号校舎十二教室、それに南館（現理科教室のある棟）北館（現生物教室のある棟）が、どうにか授業の出来る教室であったが、机というものは、僅かに戦火の中から必死の努力の末とり出した一教室分しかなかった。生徒達はじかに床に坐って勉強した。而も、米軍の命令により、教科書は使用を禁じられたり、また部分的に墨を塗って抹消したり、削除させられたりした。時には、物資不足の折柄、今日の最下等のチリ紙のような半紙にプリントしたものを以てこれにかえもした。しかし、文字に飢えていた生徒諸君は、それをも意に介せず、ひたすらの勉学に打ちこんだ。

その秋十一月、満洲及び外地からの帰還生徒の大量受入れや、戦災で行方不明になり、出席しなくなった生徒の相当数の整理が行なわれた。

丁度この頃、終戦後縮小して余剰になっていた大阪機工株式会社の食堂用長机を譲り受けたので、十一月十九、二十の両日、尼崎市の同工場まで全校総出でうけとりにいった。何せ人力に頼るほか輸送力のない時代のこと、全て生徒諸君の人海戦術で運んだ。約四、五キロの間蜿々として学校までつづいた机の列は、まこと終戦後の一奇観であった。が、これにより、とにかく床に坐って授業をうけるという難行苦行は免れ得たのであった。

この十二月、暗い事ばかりではいけないと、本校ではじめての校内軟式野球大会が計画された。併し、本校々庭は

芋畑になっていたので、当時の浪速高校（現阪大北校）のグラウンドを借り、各学年及び職員チームが参加して花々しく幕を切って落とした。但し、ボールやグローブ、ミット等全て生徒諸君からかり集めたものであったが、皆解放の喜びから、嬉々としてゲームに興じたものであった。

又、こうした事が機縁となり、その十二月六日、職員会議に「校友会規程」が上程可決されるに到った。

昭和二十一年に入ると、早くも下剋上的風潮が世を支配し、生徒の中にもその気風が浸透し、配給物の分配に関する不平や、終戦後、言説の変わった教師に対する不信の念から、不穏な空気が流れた事もあった。

その三月、物情まことに騒然たる中に、物価騰貴、インフレーションを抑制すべく、所謂新円の切換えが行なわれた。

しかし募り来る不安の中にも、本校では、三月二十五日卒業式が挙行された。これは中学三期生中の、四年を以て卒業を希望する者に対し、特例により行なった変則的卒業式であった。

同年四月に、旧制中学最後の入学試験が行なわれた。これは又、各校それぞれ入試問題を作製して実施する旧方式最後の入学試験でもあった。

この頃は、校内はやや明朗化し、食糧難にもかかわらず、スポーツ熱は興隆し、芋畑に変貌していた運動場も徐々にもとの姿にかえっていった。

その五月二十一日、終戦後はじめての運動会が、西宮球技場を借りて盛大に行なわれた。長い暗黒を正に払拭した如く、先生も生徒も、あのグラウンドをとびまわったのであった。

この間、言語に絶する資材難にも拘らず、戦災復興校舎二棟の建築計画が進められ、KK柴田組これを請け負い、七月十六日上棟式を挙行するまでに到った。

その二十一年の秋はまことに多事であった。即ち、九月二十一日には、これまた、戦後はじめての遠足を行なって平和を謳歌したものである。

次いで、十月八日、当時大阪府の教育指導者、米軍政部ジョンソン氏と、ピーター岡田氏が本校を視察し、種々のアドバイスをなし、また特に本校にタッチフットボールクラブを設置すべきことを懲慂した。

更に十一月二十日、前述の戦災復興校舎の竣工式が、関係者一同の無量の感慨の中に挙行された。これは現在の第二・三号校舎の位置に建ったもので、教室にのみガラス戸が入っていて、廊下はコンクリートの素肌そのままで、外窓はガラス戸もなく吹き抜けという全くのバラック校舎であった。しかし、これにしても、実に当時の保護者各位の、血のにじむような八十余万円の寄附の賜物で、この時

代としては全国的に見ても早く復興した校舎と言われたものので、どうやら本校も学校らしい形態を整え得たのであった。

その二十三日、今度は本校校庭に於て初めて体育祭が催された。その時分はまだ校門がなかったので、アーチを立ててお祭り気分を盛り上げた。今に本校体育祭の花形であるアーチ造りは、実にこの時を以て嚆矢とするのである。

尚この頃、世は極度の食糧難に陥り、先生方は、放課後慣れぬ鍬をふるって畑を耕し、生徒の中にも、弁当をもって来ない諸君もあったのである。

こういう世情の中で、先生の間には教員組合が生まれ、又生徒の間にも社会的関心が強まり、社会研究会（略して社研）も発足し、良かれ悪しかれ種々の学校批判が頻発した。一方、こうした傾向の他に、戦災で荒廃した校内を少しでも美しくしようと、美化委員（略称BI）が誕生した。これは全く本校独特のもので、BIの諸君は、献身的に校舎校具の修理補綴に当たってくれ、とかく善意を失いがちで、乱脈を極めた戦後の人情に、一服の清涼剤を盛ってくれたものであった。

又この頃「池中新聞」というタブロイド版の学校新聞が創刊せられ、それぞれの言論が活字になってあらわれることを喜んだものであった。その後、学校新聞は「池高新聞」と改められ、現在一〇七号を数えている。

昭和二十二年四月、新学制施行に伴う臨時措置として、上級二学年（中学四・五年生）は新制高等学校一・二年とし、下級二学年（中学二・三年）は併設中学校二・三年となった。従って義務教育の新制中学発足のため、本校には新入学生なく、現状のままで新制高校に切り換え得るように措置された。又これに応じ、相当数の職員の異動があった。

その五月、教員適格検査が施行せられ、教員間では、先のジョンソン氏のやり方を評して「ジョンソン旋風」とよび、畏怖したものであった。

十月十七日、第一回の文化祭が花々しく開幕され、生徒の文化への燃える熱情が発揮された。

又この頃、本校ではスクールシティ（自治会の母体で、米国フラナガン神父の「少年の町」に模したもの）が発足し、生徒諸君の自治活動の育成がはかられた。

更に、PTAに関する打合せも活潑化し、新教育時代に向かうべき基盤が固められていった。（岩田記）

昭和二十三年—戦後なお日浅く、衣食住は何れも未だ極めて不如意の状態であったが、戦争中殆ど封ぜられていた向学心が、急に爆発したように燃え始め、また芋畑となっていたグラウンドの整地完了とともに、サッカー、タッチ

フットボール、ラグビー、ハンドのスポーツも興った。

この四月、大阪府は各学区毎に男女共学を実施せしめた。市外第一学区に属する本校は府立豊中、府立桜塚、市立豊中各高校と協議した結果、本校は石橋以南より通学する高校一年生、併設中学三年生計一六八名、職員七名を府立桜塚高校に送り、同校より石橋以西に居住する生徒二五二名、職員一〇名を本校に迎えた。当時、府立桜塚高校は特に旧制高女であったために女子についての設備が完全であったが、本校は二度の火災にあい、ようやくその復興が緒についた所であり、旧制中学校なるが故に女子の設備は皆無といってよい程であった。ために女生徒の中には本校に来るのをこころよしとしないものがあったが、当時、府立桜塚高校保護者会長であった本校現PTA会長上島恒遣氏などは随分尽力され、同校の保護者会による設備品等を折半して本校に持参された程であり、本校教職員、男生徒も一致して女生徒を迎えたので、しだいに本校に来た事を喜ぶようになった。

かくて新しい刺戟剤を得た本校は、勉学・スポーツ両面で池高の本領を発揮しはじめた。

この五月、学校長佐々木茂八氏は依願退職され、その休職中から教頭大川三郎氏が校長事務取扱の任に当たられたが、十月三十一日、大阪府立四条畷高等学校長後藤安久氏を第三代学校長に迎えた。

翌年二月二十六日、不慮の火災に遇い、折角終戦直後、佐々木校長時代の辛苦の結晶であった平家建二棟（十二教室）が烏有に帰してしまった。

昭和二十四年四月、教職員、生徒は全員一致して焼跡の整理は勿論、春休み・夏休みなどを利用して或はマッチ売りをしたり、或はアルバイトに行ったりして、その醵金数十万円を全部建築資金の一部として大阪府当局に差出した。かくて府当局もこれに感動し、秋九月には復興建築が始まった。

昭和二十五年四月、早くも平家建二棟（十二教室）、音楽ホールの火災復興第一期工事、ついで十二月、二階建本館の第二期工事が竣工するに至った。漸く芽生えていた真摯な生活態度はかようにして、この突発的災厄に当たっては、一致協力の努力となり、また学業成績に一段と向上を示した。この一月、サッカー部、次いで十二月、タッチフットボール部は相次いで全国制覇を遂げ、自治会の各クラブは百花繚乱の時代を迎え、中モズで行なわれた府民体育大会では、数クラブが優勝を目指し、応援にてんてこまいの始末であった。翌年三月、初めて女子卒業生を出したが、その中には東大、阪大、大阪女子大、神戸女学院大等へ進学する者も相当数を数え、女子の面目を高からしめ

た。

昭和二十七年四月、学校長後藤安久氏は大阪府立天王寺高等学校長に転補せられ、大阪府教委調査統計課長金子睦夫氏を第四代学校長に迎えた。そしてまず理科施設を充実され、村山誠子嬢（高校八期生）の全国高校硬庭優勝を機会に第二運動場を設け、又クラブ室を整える等、貧弱な施設は次第に改善せられ、深まり行く進学難のため数年前のような目覚ましいクラブ活動は出来なくても、学校生活の楽しさを一層楽しめるようになった。

昭和三十二年四月、学校長金子睦夫氏が大阪府立生野高等学校長に転補せられ、大阪府教委指導第一係長指導主事秋山敏氏を学校長に迎えると共に、学校の機構も更に民主化され清新、潑剌の気風を加えた。

昭和三十三年四月登校路の鋪装が完了し、また急に学校周辺の土地が住宅化して、すっかり、昔の俤をなくしてしまった。

本校もいよいよ二十周年を迎えるわけであるが、恵まれた環境の中で順調に育ち、既に数千人の人材を世の中に送り出している。そしてこれ等の若人は、今、或は外交官として、或は学者として、或はまた産業界に、活躍中であり、今後の一層の活躍発展を期待されている。

（矢野記）

（編集責任岡本）

一、歴代校長の言葉

建学の礎

初代校長　庄　静　夫

大阪府立池田高等学校が創立満二十周年を迎えますことを心からお喜び申しあげます。

かえりみますと、本校が設立されるに当たりましては、当時戦時下の事とて物心共に窮乏致しておりました折、府当局及び府会が、実利実益を直ちに求めず基礎的人間教育を授けるという高い識見から、真の人材を育成しようという目的を以て、実に二十年ぶりに普通教育を施す学校を建設されたのであります。二十年を経た今日その意図が十分達せられつつあるのをみます時、今更ながら当時の大阪府の識見に対し敬意を払うものであります。

更に今にして感激に堪えないのは、職員各位が、あらゆる困難と不利な条件の中を、この新しい学校建設に、新鮮な気持で新しい学風を樹立しようと誠意をこめて努力されたことであります。各位の活躍は学校の内外にわたり、而も建学の理想は極めて高い所にあったのであります。勿論生徒指導に当たっては厳しい態度でありました。そうして又生徒諸君もその厳しい訓練によく耐え、実によく勉強したことであります。

また、本校の実際経営に当たりまして、当時の保護者会が中山隆吉会長を中心に、御多忙の中を文字通り献身的な協力をなされ、本校の発足を極めて円滑に且着実堅固なものにされたことに対し、この機会に深甚の感謝を捧げるものであります。

創立二十周年を迎えるに当たり、今更ながら時の流れの早いのに驚きますと同時に、感慨も一入でありますが、これら各方面の当初の困難もさることながら、かくも初志が見事に結実しつつありますのは、その後の更に大きな困難を克服して、府下有数の高等学校に育て上げられた先生方、生徒諸君、更にPTA、同窓会、地域社会の御努力の成果である事を思い、満腔の敬意と感謝を表したいと存じます。

願わくは、本校が愈々大きな発展を遂げられ、当初大阪府が期待しました人間教育が、なお完全になされますようまた生徒諸君がその初志を体して、大阪の為に、日本の為に、更に世界人類の為に、光となるように基礎修練にいそしんで頂きたいと存じます。

（姫路市教育委員会教育長）

終戦前後のことども

第二代校長　佐々木茂八

私が赴任した昭和二十年の春の頃の池中は、戦局の切迫した様相を色濃く映し出していた。運動場に面した現存の木造二階建の校舎には住友プロペラの工場が疎開して来て居り、現在の理科室のある平家建の校舎は飛行隊の兵舎となり、工員と兵隊の間に挟まって小さな一二年生がいるのみであった。それも授業らしい授業を行なうことが出来ず毎日繰返される空襲警報と共に石澄川の断崖に蜂の巣のように掘ったタコツボの穴に逃げこまねばならなかった。三年生以上は池田のダイハツ工場を始め、三国、十三方面の十三ヵ所の工場に毎日出動して、大豆や豆粕の入った蒸り切り飯で旋盤や鋳物と取組んでいた。私はこれらの工場を見て廻るのに追われている中に六月七日となった。

この日は朝から府庁で校長会議が行なわれていたが、その最中に空襲となり、民家の焼ける煙の下をくぐりつつ徒歩で十三まで来た時、校務員の西条君が自転車で北から飛んで来て、校舎が焼夷弾で焼けた事を知らせた。直ちにその自転車で学校にかけつけて見ると、既に暮れかけた薄闇の中に、昨日まで聳えていた二階建の二棟の校舎を見出すことが出来ず、そこら一面余燼が上り、校具が散乱している惨めな姿であった。大川先生が頭から蓆を被り池に飛びこんでは火の中に突入して貴重品を運び出された奮闘振りは先生の面目躍如たるものがあった。

焼跡の整理が未だ終らないところに、本土決戦に備えて和歌山方面の陣地構築に出動する命令がやって来た。三国十三方面の工場が焼けて学校に帰っていた上級生に下級生を交え三個小隊を編成して行った。互に数粁も離れた村の青年会館や寺に分宿し、折から梅雨そぼ降る中で、紀の川沿岸の山の中腹に横穴を掘る作業である。給与が甚だ悪く学校で各家庭から一コの薯など供出して貰い、リュック部隊で池田から現地に運んで飢を凌ぐ有様であった。

終戦と共に各工場から全生徒が学校に帰って来た。併し学校は校舎の大半を失い、生徒を収容することが出来ない。当局は終戦直後の事とて全く仕事が手についていないので当局のみを頼りにすることは出来ない。さりとて自力でやるとすれば、資材は一握りの釘も容易に手に入らない。然し何とかしなければならない。この時、学校に何等の縁りのない曽根の村上益三氏が、釘三十樽寄贈して下さったことは、池中関係者を非常に感激させ、それがきっかけで保護者会会長の長井明見氏や御永善四郎氏、柴田常一氏、黒田重太郎氏や現PTA会長上島恒造氏達の並々ならぬ御尽力によってガラス、木材、セメント、瓦等の資材を

集めることが出来、このことが府当局を動かして予算の支出となり、戦火で焼失した府立の諸学校の中で最も早く池中が立直ることが出来たのである。この間、四日市からガラスを運ぶ苦心談や、上島氏が寒風をついて豊川村まで瓦の件で自転車を飛ばされたことや、瓦を焼くため統制であった石炭を入手するいきさつなどの話等があるが、紙面の都合で省略し、微力な私を援助し池中復興のために一方ならぬ努力をして下さった方々に、今も感謝の念を強く捧げていることを申述べ、池高の今日の隆昌を慶び、今後の発展を祈念して擱筆する。　（大阪市立桜宮高等学校長）

創立二十周年を御祝いして

第三代校長　後藤安久

輝かしい創立二十周年を迎えられて、心から御喜び御祝い申上げます。私は昭和二十三年十月末に、四条畷高校長より池田高校長に転任を命ぜられ、十一月初旬に池高に赴任しましたが、先づ卒直に当時の感想を述べますと、学校の環境は申分ありませんが、校舎のお粗末なことでありました。戦時中や、戦後間もなく建てられた校舎ですからやむを得ぬことですが、校長室などは、理科準備室の一部で、甚だ狭隘であり、前任校のそれと比較すると、なんとも形容し難いものでありました。又校舎を一巡しますと、天井の粗悪なテックスが方々破れてぼろのようにぶらさがり廊下の硝子窓も所々方々なくなっており、雨風が自由に降り込む有様で、これは大変な学校に赴任したものだと、実は吃驚しました。しかし校舎はこのような状態でしたが、先生方には優秀で熱心な方々が多く、生徒諸君も素質がよく、上品で活気があり、よく勉強することが分り、又父兄の方々もインテリ層が多く、教育に極めて熱心であることを知り、これは大いに発展性のある学校であると感じました。当時は御承知の如く、我国は連合国の占領下にあり衣食住全般に亘り、国民生活の極めて困難な時代であり、国民は如何にして生くべきかに狂奔しておった時で、なかなか思うように学校経営が出来ない状況でありました。この困難な時代にも拘らず生徒諸君は勉学にスポーツに大いに頑張り、学業の面でもスポーツの面でも立派な成績を挙げました。特にサッカー、タッチフットボールなどは、全国優勝という輝かしい業績を挙げまして、承風健児の面目を遺憾なく発揮してくれました。このような愉快な思い出が沢山ありますが、池高在職三年半の間、私の最も苦労しましたのは、学校の建築の問題でした。池高は不幸戦災を受け、校舎の大半を失いましたが、佐々木校長の非常な御努力で復興された校舎も、昭和二十四年二月の業火で烏有に帰しました。この重ね重ねの災厄にも拘らず、生徒諸君

は早速学年末の休暇を返上して、アルバイトを行ない、その得たお金をそっくり校舎の復興資金に寄附して呉れたことと、父兄の方々が一日も早く校舎を復興するために巨額の復興資金を醵出されましたことは、私の終生忘れ得ぬ感激でありました。この生徒、父兄の方々の非常な熱意が府当局を動かし、校舎の復興も逸早く竣工し、更に待望の本館音楽教室、体育館も次々に建設され又運動場も立派に整地されて漸く一通りの設備が整いました。当時を追想し父兄各位、生徒諸君にこの機会に更に厚く御礼申し上げる次第です。

以上のような次第で、先生方にも父兄、生徒の皆さんにも御迷惑をかけるばかりで、汗顔の至りで御座いますが、なんとか三年半の間、曲りなりにも勤めさして戴きましたが、昭和二十七年四月突然天王寺高校の方に転任を命ぜられ、思い出多い池高を去ることになりました。その後既に九年の歳月が流れましたが、池高は北摂の山紫水明の地に位し、教育的環境として申分なく、府下でも最も民度の高い地域社会に育まれて、今後更に一層の発展を期して待つべきあることを確信しております。何卒教職員各位、生徒諸君の御自重御自愛を切に御祈り申し上げます。

（大阪府立天王寺高等学校長）

未来性を讃う

第四代校長　金子睦夫

廿周年を迎えて深い感懐の裡に心からなるよろこびを禁じ得ない。私は昭和廿七年四月より卅二年三月まで満五ヵ年間御世話になった。五年間といえば四分の一であるから短いとは言えないが、駈け出しの校長に取ってはあわただしい五年間としか思えなかった。だが今にして思えば池高の印象はどこまでも明るく若々しく且何となく夢を感ずる学園であったの一語に尽きる。池高には確かに他校に見られない一つの雰囲気が感じ取れる。産業道路から池高道に入ると最早や一寸異なって来る。二つ池あたりから見る池高はこよなく素晴らしい。殊に桜の季節は花に校舎が隠見して誠に陶然とした。二つ池にしてもカイツムリが年毎に来て雛を育てるし、初夏にはヨシキリが声高に季節感をそそって呉れた。承風台に立てば広い空が校庭に溢れ、動く雲が飛び込んで来る。しばし汗ばむ額を拭いつつ深く息をするのも毎日の事であった。自然そのものがかくも深くそれでいてロマンチックなのである。此の雰囲気に投ずれば私ですら深い感情にゆすぶられるのであるからまして若き

人々には夢や理想を抱かせずには置くまい。自然と文化との素晴らしい調和である。さもあらん。池高生は何時見ても実に張切って明るく健やかである。運動面、例えばサッカーにしても女子のバレーにしても腰のすわりがよく且動きが実に敏捷だ。若し仮に練習抜きで対校試合が行なわれるとすれば恐らく池高に勝つところはあるまいなどと想像もする。此の点では通学道路も確かにプラスしていると思う。乗物が通じてもあの道丈は是非歩くことにしたい。学習にしてもけじめがあって着実に無理なく行なわれている。よく学びよく遊ぶの言葉通りである。全く素晴らしい校風といえる。池高を離れて見るといよいよそのよさが迫って感じ取れる。二十年間に不幸にして二回も火災に見舞われたにも拘らず、関係者の心からの協力を得て見事復興し、今回はまた食堂兼同窓会館の建設を見るに至った事はその充実振りに驚くとともに、関係各位に心から敬意を表せずには居られない。卒業生も既にその数四千余名に及ぶであろう。いよいよ以て多士済々池高の夢も将に実りつつあるを思う。

当時の生徒や先生また深い愛情を以て協力して下さった父兄のお顔が次ぎ次ぎと浮かんで来て、何んともたまらなくなつかしい。

私は茲に改めて、此の輝かしい未来性に満ちた池高の一職員であった事を、心にしみじみと噛みしめている。そして今後の池高の繁栄を念じつつお祝いの言葉に代え度い。

（大阪府立生野高等学校長）

一、思い出草

創立当時の思い出

旧職員　尾上恒雄

池高創立二十周年おめでとう。私が赴任したのは昭和十五年三月二十五日で、前任校の都合で入試事務は一切免除して貰ったため、生徒諸君と初めて顔を合わせたのは入学式当日であった。今でも印象にはっきり残っているのは、がらんとした広い天師の講堂の真中に大人しく居並んだ、天真らんまんな嬉々とした希望に輝いた顔、先輩たちに取巻かれずに威圧から解放された自由な顔、二十年の苦斗を経て今社会の各方面で大活躍をつづけるている幼き日の顔顔顔だった。すべてが、新設校の大きな希望に胸ふくらませた感じであった。それから池中第一回生としての自覚と抱負が叩き込まれて行ったのだ。赴任した時、僅か二カ月であった長男が御世話になって、やっと大学に進学出来たその間のことを考えると、生れ出たものを育て上げて二十年ということは並大抵の労苦でないことを考えて、今更年ら歴代校長及び諸先生に感謝すると共に成年期に達した池高の一段の飛躍を二十周年を契機として希望いたしたい。

最初仮校舎として与えられたのは、天師の丁度東隣りにあった木造二階建の名にしおうボロ校舎。不幸にも美の感覚から遮られた気の毒な盲唖の青年たちの学舎だったとか。肯なる哉の感じだった。この汚穢と対決させられたわれら新来者の清掃も徹底して物凄いばかり。甲板洗いそこのけで、ズボンを膝までまくり上げ、シックイ洗いを手に手に、水でこすりにこすり上げた。中にはソゲを立てる者もあり、又油を売っている者には水がぶっかけられることもあった様だ。勿論先生方もそれに加わってやった。そして見遊える程美しくなった様に思った。たとえ一カ年間の仮校舎ではあっても、立つ鳥に劣らず美しいものをあとに残したいと云う教官生徒の暗黙の一致した希いがこもっていたような気がする。この勤労はわれら新設校の精神教育の大きな役割を果たし、少なくとも学校全体の協力体制の基礎に一石を投じたものでないかと思う。修練の一カ年を経て、次の年にはこのボロ校舎に多くの愛着と思い出を残しながら、承風台上の園芸学校の旧校舎に移転したのである。

（大阪府立女子大学教授）

断想

旧職員　奥村和夫

私が着任したのは池中創設第二年目の春であった。園芸学校の旧校舎に引越したばかりで、磨り減って木の節の出張った狭い廊下が、きれいにみがき立ててあったのを覚

えている。町屋にかこまれた寺田町の盲学校のいぶせき仮住居から、見晴らし天下一品のキャンパスに移り、職員も生徒も創業の意欲に燃えていた。学究的・理想主義的だった庄校長先生が自信をもっておられた職員組織は、今から顧みても確かに府下第一と自慢されるだけのことはあった。有能で個性豊かな先生方が、それぞれ理想的な中学建設の仕事の一分野を分担して活潑に動いていた。新校舎の建築はもとより、特別教室の設備、備品に重点を置かれていた図書室の整備等々、方々の学校の長を採り工夫をこらした。

図書の方は尾上先生が中心になり、小林（有馬）茂先生と私が協力したが、宝塚図書館での図書館学講習会にも出たりして勉強し、分類は日本十進分類法を採用した。地理特別教室がやっと出来上り、暗幕もついたので、彩色した地形図を島津製の実物幻灯器にかけ、デイライト・スクリーンに映写してみたときはうれしかった。しかし、その頃には戦争の圧迫が日々にきつくなり、これらの設備も充分に利用出来ぬまま戦災を受けてしまった。図書室は焼夷弾の直撃を受けたのだったから、最もみじめだった。

校内の諸規則の制定にもずい分苦心が払われた。凝りすぎるあまり、時にこっけいなこともあった。例えば、これは原案の段階に止まったのではなかったかと思うが、電車通学の心得として、発車の際はあらかじめ進行方向にやや体を傾けること、停車の際はあらかじめ進行方向とは逆の方向に体を傾けること、というのがあった。

戦争たけなわになって、方々の工場に勤労動員に出かけた。あちこち見て歩くと、小工場の厚生施設の悪さ、経営者の心の狭さが目立ち、配属された生徒諸君に気の毒であった。私が最後に分担した東京陸軍造兵廠の光学ガラス工場（現在の学芸大池田附中・附高の場所）は、軍工場なので規律がきびしく、敵機の空襲があっても、警戒警報では待避出来ず、空襲警報が出てはじめて防空壕にかけ込んだ。末期になると航空母艦からの艦上機（グラマン）が急襲するようになり、待避するかせぬかに機関銃弾が落下することもあり、犠牲者が出ぬかとずい分心配した。B29の空襲で母校が炎上した時は、工場長の許可が出たので、皆一せいに煙の方向をめざし畑といわず道といわず近道を走って駈けつけた。既に二階建の一棟は、めらめらと赤い焔を上げていた。この時の気持は、どういうものか、にくい米機というのでもなく、来るべきものが来たという一種爽快？な気持であった。工場動員とくらべると、農村への奉仕はいくらか牧歌的であった。食糧難の時だから、大きな白いにぎりめしと黄色い沢庵の給食は大きな魅力だった。終戦の年の春、和歌山市西郊の和佐村に行った時は、各部落の農家に分宿して歓待せられた。作業はみかんの段畑のある固い古生層の岩山にいくつも防空壕を掘ったり、みか

んの木を惜し気もなく伐り倒し掘り起こして、そのあとをいも畑やなんきん畑にするのだった。敵が紀伊水道から和歌山に上陸した場合、日本軍がこの壕にたてこもり抗戦するという想定だったらしい。荒らされたみかん山も今ではすっかり立派になっているだろう。親切だった農家の人々をもう一度訪ねてみたい気がする。

（大阪学芸大学助教授）

思い出

旧職員　寺田正一郎

僕が旧池田中学校に勤務するようになったのは、あの戦争も終りに近い昭和十九年の初冬の頃であった。初めは西宮の自宅から今津、宝塚を廻って通勤していたのであるが物凄い交通難でよく負傷しなかったものだと思う程だ。それが冬に入るとますますひどくなり、朝六時半に、前夜の空襲警報の為に寝不足になった眼をこすりこすり、突き刺す様な寒さの中を（実際あの冬は寒かった。厚い氷が張ったり、雪が積もったりした。）星を戴いて登校するのであるが、学校では勿論暖房の設備はなく、それに承風台とか言うあの高原めいた場所では、何かこうきんきんした様な空気が立ちこめている様で、そこへもって来て時々妙見おろしとか言う無情な冷風がひゅーっと吹き過ぎるのであった。

やがて春が来、秋が去り、いつか昭和も二十二年頃となっていた。戦争もとっくに済んで早や一年半。何かこう満目蕭条たる承風台にも、徐ろにそれから急速に、何か暖い洋々とした、どこにもあるあたり前の、あのなつかしい春が訪れて来ていた。校庭を取り巻いた桜並木も、その向こうの畑も、勢よく芽ぶいて、香ばしい空気の中を太陽が通って行った。皆はしばらく忘れていた（いや知っていてもそうしたかった）話しや笑いを思い出し取り戻していた。その丘にあたり前の春が来た様に、皆の間にあたり前の事が力強くなろうとしていた。（大阪府立北野高等学校教諭）

むざんな青春—勤労動員

旧職員　宮田明夫

木造平屋建の古いバラック、窓はガタビシと鳴り、廊下を歩くとめりこみそうにしわる。朝礼訓話、建国体操にはじまり、きびしい清掃作業で終るコースの連続。どの生徒の顔にも、強いられた闘志の底に、七十の老人のような疲れが刻まれていた当時を想い起こし、私はあわれな気持になる。当時の生徒には青春がなかったと思う。今の生徒も受

験準備その他で灰色の学校生活だなどと言うかもしれないが、少なくとも意志の自由があり、将来への希望が残されている。当時の生徒は、何か目に見えない大きなものに牛耳られている人形でしかなかった。勤労動員の令書なるものが池田中学に届いたのは他の学校よりすこし遅れていたが、やはり来るものが来たという感じだった。一期生がまず出動し、やがて二期生、三期生とつづいた。各工場ごとに勤労小隊を作り、一学年で一中隊、学校全体で大隊という編成だった。出動した時はもう大勢が決しかけた時期であるため、生徒は馴れぬ作業にはげしい拍車がかけられた。すし詰めの通勤電車、学校生活とはうって変わった重労働栄養不足、そして作業の不馴れ、これでよく耐えたと思う。何とかして日本を勝たせよう、という純真な精神力がなかったら、あのような酷しい試練には耐えられなかっただろう。何のための戦争であったにせよ、支配者が誰であったにせよ、当時の生徒の純真さは何人も否定できない偉大なものであり、池高二十年誌を飾る金字塔である。

勤労動員には不幸な被害も伴ったことを付言したい。戦後の実社会で道を誤った者も若干いるし、病苦から完全に抜け切らない者もいるが、この責任の一部が動員中の生活に源をおいている場合もあると思う。戦争の恐ろしさを忘れかけている時期だけに、このような厳粛な事実を反省することもわれわれの義務だと思う。

（大阪大学助教授）

食糧増産

旧職員　藤　道雄

私は終戦二年目の秋、池田中学校の農業教員として、あの有名な坂を登った。台地一帯の秋色も美しく、校舎全体から受ける感じも都会風でなく、田園都市の名にふさわしい学校のようで大いに気にいった。

着任のその日から私は百姓姿になり生徒と一緒に働くことになった。勿論学年も学級もおぼえていない。所が、どの生徒も、すごくまじめで中学生とは思えない程手順よく作業をしてくれたのには、驚くと共にうれしかった。

おもしろいことには、作業を割当てられた学級は、終日他教科の学習は一切やめて農業に従事するというやり方であった。農業学校であるならとも角、中学校では珍しかった。作業に当たった者は始業と同時に準備にかかり、所要の農具を車にのせて凸凹道を新稲の実習地に向かうのであった。今は石澄川には立派な橋がかけられているが、その頃は完全な橋ではなく、車隊の人達は随分苦労したものである。何しろ食糧不足の頂点に達していた頃であり、先生方も暇さえあれば農場へ出て鍬をふるっておられた頃のことである。実習地も新稲に約一〇〇アール（一町歩）、学校に八〇アール（約八段歩）位あった。栽培作物は甘藷

と小麦、それに僅かばかりの米や野菜類を作っていた。私はもともと鹿つめらしい農業教育をするつもりはないし、かといって勤労教育をする考えもなかった。ただ土に親しみつつ強い体を作ってほしいと思うだけであった。

学制が改革され二十三年から高等学校となり男女共学となった。農業科は選択科目となり大分趣が変った。受講生徒数は急に減少したが他教科と同様の取扱いをうけ、少しは農業科らしい作業や学科もやれるようになった。実習地も地主に返還して小規模となり趣味の園芸程度にして栽培作物も花卉にかえた。山羊や兎、鶏、豚等の家畜もとり入れて飼育した。又女生徒の中にクラブ活動として花を作りたいなど申し入れがあり、花壇を作ったり、畑にグラジオラスを植え込んで百姓に笑われたこともあった。三十人程の農芸クラブ員と、管理室の石油罐で作ったストーブを囲み乍ら研究や雑談に過ごした事も忘れ難い思い出である。

私が着任した時に、中学一年であった人達が高校に進み二年生になると、新制中学から一年生が入った。その新一年生は農業選択者が少なく、池高の農業科も影のうすいものとなってしまった。これも時代の流れであり、私にはどうすることも出来ないことであった。私は昭和二十七年一月末日、六カ年苦楽を共にした高校四期生の卒業を待たず池高を去り、寝屋川高校の事務室で働くことになった。

今、私は池高にもかっては農業科があったことを二十周年史の一頁に記録して頂きたいと共に、卒業生の皆さんの中には「ああ、あんなこともあった」と思い出していただければ幸いと思い、ペンを走らせました。

（大阪府立阿倍野高等学校事務長）

風雪時代

教頭　大川三郎

佐々木校長が不幸にも教員適格審査でいろいろと問題になっていた頃、規定により、昭和二十二年春より二十三年秋まで校長事務を私が取扱う事となった。その間実に多事多難であった。

二十三年正月二日、何の理由か知れなかったが、進駐軍CICより呼び出しがあり、自分の思想調査や、私の知りもしない北摂全部の青年共産党の活動について十余回にわたって聞かれて全く閉口した。其頃、北摂各校の青共活動は活溌で、私も「東条首相的な独断専横の校長代理」と攻撃され、又その連中が学校に押しよせた事もあり、校内には何度か無断で大型の掲示が夜間に貼られたりした。そのうちに男女共学と学校統廃合が進駐軍より命下された。ジョンソンという係の米人が最も強引なやり口で恐れられていたのもこの頃のことであった。又このジョンソンが本校

に来てタッチフットボール部を作らせたのであった。男女共学についての北摂地区の決定は、桜塚高校の講堂でなされた。本校より責任者として私、森田、奥村、高木、岩田各先生、保護者代表として飾磨為次郎氏、益子夫人、及び螢が池方面代表として寺門夫人が出て、生徒の交流案をきめた。又先生交流は森田先生が中心となって交渉した。そして池高の螢が池以南の生徒は桜塚に、桜塚の石橋以北の女生徒は池高に、更に市立豊中高女は廃校とし、その生徒の大部分は豊高に、一部は桜塚に、又豊高の南方の生徒を桜塚にそれぞれ交流することに決定した。これは本校の飾磨氏の懸引きよろしきを得た結果であった。

しかし決定はしたものの、桜塚の女生徒の父兄は「狼の中に子羊をやる如し」といって反対した。私も余り桜塚が反対騒ぎをするので、同校の保護者大会場にもぐりこみ状況判断したこともあった。当時の桜塚の校長は水池氏であった。

女生徒達が、あの美事な桜塚の校舎に訣別して、尚焼跡のままの池高の正門に立ったのは二十三年四月十八日午前八時の事であった。今だに忘れもせぬ事である。

共学当初の思い出

旧職員　尾崎　健三

戦後六、三、三、四制度が採用され日本の教育には革命とも言う可き男女共学が高等学校に実施されることになった。池田中学と豊中高女の教職員、生徒の交流によって池田高等学校設立の運びと決まったが、豊中高女側の交流を予定された生徒父兄の間に交流生徒数の少ないことが刺激となって実施に不安を持ち、数回にわたって父兄会を開き涙を流して反対された方もあり、あたかも狼の中に羊を連れて行くようなものだとの言葉さえ聞く始末であったが、次第に感情もおさまりいよいよ共学実施となった。

昭和二三年四月一日の開校式は極めて印象的であった。率直で飾り気のない大川先生の御言葉、礼義正しく、よく統制のとれた男生徒諸君の態度等は、緊張した女生徒の心に安心感を与え心配された池高の共学も好もしいスタートをした。物珍しそうな男生徒、固くなった女生徒の表情がみられたが、次第に軌道に乗り、教室には女生徒の手で草花が活けられたり、男生徒のズボンに寝押しの筋がつくようになり、女生徒も段々クラブ活動にも参加し始めた。男生徒の父兄は学力の低下、女生徒の父兄は男女交際を心配

される向きもあったので、学校生徒父兄の懇談会を開き、森誠一氏の座長のもとに活溌な発言もあって得る処があった。

吾々としては一番心配したのはやはり生徒の交際であった。当初はちょっとした噂も捨ておかないで調べて、全く詰まらないことであったり、時に神経質になり過ぎたりした。共学して居なかった上級生から、もっと自由性を認めて欲しいと再三抗議めいた話をされたことも思い出される。現在共学した生徒の中から二組のカップルがあることを知って居りますが、私としては誠に感慨無量で、共学当時からの愛情を温めて数年後に結ばれたことは美しいことで敬意を表したい。共学当初の思い出をごく短く書きましたが共学の意味するものの広く、深いことを今更ながら感ずる次第である。

（大阪樟蔭高等学校教諭）

スクールシティイ

教諭　山崎勝次

昭和二十一年九月より民主教育研究会における、パーカー氏の勧告にもとずき、フラナガン神父の「少年の町」にヒントを得たスクールシティイ（学校市）という、教職員生徒が一体となった学校自治体の建設が各学校で研究されるようになった。本校においては他校にさきがけ大勇断をもって、昭和二十二年度早々実施に踏み切った。

公民生活の理解、遵法精神の養成、自律的態度の向上、を趣旨とし「我々の学校は我々の手で」、「住みよい町を」のスローガンのもとに全校一丸となり

名称、池田中学校生徒自治会（池田中学校市）

立法、司法、行政の三権分立を図り、役員は選挙により、生徒長（市長）、助役（二）、学級代議員（市会議員）審議員というような組織を有し、

昭和二十二年五月二十一日、初代生徒長藪内幸一君以下の役員決定を見た。市長は政見「チャーミングな学校建設」を叫んで「池田中学校市」は呱々の声をあげたのであった。当時来阪したフラナガン神父よりは「親愛なる池中生諸君よ、立派なスクールシティイの発足をお祈りします」との激励の辞をいただいていることを心に銘じておかなければならない。

校章の今昔

教諭　高木隆

「五稜の校章」　大阪府立中学校の殆どの校章が、六稜の「中」の字の中央に校名をもじったものであった中で、

本校の校章は五稜の星の中央に中の字を入れたものであった。これは初代校長庄静夫先生が、天王寺師範学校の美術科教官に依頼されて作成されたものである。これは本校が大阪府立第十六中学校として誕生した処から、白線一本に六の字をあらわす五稜を象どったものといわれる。また創立の翌年、北摂池田の地に大阪府立池田中学校として移転されたので、大阪の北部としての北極星の星とも関係づけられ、新進気鋭の中学校として独自の校風を樹立するにふさわしい校章であった。

「梅鉢の校章」現在の帽章や胸章に使用されている梅鉢の校章は、高等学校令の施行された昭和二十三年四月、新しい学制の発足にあたって学校のシンボルである校章を新しく定めなくてはというので、作成されたものである。さて現校章は、この池高承風台の土地が、古代文化を伝えた帰化人の来朝した池田の土地であり、秦野（畑）の地名がある所で、昭和初期までこの秦野に数千本の梅樹があり風流人はひさごをさげて、梅花を賞でに足を運んだものである。したがって梅鉢は本校の土地柄を最もよく物語っている。しかもこの梅鉢は、学問の神で学業成就を祈願する天満天神（菅原道真公）の紋所でもある。そうした梅鉢にIKEDA HIGH SCHOOL の頭文字IとHを重ね、更に七宝で浮き出しに池高の文字を描いたのが現校章のいわれである。

こうしたいわれをもつ池高の校章が同窓生諸君の心のシンボルとして永遠に刻まれんことを願ってやまない。

校歌の変遷

教諭　岩田久郎

校風を象徴する立派な校歌がほしいということは、初代校長庄静夫先生の、創立当初からの念願であった。その願いは、昭和十六年、校地が池田に下せられてからはますます確乎たる形態を帯び、事は職員会議にもはかられて、作製促進の方途が論ぜられた。

その後しばらくの胎動期を経て、当時の国語科主任森田武躬教諭（現大阪市指導課長）の作詞にかかる別掲の校歌を採択し、音楽科加野高行教諭がその作曲に当たった。

昭和十九年二月十一日、当時の紀元節の式後、この新校歌発表式を厳粛に挙行した。式は校長の校歌制定発表、作詞者の意義解説、歌唱指導等満場の感激の中に行なわれた。そしてそれは戦時下極度の緊張の中にあって、何の潤いも持たなかった生徒諸君に日常大いに愛唱され、心のよすがとなったのであった。

しかしながら、この校歌は、戦後、新時代にふさわしからずとして廃止せられ、無校歌の時代に入った。一つには

当時の趨勢がその作製熱を十分には醸成しなかったし、又一方慎重に立派なものを作りたいという希望があったからである。

昭和二十四、五年頃、当時の生徒自治会では、男女共学により劃期的形態を整えた新学制の指標として、是非とも校歌がほしいと熱意を披瀝した。それに対し、学校側では国語科教員に作詞方を依頼して、作曲発表した。それは「ひとりとその影」（寺田正一郎作詞、須藤五郎作曲）「丘の上では」（鈴木太良作詞、内海誓一郎作曲）「逍遙歌」（土田衛作詞、大沢寿人作曲）「池田高校の歌」（岩田久郎作詞、松村順吉作曲）であった。しかしこれらは、そのまま校歌とはせず、更に次の機会を待つことになった。

昭和二十七年の末に到り、更に生徒諸君の要望が高まって、自治会の公約にも校歌制定の完遂というスローガンが掲げられ、まず、教職員、卒業生、生徒を対象に、大々的に、校歌々詞の募集を行なった。その応募作品二十数編、詩人竹中郁氏の選を仰いだ。が、いずれも兄たり難く弟たり難しで、結局同氏の作詞に俟つこととなった。その作詞の完成したのは昭和二十八年九月のことで、作曲については、同氏の希望斡旋により、新進気鋭の作曲家団伊玖磨氏に依頼した。

曲の成ったのが昭和二十九年二月初旬、ちょうど校歌制定促進運動を起こした諸君の卒業が目睫の間に迫っていた時であった。それで機をのがさず、校歌発表式を、その卒業式の前日、昭和二十九年二月二十三日に挙行した。当日は作詞者竹中郁氏を招待して校歌の意義を拝聴し、その後歌唱指導をうけた。

その翌日の高校第六期生の卒業式は、この新校歌の声高らかに承風台にこだまして、異常な感激と興奮の中に行なわれ、現校歌が花々しくスタートしたのであった。

一、年輪

天王寺時代

中学一期生　島津雄次

日本の年輪風雪二十年というのが最近のテレビ番組にあるが、池高が今年で創立二十周年を迎える事は私たちにとって全く感無量である。池高の年輪一年目、昭和十五年入学の一期生も今は三十を過ぎたオッサン、いや紳士になっているが、かっては現新中の一年生と同じ年齢の純な童顔生徒であった。それにつけても彷彿と想い出されるのがあの入学試験、風雲急なる社会情勢下、口答試問の将来の希望の質問に対しても「はい僕は軍人になり、お国の為に尽くします。」と子供らしく？おどおどと、そしてきっぱりと答えたものだ。今から思えば真にいじらしい限りである。その口答試問場が現在の大阪学大（旧天王寺師範）の二階であった。当時入学難を緩和する為か府立の中学校が足りなかったのか知らないが、府下にもう一つ府立中学ができて、それが布施市かそれとも池田市かどちらかということで私たちの父兄間で相当気をもんだらしい。幸い池田市に決定されたものの、校舎がなく、一期生全員は天王寺の聾唖学校跡オンボロを頂戴して一年間はゲートル巻きの電車通学二年目にやっと現池高の地に移転したが、これ又園芸学校のオンボロ校舎の払下げ、二期生入学で一学級百余人というスシ詰め教室であった。先日天王寺に行ったが昔の聾唖学校は戦災で跡形もなく町は一変し、昔なつかしく思ったのは一期生の乗り降りした城東線寺田町駅のみだった。

（池田市立池田小学校教諭）

岡辺の緑

中学一期生　野田三朗

「岡辺の緑薫る風」これは旧校歌の一節ですが、承風台はそのことば通りの丘でした。昭和十六年の春、野草の生い繁った旧校舎に佇んだとき、みじめな建物に対する幻滅と失望を救うように、私達の琴線に楽しいハーモニーを奏でて過ぎたあの風の薫りは今でも忘れることが出来ません。今庭球コートになっている処にはクローバーが密生しその絨毯の緑を一きわ引き立てる様にレンゲの花が咲き、屋外授業を受ける車座の人の肩に、紋白蝶が止まっては離れたあの時の印象は土の香りと共に忘れ得ない思い出の一つであります。

校長室の横に銀木犀の木があって、秋には仄かな香りをただよわせ、日暮の坂道、家路を急ぐ後からシャンシャンと鈴の音を鳴らして追い越して行った乗合馬車の情緒も、もう今では見られないものの一つでしょう。その年の十二月玄関前の校庭で対米英宣戦布告の放送を整列して聞いてから二三年、級友の中から軍関係の学校に入学する人が増え、校門前の坂道を両側に並んで先生方の出征を見送る回数が重なるにつれて、激しい時代の渦の中に巻き込まれていくのを身に泌みて感じたことを覚えています。一期生から三期生まで、紅白二軍に別れての剣道の野試合、雨の中、両腕に銃を支え泥にまみれて匍匐した苦しい教練、激しい駈走訓練等々、良かれ悪しかれ承風台につながって、誰もが持っている思い出であり、これからも亦、幾多の想い出が刻まれるであろう永久の丘、承風台に栄光あれと祈る次第であります。

（大阪造酢KK）

戦時下の学校生活

中学二期生　中野慶之

〝胃の強いやつは文学が判らない〟と漱石が胃弱を誇ったように、身体が強くないということは僕の誇りだった。池中に入った最大の理由は、乱暴な上級生がいない、配属将校がいない、ということだった。

〝学校にカメラ持参はいけない〟　〝外出は必ず編み上げ靴で〟　〝映画は両親同伴でも不可〟　〝飲食店出入はまかりならぬ〟という禁止ずくめの池中だったとは言え、府下ではゲートルの着用が最もおそかった学校ではなかったか。その池中も、太平洋戦争が始まると、英語の教科書のネルソンの課は糊づけにして読めぬようにされ、楠正成、金剛山を礼拝する教師が精神教育をし、直流と交流のわからぬ数学教師が物理を教えるようになった。それもまだましだった。無残にも戦時色の権化、配属将校が〝天皇陛下の命により〟やって来た。

中尉殿の彼はしばしば教員室を出、運動場の傍らにテントを張って〝にらみ〟をきかした。中尉殿が連隊でどの位偉いか中学生には判らなかったが、ドウモウな顔は威嚇するに十分だった。教練の前の授業は教練用白ズボンにはきかえて受け、授業終了十分前ともなると教室はざわめいて生徒はゲートルをつけはじめる。〝学校は教練を受けること違うんだぞ〟と言っても、生徒を責められなかった先生、英語の柚山先生だった。〝せや、せや〟と喜んで和すのが生徒のせめてものレジスタンスだった。

今にみろ、大尉や少佐になってやるから、あいつをドツイたるからという気持は誰しもが抱いたことだろう。

四年生になると勤労動員で工場行き、それから陸士へ。

少尉にも任官しないままに終戦になって、やっとまともな姿に舞いもどった私ではあった。

（毎日新聞社）

軍事教練

中学二期生　山本家道

陸軍将校が本校に配属されて来たのは、昭和十八年だったと思う。それまでは左程苦しいとは思わなかった学生生活が、それを曲り角に、厳しい苛酷な兵営生活に一変したように感じられた。例えば朝礼場で宮城遙拝をする際、最敬礼の角度が足らぬという理由で、一生徒はその将校に軍刀で殴打され、その場で昏倒したのが今でも私の印象に強い。これ程でなくても、厳寒に三時間運動場に正坐させられたり、皮手袋で平手打ちされたりの例は枚挙にいとまがない。二年生になって銃が与えられてからは、放課後の手入れが悪いといっては上級生の叱責を蒙った。それから印象に残るのは、池中―産業道路―宝塚―六甲―有馬の往復行軍である。装備は三八銃、軽機関銃、背嚢である。帰途校庭で分列行進の時は全く他人の脚を引きずる思いであった。銃剣術も盛んであった。我々の面白かったのは綜合演習と称する、呉羽の里から石澄川に至る野畑を、仮想敵を設けて突撃する演習で、流石に若い血潮が燃えたつ感激があった。銃に剣をつけて最後の突撃をする痛快さは、それが人殺しに通ずるとは考えもせず、ただ何かを破壊する原始的な喜びであった。

今平和な学園にいて、曽ての武器庫の辺りから、美しい男女混声コーラスが流れて来ては、今昔の感にうたれるものがある。

（本校教諭）

中学時代の思い出

中学四期生　四方達也

我々が池中生活を送ったのは戦争末期から戦後にかけての、非常な波乱変転に富んだ時代であった。

入学早々、ピンタ付の軍事教練に小さい胸を痛めた一年時代、夏休みの宿題が飼料用の干草五貫といった二年時代を経て、授業放棄、勤労動員でハンマーを振るった三年の半ばで遂に終戦。再び学校に戻った時には校舎は戦災で半ば焼失、机、椅子等も殆ど無い為、教室の板の間にあぐらをかいての二部授業が始まった。食物も極端に不足し、弁当も満足に持って行けぬ様な有様であったが、それでも我々は楽しかった。勉強と運動の出来る普通の中学生活が戻ってきたからである。

その頃誰かが大きい古机を見つけ出し、真中に板切れを

置き、板片でピンポンをやり始めると、私達はたちまち休憩時間を待ちかねて集まったものであった。

その中に、比較的熱心な者が、お互にネットやラケットを工面したり、台にラッカーでラインをひいたりして、毎日放課後も練習し始めるようになり、私も時間のたつのを忘れて遊んだ。別に指導者もなく、用具も極めてお粗末であったが、熱心というものはえらいもので、翌二十一年には初めての対外試合に神港商業に完勝し、又二十二年の国体の代表となった日大附属中学に惜敗したりしたが、これらすべて今は忘れ難い懐しい思い出である。

（住友化学工業KK）

勤労奉仕の頃

中学五期生　井村英夫

上級生の工場動員に較べると我々の方はまあ日傭という有様、昨日は細河今日は尊鉢明日は猪名川、それ程極端でもなかったが。当時あんな年少者の僅かな労働力を利用しなくてはならぬ程窮迫していたのかと後になって驚いた。石橋陸橋横に集まり、トラックに満載されて細河東山方面で夕方まで山を掘って（地下工場が出来るとか言った）握飯一個支給されて（これが楽しみ）またトラックでお帰り。正直この仕事は捗らなくてガッカリだったが別の喜び即ち学校の授業、殊に教練が抜ける点から我々の方も満更でもなかった。一方猪名川の中橋下で灌漑用の堤防築きの時は、夕方帰る時にもう川の水がどんどん灌漑用の溝の方へ流れ込むのを橋の上から眺めることが出来て嬉しかった覚えがある。そんな喜びの外に世間学か雑学か、断片的な知識と言われればそれ迄だが、とにかく社会見学という意味も大いにあったようで、細河の植木が食糧生産に転向させられた当時にもなお人々の植木を大事にする心が残っているのを感じたり、また疎開家屋の取壊しを手伝ったときには、網に大人何人もかかって家の柱組み一つ倒せないのを見て安心したり（地震に対して）、また防空壕の中で先生に空襲下の赤裸々な人間像とか、当時既に盛んだったヤミに関する人の心とか、今で考えても頭を悩ますような問題のお話を伺った記憶もある。十有余年の昔になるが、ああここにも来た事があるなと思って通るなつかしさである。

（本校教諭）

B・I—美化委員—

高校二期生　原　武

BIと云えば昭和二十四、五年頃在学して居られた人な

ら、「ああ掃除の好きなヤツの集りか。」と想い出される方も多いでしょう。何がきっかけで出来たのか—多分二度目の母校の火災後のみじめな状態がたまらなかったのでしょうが—今ではもう記憶もありません。同期の細見暁、東谷寿、三期の山名利三郎、古荘杏子、今は山名君のベターハーフ相田幸子さん達が一緒で、毎日放課後の掃除を手伝ったり、机や椅子の修理から校庭の道作り迄、正直なところ好きが半分とやり出したら引込みがつかなくなったので遂に卒業後も二年間続いてしまいました。当時夜勤の明けに登校し、次の勤務中居眠りをして上司にお目玉をくらったのも十年以前の想い出。又阪大北校に在学中の細見君も、山を上って来ては金槌と鋸を持って校内をうろついていました。ですから彼の手にかかった机や椅子は、或は幾百とあったかも知れません。それに窓ガラスを入れるのも彼と山名君の仕事でした。大きなガラス板を抱え、破れた所を見付けては実に根気よく嵌めて居りました。最初一枚のガラスを入れるのに二枚位切り損っていた彼等も、次第にガラス切りを器用に扱っていましたから結構学校も元をあげた事でしょう。今から思えば厚かましく立ち入ったBIにも、当然私達の耳に入らぬ批判はあるべきでした。しかし結局全校の協力をいただき最後まで気持よくこの仕事が続けられた事はむしろ美化運動に携った者こそ感謝すべきでした。何故なら私が承風台から社会に送り出されて十年を経た現在、池高生活の中で最も大切なものを与えてくれたのは箒と雑巾、金槌と釘だったと思うからです。実に平凡な人生を送りそうな私のような者にも小さな創造の喜びが、とかく崩れそうになる心の絆を引きしめてくれるからと謝しつつ、多くの卒業生諸兄姉と共に校史二十周年を心から祝いたいと思います。

（大阪税関）

思い出はみな楽し

高校二期生　谷口和覧

私達二期生は合計六年を現在の池田高校ですごし、昭和廿五年に卒業した。戦時中から戦後まもなくのことだから何かにつけて物がなく、今になるとおかしいことも多いが当時は生徒も大真面目に色々やった。当時のことは同期生の井村英夫先生がよく御存知で池高新聞の十周年記念号にも面白い記事を書いておられる。制度が変わって高校になってからは、次第に世間もおちつき私達も随分楽しく過ごした。むろん現在程には進学や就職のことで脅かされることもなかったが、私としても池高新聞の編集やら、野球部のマネージャーやら（私は今でも当時のチームは大阪のベスト4に入る実力があったと信じている。）自治会の小役員やらで殆んど休日なしに登校し、面白いことも多かった。し

かし、最も印象にのこっているのは、昭和廿四年二月の火災後の生徒大会である。あの生徒大会は、時間こそ短かったが、切実な意見が交換され、全員の感動をうけ、更に事件後、殆ど一年もつづいた生徒の静かな努力をみちびいたのである。平常一癖ある連中が皆協力して焼跡整理から建設へと努力したのは素晴らしかった。そしてまたそのころは各クラブが、すぐれた成績をあげはじめたころでもあった。現在診療と研究に多忙な日をすごしているが、折々私はいがぐり頭の高校時代をなつかしく思い出すのである。

（大阪大学医学部精神神経科）

サッカー全国制覇

高校二期生　藪　洋一

一九五〇年正月の六日はどんよりと曇った日であったが、西宮球技場は当時の在校生の殆どが応援に馳せつけ、寒さに吐き出される息が緊張につつまれていた。全日本高校選手権大会の決勝が行なわれる日であった。そして我々はこの日、優勝の栄冠をかちえた。応援席の乱舞、選手の感激。

しかし、この日に到達する迄に二、三の例を除いて特記されるべきエピソードはなかったし、特に全国的に名をなした選手もいなかった。優勝の原因としてはチーム・ワークという潜在的要素を発見出来るだけで、これが暖かい全校の目に育成され見事実を結んだという事以外は表現の方法をしらない。事実、我々は朝から夕方まで四六時中行動を共にし、日曜日でも時には大試合を見て、これを批評し作戦を研究して早速練習時に実行した。練習方法は矢野部長の方針に従い、所謂半強制的猛練習を避け、主将の下、節度を保ち研究をしながら短時間に能率のあがる練習をした。これは苦しいながらも楽しい瞬間でもあった。我々青春の意気盛なものにとっては、圧力的な練習を強要される必要はなかったのである。こうして我々はサッカーを練習しながら火災後の学校再建には積極的に協力し、その邪気のない明るさは皆に親しまれていった。とかく運動部の連中は気が荒く一般の生徒とは疎遠になりがちのところ、我々は全校の人々に全く溶けこんだ存在であった。十年の時差は世の中を変化させ、大学入試の競争も数倍になった。従って高校生は自然自己の中に閉じこもらざるを得なくなっている。しかし、若し運動部は強制的猛練習を要求するという観点から脱却し、二時間程汗を流す気があれば、精神的肉体的健康の上からもプラスする点があると考えるのは、これ所詮十年前に適用された法則にすぎないだろうか。勿論自己を制御出来ない人は問題とならないが——。

（安宅産業KK）

伝統樹立への努力

高校二期生　木下正利

私が池高を卒業してから、もはや九年余の歳月が流れました。中学四年間、高校二年間、合計六年間池高に在学し、戦時の軍国主義的な池中から戦後の民主主義的な池中、池高へと混乱期を過ごして来ただけに、本年四月に池高が創立二十周年を迎えると聞き、全く感慨無量の気持がします。

戦時中の空襲で校舎の大半が焼け、それもやっと復興したと思ったら、放火で又もや校舎が二棟焼けるという事件が起こりました。当時は戦後間もないことで、府の教育関係予算も少なく、池高が廃校になるかも知れないという噂が飛び、在校中の職員生徒が一丸となり、関係官庁へ陳情に行ったり、生徒全員が色々なアルバイトをしたりして、校舎復興の寄附金を集めました。その努力が認められたのか、無事校舎が復興されたのですが、今となって見ればこれも本当に楽しい思い出となっています。

我々が在学していた頃の池高は、創立後日も浅く、学校の伝統もありませんでした。それでも、我々当時の在学生は良い伝統を打ちたてるべく、我々なりの努力をしたつもりです。在学生諸君は、池高の発展の鍵を諸君が握っていることをよく認識して、学問にスポーツにあらゆる面で努力を払い、池高に良い伝統を打ち立て、年を経る毎に池高が進歩発展して行くことを望んでいます。

創立二十周年を期として、職員、在学生、卒業生が一致して、池高をより良い学校へと発展させて行こうではありませんか。

（三菱日本重工業KK）

共学開始のころ

高校三期生　山中英男

男女共学についていろいろと取り沙汰されていた昭和二十三年の春まだ浅い頃、当時校長事務取扱であった大川先生が、全生徒に訓話された。

「……女学校側の父兄の中に、こんなことを言った人がある。『中学生と女学生を同じ学校に通わせるのは、狼の前に子羊を差し出すようなものだ』と。しかし、わたしはそうは思わない。女学生が子羊なら、諸君も子羊なのだ。」

先生のお話は熱を帯び、私たちは「おおかみ」呼ばわりされたことに胸を痛め、かつ、憤慨した。そして私たちを信頼し、かばってくださる先生の言葉に感謝した。

「しかし、共学になって、失敗でもしたら狼だと言われ

てもしかたがない。だから各人自重して行動するようにしてもらいたい。」

新学年が訪れ、新しい教育制度による最初の登校日がやって来た。

私は、期待と不安を胸に抱いて校門をくぐった。そして女学生たちの姿を見た。桜の花の下に、十五六人の女学生が群れていた。セーラー服の背に緑色の三本線が美しい。この三本線は「十四」と呼ばれた府立豊中高等女学校の象徴であった。そして池中生は「十四」のファンであったからだ。

授業に際して、男女は教室の右側と左側とにはっきり区別して坐らされた。生徒は大いに不満であった。すぐこの席の取り方は改められ、男女の区別は廃止された。私の席の前と右隣が女生徒になった。

なにしろ有史以来のことなので、学校当局は頭を悩ましし、男女生徒の親和を図るため、フォーク・ダンスが指導されたし、学校をあげて共学を軌道にのせる努力が払われていた。

こうしたある日の放課後、先生・父兄・男女生徒代表による男女共学についての意見交換が行なわれた。

父兄側の発言は、頭から男女生徒間に恋愛関係の生じることを恐れて、ヒステリックに恋愛に反対する者が多かった。会場の空気は重苦しく沈んでいた。

女生徒のひとりが立ちあがった。

「お父さんお母さんがたは、わたくしたちが、きっと過ちを犯す悪者のようにおっしゃっておられます。しかし、共学はまだ始まったばかりで、問題は、これからにあるのではないでしょうか。本当に好きな人と結婚するのが、なぜいけないのですか。」

先生方は顔を見合わせた。父兄たちはあっけにとられた。しかし、これによって、会場のやりきれないふんい気は一度にぬぐい去られて、なごやかな空気が漂いはじめた。父兄たちは、かれらがあまりにも共学そのものの形にとらわれていて、問題が、自分たちの子供ひとりひとりのことであることを、つい忘れていたと悔いたのであった。

（トヨタ自動車工業KK）

多感なりし日

高校三期生　松下セツ

池高からの通信が届くと、すぐ、あの長い桜並木の坂道そして男女共学であった事等が、浮かんできます。丁度四月の半ば葉桜になってしまった時期に、やっと元池中へ行く様になったのでした。男生徒って不潔で、粗暴でと思いながら、一面どんなものかしらという好奇心を持って、

学校へ通い始めたのでした。始めはお互に物珍しく教室の両側から眺めあっていた状態から、共に掃除をしたり、席の近くの人達や、課外活動で一緒の人達と喋り合うにつれだんだん見直す様になりました。勿論どちらも猫を被っていたのでしょうが、言葉使いも「…して下さいますか」「…ですか」等近くに寄っても一向に昔の中学生にあった匂いもなく、頭髪も髪をなでつける時間があったら勉強をと先生のお小言を聞く位で、汗じみた服装もみかけなかった点で、私の予想に反したものでした。共学にもなれ、男生徒と接する機会が多くなるにつれ、感心する事も現われて来ました。運動会の準備の時でしたか、アーチ一つ作るにしても、見ている間に材木を切って立て、飾付もまたたく間に出来上る有様。これが女ばかりであれば、まず力仕事の出来ない所は、誰れかに頼まねばならず、頼む人を決めるのに、しばらく考えやっと決まって出来上っても、今度は飾付となると、字を書いたり、絵を描いたりするのに、返事一つで書く人は少なく、一度ためらってから仕事にかかる。こんな事を考えてみると同じ仕事をやるのに二倍から三倍の時間が費されるのではないかと思った事がありました。その他お花を活けるにしても、男生徒の場合は、この枝を強調したいと思う時は、他の枝は未練もなく切り捨てる大胆さに驚いたものでした。それがよく出来た場合は新鮮なよい作品となるが、反対の場合は格好の取れないものになる。一方女生徒の場合はあまり奇抜なものも少ない代り、一応同じ様なレベルの作品を作る様で、こういった傾向は他の方面にも見られる様でした。色々の事を見たり、驚いたりしながら影響を受け大きく変化して行ったのは女生徒の方だったようですが、感じやすい年頃に最初の男女共学という体験をしたものにとっては、内面的には刺戟の多い変化に富んだ時期であった様に思っております。

三　とせの月日

高校三期生　石沢小枝子
（旧姓　内海）

春浅い薄曇りの日でした。緑のリボンのセーラー服を着た私達は、校庭の片隅で乗てられた子の様な頼りなさと寂しさに捉われ、訳もない不安に誰一人高声で笑おうともせず、もやもやとかたまって話すこともなく荒れた校庭をそっとうかがって居ました。それはこれ迄見馴れて来た豊中高女の手入れの行き届いた恩露園や、恵風園と何という違いだったでしょう。伸びるにまかせて枝をひろげた桜の大樹数本の他、木らしい木もなく、運動場には時々吹いて来る冷たい風に黄色のつむじ風が巻き上っていました。放り出された様な号令台、風雨に曝され木目のとび出た物置の様な小屋、兵舎の様な色彩のない校舎……段々落付いて来

た私達の目に映るそれらのものは、又しても、昨日迄通っていた豊中女学校の寄木細工の様な磨きたてた廊下、茂った木々の影を映す一枚ガラスの窓を思い出させて、泣虫の人は涙さえ浮べはじめるのでした。

その時、捨猫の様な私達の一群に、背の低い肩のがっしりとした青年が、いかにも決心したという様に確乎とした足どりで近づいて来て、男子の学生と対面式をするからどうか中に入ってくれる様にと落付いた口調でいいました。その黒い顔に印象的な白い歯は青年の質朴さを思わせ、私達は相談するともなく顔を見合わせ、やがてゾロゾロとこれから私達の母校となる池高に足を踏み入れたのでした。何の飾りもない体育館の壁に、墨黒々と女生徒への歓迎の辞を書いた紙が貼ってありました。肩を抱き手をつなぎながらそれを読む私達の心の中に、その言葉は温かいものを吹き入れました。その中に敏感に好意を読みとって、固く閉じられていた臆病な私達の胸は、用心深く徐々に開きかけ、これを書いた男の生徒達に微かな好奇心を覚えたのでした。

対面式は号令台を中にして、まだお互に心を許し合わない男生徒達と女生徒達とを向き合わせぎこちなく行なわれました。先生達も何となく戸迷ってうまく事が運べない様子でしたし、男生徒も女生徒もお互に好奇心は持ちながら相手の方を見る事が出来ずモゾモゾしていました。昔は何となく愉快だったのですが、それをおもてに表わす事が恥ずかしくて出来ずにいたのです。ですから先生のちょっとした面白い言葉にも皆一々楽しそうに笑いました。小学校の頃から男女別々に教育され、中学と女学校の通学道さえ別々に定められて、道で中学生にすれ違う時はうつ向き、そうして十年間も過ごして来た私達の世代があの時感じた戸迷いと気恥ずかしさ、未来への明るい思いを、今の高校生達は想像も出来ないでしょう。

とに角、こうして男女共学は始まったのです。殺風景な教室に額が吊るされ、花が飾られ、庭に男女協同の作業で花壇が作られ、運動場では、汗とほこりにまみれた一群がラグビーボールを追う傍らで、肢体も伸々とダンスを踊る女生徒の姿も見られる様になりました。学校全体が活々と活気に溢れ、もはやここは女生徒達にとっても荒涼たるなじめない兵舎ではなくなりました。

私達に尚一層愛校心を深めたのは池高の火事の事件でした。あの火事の翌朝、息を切って続々と登校して来た生徒達は、無残に焼け崩れまだくすぶりを見せている校舎の残骸を見、ひどいショックを受けました。それはボロながらも昨日まで愛着をこめて磨いた机であり、床だったのですから。焼け残った体育館で早速開かれた生徒大会で生徒達は緊張して今後の対策を討議をしました。学校の指示に従って明日から焼け残りの校舎で二部式に授業を受け続ける

かそれとも、さし迫った試験を暫く延期してでも全校生徒で再興のためのアルバイトをするよう提案しようか等という事だったように記憶しています。その時どこからそんな風説が伝わったのか「女生徒は帰りたかったら元の桜塚へ帰ったらいい」等という声が立ち始めました。何か女手に出来る事で力を合わせて池高の再興に努めたいと思っていた私達は、その声に涙さえ流して抗議しながら、ひしひしと私達が池高を愛している事を改めて感じたのでした。どうしてそういう事になったのか詳しい事は知りませんがその後皆は協力して街頭でマッチを売る事になりました。火事で焼けてマッチを売るというのは何だか可笑しな事でしたが、その売上げを復興資金の足しにするという訳でした。雪のチラつく中で風にさらされて、マッチ売りの少女さながらマッチを売りながらも、私達の心は誇り高く、母校愛に燃えていったのでした。（大阪音楽大学講師）

タッチフットボール全国制覇

高校三期生　長　手　功

わがタッチフットボール部は昭和二十五年春季近畿大会に、宿敵奈良高校を降して優勝を遂げたので、是非とも全国制覇をとげたく思い、春にも増して激しい練習の必要性が痛感されました。そのため夏休みには修学旅行も返上して西能勢村の月法寺に合宿して、血みどろの練習にはげんだ。しかも、食糧事情のよくなかったその当時、一日百円の食費での自炊は頭痛の種であった。が、苦心しながらもこの合宿で一同大いに技術の自信をつけた。

所が一方、迫り来る受験の不安から秋になると練習参加者が減少するという事態が発生した。

しかし何とか欠けた所に下級生を補充して十一月八日西宮球技場で奈良高校を倒し、更に十二月十日、甲子園パウルに於て慶応高校と対戦した。さすが慶応のプレイは洗練されていた。こちらは先取点はしたものの、その直後八〇ヤードの独走をされて顔色を失ったこともあった。しかしよく15対6でこれを破って優勝した。全国優勝！、この感激！、苦しかった事、楽しかった事、全てが走馬燈の如く脳裏に現われて感激の涙と共に消えていった。

池高卒業以来早や九年、実社会の一員として生活している私にとって、高校時代のこのスポーツと受験勉強の困難さを如実に味わいながらの全国優勝は、いつまでもよき生活の指針として心の糧となり、日々の生活を豊かにしている事を何よりの幸福と感じております。

（大正海上火災ＫＫ）

自治会諸法の改正

高校四期生　細　見　英

私が池高（その当時はまだ池中）に入学したのは終戦の翌年、昭和二十一年のことですが、それから御厄介になった六年間というものは、全く激動の時代といった言葉がピッタリするような時期でしたから、それだけ色々と思い出も多いわけです。

当時の池中は、すでに全国にさきがけて、二十二年にスクール・シティ（映画にもなった「少年の町」をモデルにしたもの）という制度が実施され、府下でも、最も自治会活動の活溌な学校でした。だから役員の選挙なども、なかなか活潑なもので、私が会長をつとめた高校二年の後期（昭和二十五年～六年）でも、会長の対立候補は一人だけでしたが、書記会計にいたるまで、ずらりと候補者が並んでさかんな選挙戦だったようです。私がその時に公約したスローガンは、「共済会の設立」「校内放送の設置」「会則改正」「校歌制定」等だったと思いますが、一番大きな仕事は会則の改正、つまり現在のような三権分立の自治会をつくるということでした。改正案は全校投票で何度も否決され、その意義を全会員に理解してもらうのは大変むつかしい仕事でした。だが反面この改正によって機構が複雑化され、役員候補難の状態が生まれたのも、受験難その他による一般的消極的風潮だけに帰することはできないかも知れません。

あの頃の私達はアンシャン・レジームからの解放感という大きな支えがあったために、「アプレ」と呼ばれるような無軌道な面（それは、最近の〝怒れる若者〟とはまたちがったものでした。）と共に、一旦意気に感じると、損得ぬきで一所懸命になるような可愛いい所がありました。クラス新聞の発刊や清掃コンクール等ほほ笑ましい思い出ですが、特に、二・三号校舎の焼失後の焼跡整理やマッチ売りの思い出は一生忘れることはできないでしょう。

（立命館大学大学院）

あ　の　頃……

高校四期生　藤　原　晴　江

あの頃からもう十二年……、今こうしてペンをとっていると、その頃の事が、記憶の底から遠い夢のように途切れ途切れに浮かんで来る。

昭和二十三年、教育界を吹きめぐった嵐―学制改革・共学の実施・男女生徒の交流―の中に四月も半ばの一日、私

達は始めて「承風台」の地を踏んだ。この急激な変化がまだよく納得できず不安でいっぱいの私達の上におっかぶさるように、その日の空は暗くどんより曇っていた。登校道の桜は既に散り、がらんと広い運動場と雑然と並んだ校舎が無表情に私達を迎えた。そして案内された道場（ここが体育館兼講堂であった）には、壁にずらっと張り紙がされ、「女生徒を迎えるに当って、我々は女生徒を妹と思い、紳士的態度を以て接し……自治会」とその心得が大きく小学生のような字で書かれていた。先生方の紹介と御挨拶、私達を迎えるお言葉の後、大川先生の「わしゃ何にも女の子なんかに来てもらいとうはないんですぜ。こんな面倒なことしとうないけど、命令やから仕方がないんや」との御挨拶に少しいい気持になっていた私は半ば落胆し、半ば憤慨した。

こうして私達の「丘の生活」が始まった。朝、男子に「おっすー」と声をかけられて面喰ったのも束の間、私達はどちらからともなくおしゃべりを始め、一緒に学級文庫を作ったり花壇に花を植えたり、適度に競争心も燃やし、時には喧嘩もした。当時北館は焼跡に建てられた急造のバラックで、廊下の窓には一枚のガラスもなく、ボール紙の天井から雨がもったりした。参考書は勿論教科書すら満足に揃わず、「君英語の本がないって言ってたからその辺に落ちてたの拾って来た」と表紙のとれたリーダーをもらったこともあった。しかし私達の心は若い夢にふくらんでいた。学制は改革されたばかりで共学の行手はもやに包まれていた。が、私達はその中に新鮮な息吹きを感じていた。自分達の手で新しい学校生活を築いて行くのだという自覚と誇りを抱いて歩んで行ったのである。

（福島高等学校教諭）

男女共学時代の思い出

高校四期生　桑木琢子（旧姓　上坂）

今を去る十二年前の春、何だか妙に寒々とした丘の上の池田高校へ、私達一団の女生徒が、旧豊中高女から、泣く泣く集団移民をして参りました。なみいる男生徒ばかりの、がみつい視線を感じながら、私達は教室の片隅に、いともおしとやかに入って行きました。

この頃から、俄然男生徒諸氏のズボンはピンと折り目がつき、カッターのしわものびた事と思いますが、稀少価値を看板に、随分私達も気ままにふるまったものだと思います。けんかをしたり、「女権」をふりまわしたり、甘えてみたり――今にして考えれば、あの頃は楽しかったという思い出ばかりです。昨今、時折道で出逢うかつての同級生達も、各々十年前のいたずら気をどこかにひそめながら、

紳士淑女然と澄ました顔で歩いています。

共学のおかげで、私達は以前にも増して、おてんば娘になりましたけれど、その反面、学習面では大いに啓発され、合理的で科学的な頭の働かし方を、いささかでも学ばせて頂いたように思います。社会へ出ても、男性を見る目が出来ている、とまではいきませんが、少なくとも対等に話し合えるという事は共学以前の女性から見れば、大へんうらやましいことだろうと思います。

当時、終戦直後の混乱期であったにもかかわらず、とりわけ不安定な私達をよく導いて下さった先生方に、改めて深く感謝致して居ります。

（箕面市立箕面北小学校教諭）

制度の谷間

高校五期生　阿閉成美

十年ひと昔と云いますが私が池田高校の校庭に初めて足を踏み入れたのは丁度十年前の二月のまだ寒い日でした。兵庫県からの越境入学で入学願書をもらいに行ったのでしたが、その日まで学校がどこにあるのかも知らず池田駅で下車するものと思っていました。その入学試験は、新制中学からはじめて受験する劃期的なものでしたが当時はまだそれ程周囲がさわがなかったこともあって、試験当日ゴムマリを用意し休憩時間の遊びを考えていた程で、今から考えるとのんびりしていたようです。

新制中学をでた私達は、入学直後、旧制中学から高校に進んだ一年上級の先輩たちとの間には随分学力の差があると、先生方に言われて一時は劣等感に悩まされて困りました。次第にそれも薄らぎ、互いに友達が出来るに従い学校生活もたのしくなってきました。しかし片道二時間近くかかる遠距離通学をしていた私は、当時活溌だった自治会活動に参加する余裕もなく三年間を過ごしてしまいましたが今になって非常に残念です。

入学当時は校舎も貧弱なものでしたが私達が過ごした三年の間に現在の本館、体育館が続いて新築され年々充実していく環境のなかで、恵まれた三年間を過ごすことが出来ました。

ただ一ついやな思い出は、当時電車の延着が多かったため、学校までの坂道をかけ足でなんべんも登ったことで、そんな時は、坂道が非常に長く感じられました。

いずれにしても、制度の変更期に育った我々は、何をするにしても、先輩と比較される不利にありながらも、結構高校生としての実力を養成されたもので、何もかも今はなつかしい思い出です。

（野村証券KK）

自治会のことども

高校六期生　西　田　進

朝礼の時である。「只今から共済会々長の金井継一郎君を紹介します。」と自治会執行委員長になったばかりの僕が役員を紹介すると、突然、前の一年生が笑い出した。不審に思いながら「共済会と申しますのは、我々の力で、お互に助け合って……」と説明しても笑い声が絶えないので当惑していると、当の共済会々長が僕に耳打ちして、「共済会を恐妻会と間違えているのだ」と云ったので、思わず大笑いした事があった。今から八年前、確か昭和二十七年後期の事であった。

委員長選挙の時には、盛り沢山な公約を掲げて華々しい選挙戦を展開した。公約は見事だったが、その実行はなかなか捗らず、副委員長の細見茂君と一緒に苦労したのであった。公約通り新しく設けた定例生徒集会は、文化講演会とも言うべきものであったが、一般の評判は必ずしもよくなく、エスケープする者が多かった。文化部の予算を、運動部と同額にまで引上げるという公約は、僕自身ハンドボール部に入っていたから、運動部は金がかかるという事をよく知っていただけに、実現はむつかしかった。

校歌の制定は歴代委員長の公約であったが、僕の時には校内で歌詞を募集したが、決定までには至らず、次期の自治会（半林君が委員長だったと思う）の時になって、「空の広さに胸をはる……」という現在の校歌が出来たのである。

当時の自治会は三権分立と称して、執行委員会と議会と審議委員会とから成る複雑なものだった。その為、自治会の役員になる人が不足していたので、一番暇な審議委員会を廃止するというのが、公約の一つだった。そこで審議委員長（当時、岡本康君だった）は自ら「審議委員会は廃止すべきである」という演説をやらねばならなかったが、今思い出すと、どう考えても滑稽である。

僕が三年生になって執行委員長をやめてからの事であるが、池高の自治会活動について忘れられぬ思い出がある。今頃でも池高時代の友人と会うと話の種になる、例の「ニクソン事件」である。当時アメリカのニクソン副大統領が国賓として来日し、大阪空港から国道沿いに自動車で通るので全校生徒は、その日午前中、学校を休んで道中にて出迎えるようにとの学校の指示に対して、生徒大会を開いて抗議をしたという事件である。ニクソン氏の出迎え、当日、審議委員の鈴木淳夫君や僕たち数名は、学校の校門の所で生徒大会を開く為の署名運動をした。大勢の協力があったので、自治会々則に定められた必要署名数を上まわ

る署名が得られ、執行委員長は生徒大会の開催を宣したのである。所がその日授業中に、署名運動をやった生徒と自治会の幹部は、金子校長先生の許に呼ばれ、生徒大会を中止するように云われたが、自治会顧問の先生の仲介もあって、「大会では何らの結論を出さない」という条件付で、大会は許された。さて大会の蓋をあけてみると、生徒の中にも、ニクソン出迎え賛成論者がいたり、ニクソン来日とMSA援助の関係を説明して、日の丸の旗をふって出迎えに行った生徒に注意を与える先生が現われたりしたが、始終教育の場として恥ずかしくない真剣な討論が繰りひろげられた。今まで、学内の問題しか考えていなかった自治会が、学校教育と密接な関係にある政治というものを認識するようになったのは大きな収穫であった。お蔭で、大会終了後、校長先生から「今日は、いい社会科の学習になりました」とお褒めの言葉を頂戴して、ニクソン事件も幕となった。懐かしい池高時代の思い出である。

（東芝電気KK）

高校時代の思い出

高校七期生　中谷義孝

昭和三十年三月、水ぬるみ初める頃、三年の夢を尽くして懐かしい学風の雰囲気から押し出され、校門を去ってより早や五年、とぎすました刃の如く鋭い社会に一サラリーマンとして暮らすのは、或る観点よりすれば、不安であり悲哀でもある。

が、それにつけても思い出されるのは楽しかった池高時代である。それは、私の今迄の短い人生に於ける最も過渡的な、不安と希望のこもる時期であった。未完成であるが故に自己に嘱目する所も大きかったし、若人らしく純真な、そして真摯な歩みを続けることが可能であった。しかし残念ながらこの面の思い出はあまり記憶にないように思える。むしろ反対の側の思い出は数多い。

忘れもせぬ七月の夏休み前、私はよく授業中居眠りをしたものだ。いや私のみならず、隣りのK君も屢々コックリコックリとやらかした。そこで二人は眠魔退治法として、互にゆり起こし合うという相互協定を締結した。

或る時、K君がいくらゆすっても目覚めずにいたので、どうをにやした私は、テキストを丸めて頭をポカリとやった。この音が、静かな教室に鳴り響いた。国語の岩田先生は丁度その時、黒板に向かわれていたが、「今の音は何だ。」と飛び上がらんばかりに驚かれた。これなど、今でも非常によく憶えている。それから机をパレット代用にして、大川先生に耳をひっぱられたのも今となってはなつかしい思い出である。

しかし、何と言っても私の脳裡に焼きついているのは、受験を真近かに控えて、私達が灰色の生活を送っている時、メガネの奥の温厚なまなざしで、私達を正しく導いて下さった担任の加藤先生のことである。先生の御恩は全く私の文章ではつくすことが出来ない。今この機会にそのことを記すことが出来る事は、私にとって最大の幸福であり、喜びである。

最後に、池高が、あの田園的な独特の校風を失わずに益々栄えんことを祈りながら、ペンを置きます。

（住友銀行）

新桃花源記

高校八期生　垣内真子

晋太元中、武陵人捕魚為業。緑渕行、忘路之遠近。忽逢桃花林。夾岸数百歩、中無雑樹。芳華鮮美、落英繽紛。……

岩田先生に漢文を教えて頂いたものなら、必ずこの「桃花源記」をなつかしく思い出すに違いない。あの心臓破りの徳永の坂を登りきると豁然として視界が開け、「土地平曠屋舎儼然。有良田美池桑竹之属。阡陌交通、雞犬相聞。」という平和なくれはの里が眼前に開ける。そこが古への帰化人秦氏の桃源であり、今は我々の心の桃源―承風台である。

僅か四年前の事にすぎないが、その頃の承風台は確かに桃源の趣を多分に残した美しい丘であった。徳永の坂は石ゴロゴロでも、その右側の池にかいつぶりが雛を引連れ涼しげな松影にたわむれるのを見ては、しばし疲れを忘れ、青田を渡る微風に額の汗もすっかり引込んだものだ。

このように自然に恵まれた池高にも苛酷な社会の風が吹きはじめた。新聞紙上に浪人何十万というような記事が賑々しく取り上げられ始めた。

でも、その頃はまだ池高は能力別クラスも、コース別クラスも採用されていなかった。――それでも教務室横の模擬試験の掲示をひしめき合って眺めた記憶が第一番に浮かぶのは悲しい日本の現実だ。

時は容赦なくたって、池高の受難は今も続き、承風台の風光はすっかり変わった。桃源はも早や桃源としての面目を失った。――が、承風台は今も私の心の中に「桃源」として生きている。ちようど池高時代の思い出がすべて――大学入試に青春をすりへらした事までも――今は楽しい思い出となったように。

（箕面市立箕面第一中学校教諭）

自治会生活の思い出

高校九期生　梶　山　勝

僕が入学した当時の池高生のカラーは、〝おとなしい〟ということになっていた。はっきり言えば、〝気力に欠ける〟という事であり、若い我々に取ってこれ程の恥辱はない。僕の高校生活というものは、自治会活動であれ、クラブ活動であれ、常にこれをふきとばさんするもだえであったと言える。当時は大学の進学率も悪く、学校側は進学一本やりの方針を打出し色々な圧迫が始まり、我々は、これを予備校化だとさわいでいた。こうした中で、（執行委員長や、議長を務めたわけではなかったが）、僕自身も手の出る限り色々なことをやろうと努力したつもりでいる。

当時何をするにしても一番問題になるのは人数が集まらないことであった。その一番困ったのが議会であった。後期の議会ともなると三年の議員は誰も出て来て呉れない。そうなると一・二年の中で一人でも欠けると流会ということになる。議会のある日は朝から個人個人を捉えて出席するように頼みにまわるのだが、一人でも来ないものがあるともういけない。あのときのうらめしかったこと。これも今となっては楽しい思い出である。

しかし僕にとっては苦い思い出がある。それは応援団のことだ。クラブ法案が実施され出したのが、僕の運動委員長のときであった。執行委員長の藤井君からは、やれやれと言われるし、旗は以前にやはり僕が責任者にならされて出来上っていた。しかしこちらにこれと言って具体案はなしそうかといつて、やらないわけにもいかない。とにかく、規定通り各組から五名ずつ選出してもらったのが、期末試験に入ろうとする頃であった。最初の会合が終業式当日、その時に集まったのが三十人近くであった。野球とサッカーの応援に出かけたが、どちらもぶっつけ本番、ただ旗をもって出かけたにとどまった。しかし応援の面白さと難しさを知ることが出来た。良きリーダ長嶋君がいたので、リーダ格十名程を養成し、本当にこうしたクラブが出来たらと夢みていたのだったが、僕自身安易な方向に道を進めてしまった。物をこわす段になれば事は簡単である。しかし新しいものを創り出すには、大きな努力と、勇気を必要とするものであり、又真の自治会のあり方は、この積極的方向に、進まねばならないのだ。

最近は諸種の試合にバスに乗り込んで応援に出かけたと聞いているが、うらやましく、又非常にうれしく思っている。

（大阪大学工学部第四回生）

第二グラウンドの完成

高校十期生　横尾武夫

村山コートが完成したのは昭和三十二年六月の事だった。コート開きの日には授業は早目に打ち切られ、生徒達は続々と新しく出来上ったコートに詰めかけると、テニス部員や、そのOBの諸氏、それにテニスの好きな諸先生等が気持ち良さそうに白球を追っているのが見られた。テニスコート三面にバレーボールコートが二面というこの立派な第二グランドが出来たそもそもの由来は、昭和三十年の八月、当時のテニス部の村山誠子さんが硬式庭球全国大会に於て優勝されたことである。その頃私が執行委員長の責を負っていた自治会では、その全国制覇を記念するために記念碑を建てようと発議して、全校生徒から資金カンパをしたが、途中で一部の者からもっと建設的な意見が出て、無意味な記念碑よりは、いっその事、テニスコートを作ろうということになり、それに自治会、学校側、PTAが一致してコート建設に乗り出した。資金の方は生徒からのささやかなカンパ、学校側からの予算、PTAから、それに特志家諸方面からの寄附などでどうにか都合はついたけれども、土地買収やそれに整地の問題等で仲々着工にまで進まなかった。その間、自治会や学校側に対して生徒側から再度督促や苦情が持ちこまれ、筆者自身もそれについては苦い経験がある。それはともかくとして、実際にブルドーザーが来て、整地を始めたのは昭和三十一年十月の事だった。食堂前のあの凸凹の湿地は六ヵ月後には立派な第二グラウンドと化し、今でも毎日、生徒達が元気にスポーツを楽しんでいるが、こうしたコート建設までの先生方や、先輩の諸氏や、各方面の方々の御苦労に感謝しなければならない。

（京都大学理学部第三回生）

何かを求めて

高校十期生　九津見明

思えば束の間の三年間であった。自分の様に高校に関しては全く無関心であった人間が池高へ送り込まれて、またたく間に過ぎ去った三年間。思い出といっても日々の生活以外に何も目新しいものがない。日記に「昨日と同じ」と書き続ける様な三年間であったろう。しかしこの高校生活で一番印象にのこる事を思い出して見よう。

私が受験勉強が追いかけて来る事に気付いたのは三年生の春も終ろうとする頃だった。それでそろそろ自分の高校生活を後悔する念が起こり出し、残りの月日の中に三年間を一挙に生活しようと心掛けはじめた。ちようど学校側は

校長先生も新任され、受験勉強には余りうるさくなかったので、（今後もそうあって欲しいが）三年生という意識も余り強くなかった。かくする中に夏休みも過ぎたが、我々のエネルギーは十月に爆発した。過去数年間の池高の体育祭は全く情ない単調そのものであった。「自分達三年生の手で何とかすれば後輩が続いてくれるだろう。」という考えが湧き上り、クラス全体へ又三年生全体へと拡がった。仮装行列に、応援団に、我々は全力を注いだ。

御記憶の人も多いだろう。その時の体育祭が殻を破った事を。我々は、五十四人でチャンバラをやったりした。当時に見られた努力、協力、団結は誠に美しく、クラス全員が、いや殆どの三年生が、一週間勉強を忘れて夜遅くまで準備に没頭した。この記憶は、消え難い、又消すべきでない思い出として我々の脳裏に焼きついている。又あれ程の応援団を組織し得たのも一大改革であった。実際の所、我々は目的に達する過程に於て実に多くの物を発見した。発見というよりは当然の結果として現われたのかも知れないが。それが何であったかは言葉では表わしにくい。「団体生活の真髄」といおうか。とにかく我々は三年生の十月迄これに見放されていたのである。世の中は変わって行くのだから仕方がないかも知れないが高校生活に我々はもっと多くを望むべきであったろう。

（大阪大学工学部第三回生）

フォーク・ダンス

高校十一期生　海老　泰

なんの因果か、二年生の後期に副執行委員長になった。委員長は稀代の傑物堀川君であったが、なにしろ面倒くさがり屋の僕が女房役なので、気の毒なくらい彼一人が奮闘した。二学期も終り近くだったか、なんでも自治会と生徒を密着したものにするため、その一方法として、フォークダンスの会をやろうということになった。指導は体育の先生にやってもらうにしても、見本をみせねばならんということになり、執行委員全員が府立体育館の講習会に行くはめになった。僕は尻ごみして、逃げまわったが、二度も参加させられた。もっとも、この努力は後に報いられたが。

この頃から、なんとなく異性が気になりだしたのは、いよいよ、みんなが〝年頃〟になったせいでもあろうが、今一つは、二年から始まった進路別のクラス編成で各クラスの男女の配分が非常なアンバランスとなったのが、ある刺戟となったことは間違いない。機をみるに敏なる先生方が、個人的な交際をはじめだしたら勉強のさまたげになると思われたのであろう、モヤモヤを浄化させようと、三年の体育祭にはフォークダンスが採用された。他の学校にく

らべて、男女間がなんとなく、よそよそしい池高、従って積極的な男女の協力が行なわれにくい池高では、まず画期的なことであった。今後、この種の会が多くもたれて、異性間に歪んだ好奇心を持たせないように、先生や、執行委員、生徒が努力すれば、池高第一の美風である〝清潔さ〟は一段と進歩した形で永久に保持されると思う。

（神戸大学第二回生）

歴史を感ず

高校十二期生　久保田　譲

池高も創立二十周年を迎えるとは、その歴史においていささか驚きである。別に母校にケチをつけようというような気持はさらさらない。ただ第三者が見た時、そんなに古い歴史があると見てくれるだろうかと思うからだが、そんな事を言いだすとその責任は君にもあるじゃないか、などととんだ横槍が入ってきそうだ。しかし僕は池高でつまらんこと許りやってた頃の想い出の中で、ただ一度だが池高の歴史を身を以て感じとった事があった。

あの頃――こう正面きると戦後の混乱期かと思われるだろうが、早まってはいけない、昨年（三十四年）の四月のことである。或る自習の時間、のっそり教室に入ってこられたのが大川先生、それから一時間―池高放火事件を神妙に拝聴した。話自体はそんなに面白くなかったが先生が最後につぶやくように言われた言葉が、何故か、今でも心にこびりついてはなれない。『もうこんな話をするのも俺が最後になりそうだからなあ……。』先生には失礼だがその時は妙におかしかったものである。それがどうだろう、今でも鮮かに残っている。奇妙な思い出かもしれないが、僕はこれを思い出す時池高の隠された過去の息吹きが身に近々と感ぜられる。少くともそんな気がするのである。とりとめもない話で恐縮であるが、これが私にとって池高の歴史を体認した、真珠のように貴重な思い出である。最後に池高のたゆみない発展を期待してやみません。

（京都大学法学部第一回生）

池高生活

三年生　木藤浩之

一つとせ、人も知る知る池高の、桜並木のぼろ校舎
春の桜花、夏の涼風、秋の柿、冬の日射し――恵まれた四季の移り変り。六甲連山から淡路島、海を隔てて紀伊の山々、それに続く金剛・生駒の山並み――雄大なこの眺望。これほどの環境がどこにあろうか。ぼろ校舎なんか問題ではない。

二つとせ、古い校舎もなんのその、中に燃えたつ意気と

熱

このファイトによって全てが構成されている池高――汗とほこりにまみれて運動場を暴れまわる連中。黙々と研究にいそしむ各部の面々。文化祭、体育祭、クラス対抗、その他いろいろの行事に一致団結する全生徒。これらはみな意気と熱との現われだ。我々は常にこの池高精神を貫いていかなければならない。

池高は愉快な学校である。上級生が最初に教えてくれたことは先生のあだな、くせなどについての詳しい解説であった。お陰で何彼につけて便利なことが多い。

元来肩のこる授業も先生の若き日の思い出話や自慢話でそれを忘れ、時には話が大きくなり過ぎて、むしろこちらから縮めねばならぬことさえある。たまに原爆が落ちることもあるが、このように明るい授業が受けられるのは、池高生の特権であろう。その他早ベン、コンパなど愉快な高校生活を満喫できる我々は実に幸福と言うべきである。

自由な校風

二年生　石田玲子

学校に続く並木道には、桜の花がちらほら綻び始めていた。目に入る物全てが春の歓喜にあふれていた。私達が新しい希望に胸をはずませながらくぐった校門。〝承風台〟の美しい風光が大手を広げて私達を迎えてくれた。喜びに満ちた入学式の時、校長先生のお話の中に、『教わらないから解らない』ということは、言ってはならないと。……私も充実した高校生活を送りたい。その為には、自分に打ち勝って行かねばと、心に誓った事だ。入学当時は、勉強勉強という言葉にせき立てられてあまりにも窮屈な生活だと思われたが、この一年をふりかえってみて、今しみじみと感じているのは自由な校風という事である。〝自由な〟という言葉は、パクゼンとしているが、私は上から圧迫されないという事だと思う。これは私達自身が自主的に……という事にも関連しているがとても良い事だと思う。自由なふん囲気の中で私達はのびのびと明るく生活している。私は中学の時、十周年の祝典を持ったが、我々の池高は創立二十周年を迎えるわけである。十年も年寄りであるが、そう口で言う程、たやすい事ではない。二十年の歳月をふり返ってみて、本当に意義深い事だと思う。先輩が幾多の困難や試練、それにあの戦争の苦しみを、乗り越えて来られたのにくらべ、私達は何と幸せなのだろう。しかし将来北摂の学園都市として発展する、この地の高校として、恥ずかしくない様にならなければならない。今は幼年時代から、青年時代に移る時であると思うのであるが、創立二十周年、この年を新しい出発点として努力しよう。

座談会

この二十年を想う

この座談会は昨年六月十四日、池田市立公民館で開催したものでありますが、各期卒業生代表の方に招待状を出しました処、御出席願えたのは下の方々でした。

出席者（敬称略）

旧職員　尾上恒雄（昭和十五年から昭和二十一年まで　在職　現大阪女子大学教授）
旧職員　森田武躬（昭和十六年から昭和二十三年まで　在職　現大阪市教委指導課長）
旧職員　宮田明夫（昭和十六年から昭和二十二年まで　在職　現大阪大学助教授）
PTA　上島恒造（現PTA会長）
現職員　大川三郎
現職員　岩田久郎
現職員　高木隆
現職員　岡本毅一
現職員　加藤重義
卒業生　羽間敬司（中学一期生、大阪府警警部補）
（司会）卒業生　山本家道（中学二期生、本校教諭）
卒業生　安居洋（中学三期生、神戸大学大学院学生）
卒業生　井村英夫（中学五期生、本校教諭）
卒業生　砂川佳世子（高校八期生、三井銀行勤務）

（現職員は就任順）

山本　早速はじめたいと思います。そもそもこの学校がどうして誕生したか、というところから、大川先生お願いします。

大川　そうですね、豊中中学、住吉中学が出来た後、しばらく中学校が出来なかったんですね。処が志願者が多くなったために、どうしても大阪府に一つ新しく学校を作ろうということになったわけですな。それで池田と布施の地元が猛烈に運動して、結局どちらとも決めずに、府立第十六中学ということで発足したんです。

尾上　十六中学ですけれども、それを一六中学などと悪口言いましてね。（笑）

羽間　われわれ成績の悪いものは、ちょうどいい学校が出来たと思ってね。（笑）上級生もいないし、のんきな学校だろうと思って入ったところが、大川先生という大へんな先生がおられて…（笑）

山本　第一回入学式の印象といったものは？

羽間　初めから尾籠な話ですがね、私、入学式の日に便所へ行ったんですね、そうすると便所に低い手摺りがついていましてね、おかしいと思ったら盲さんの学校だったんですね、もともと。（笑）

尾上　その話がでたら…（笑）朝礼で東方遙拝をすると、ちょうど前が省線のガード下の汚い家でね、そこにおむつが乾してあって、これに最敬礼ということになって…（笑）

山本　天王寺時代に何か変ったことありませんでしたか？

尾上　運動会というと、吉野まで出かけておったね。

山本　ああその写真が今でも沢山残っています。

高木　最初の校章はどうして決まったんです？

大川　初代の庄校長先生が天王寺師範の図画の先生に考えてもらって決められたらしいですな。普通府立の中学校は六稜の星なのに、うちは五稜でしかも小さいというので大分不満があったようですけれども。

井村　白線一本が十で、星が漢字の六に当って、それで十六なんだと聞きましたがね。（写真2参照）

岩田　いや、あれは大阪の北極星で、物事の基準を示し、気字の大きい象徴なんですよ。

宮田　さあ、それは初めからそのつもりかどうか。（笑）

山本　羽間さん、一期生の方々の学校生活について何か…

羽間　さあ、われわれ上級生がなかったですからね、子供の寄り合いのような感じでしたね。

山本　一期生と私たち二期生とは割合仲がよかったんですが、三期生以後の人々は上級生にいじめられましたね。

安居　私個人はそういう経験はなかったのですが、同期生の中には随分いじめられた人達もあったようです。（笑）もっとも

途中で工場へ動労動員に行きましたから助かったようなものですが。

羽間　それがね大東亜戦争が始まって、みな緊張せねばいかんということで、それじゃぼつぼつ殴ろうかという…（笑）特に東教官（初代配属将校）が来てから空気がからっと変りましたね。十九年のことですか。

山本　今の畑の校舎へ行ってから一番印象に残っているのは、運動場が芋畑だったことですね。毎朝鍬で少しずつ平らにしましたね。それからプール掘り。

岩田　プールはね、初め森田先生と御一緒に宝塚のプールへ行っていたんですよ。その時、初代校長の庄先生が是非作ろうとおっしゃって、計画されたんです。

宮田　私もあの当時委員でしてね。あれは中井組がやったんです。非常に物資不足の時代だったのですが、社長が侠気のある人でね、夜陰に乗じて鉄管を運んだりして出来上ったんです。

森田　プールの手前に谷がありましたね。寒稽古のとき野試合をやったでしょう。（写真9参照）

大川　大分深い谷がありましたね。

羽間　その谷で相撲もやったし、射撃訓練もやりました。

高木　私が赴任したとき（昭和十八年）水道もなかったですね、汚いおかしな学校や思いました。（笑）

森田　もとの園芸学校のボロ校舎を井戸の水でね、どしどし洗ったこともあったなあ。

山本　森田先生ではなかったですか。廊下をピカピカに光らせるのを流行になさったのは。

森田　あれは新校舎だけれどもね。サイダー瓶の底なんかでこすったね。とにかく掃除のやかましい学校だった。（笑）

羽間　今はどうですか、掃除は？

山本　いやそれをいわれると非常に恐縮なんです。（笑）道普請もよくやらされましたね。

尾上　ああ、校門の前のところね。石炭から貰って来てね。

羽間　それから思い出すのは、石橋の南の住吉神社ね、大詔奉戴日によく参りに行きました。あそこから飛行機が飛び上るのが見えましてね。（写真11参照）

山本　空襲のときの状況は如何でしたか

森田　空襲で焼けたとき？　あの時私が留守番でしてね。今だにあの時の模様は忘れませんね―昭和二十年六月七日だった。皆は勤労動員に出ておってね、生徒は一、二年だけだったね。空襲警報が出たので学校の南の谷にあった防空壕に入ってもらって、私は新校舎の間にある壕の一番出口にいました。隣に小使の宮木さんがいましたね。そうしたらザーという音と一緒に三号校舎の端、当時図書室だった処に油脂焼夷弾のカタマリが落ちましてね、二分位で真赤に焼けました。腰板の処に飛び散る火を危いといっているのに生徒が泡を叩きつけて消していました。そのうちに三号校舎がザァと燃えて、その熱と飛び火で二号校舎がワァと燃え出してしまいましたね。ああ

そうそう、大川先生が鋸で校舎と校舎の渡り廊下を切り倒しなさったな。

高木　あの頃は一号校舎は住友プロペラが使っていましたね。体育館は交易営団、旧体育館や生物室に飛行機の部分品が積んであったり無茶苦茶でしたな。

岡本　あの時ね、私、工業試験場へ安居君らを引き連れて行ってた訳ですがね。ザーという音を聞いて、急いで学校へ帰ったんです。その時は、今森田先生のお話の三号校舎の隅から、ほんの夕餉の煙位の程度の煙が出ているだけだったんです。処が梯子がないから手を拱いて見ているより仕方なかったんですね。ともかく用水池の水をかぶって教室へ入って何か一つでも持ち出そうと思って、本を外へ抛り出す、学籍簿も抛り投げるという訳です。今でも使っていると思うのですが、生物室の幻燈機ね、あれは私がその時持ち出したものです。（笑）

岩田　いやあ全く、あのパリンパリンと硝子が焼ける音は全く「死の静けさ」というようなものを感じましたね。

山本　それではこの辺で勤労動員のことについて伺いたいと思いますが。

宮田　うちは動員が出たのが府下で比較的遅かったね。

森田　府庁から呼び出されて「動員指令書」というのを受領にいった覚えがある。十九年の六月頃だったですね。

羽間　なんですか一期生で中央郵便局へ行った連中は、人生に有益な勉強をしたといっていますね。（写真11参照）

大川　何の勉強かな。（笑）誰か女学生と仲よくなったということぢゃないかな（大笑）

加藤　私の一番の思い出は、赴任するなり住友化学春日出工場へ動員を命じられたのです。当時の記録がここにありますが、（写真13参照）中隊長は尾上先生とあります。（笑）二十年の六月一日に約二百機の大空襲を受けましてね、四十九人の生徒を預かっていたのですが、その空襲のとき五人が行方不明になったのです。爆弾がどんどん降ってきますし、これはてっきり死なせた、しまったと思い自分も最期の機が来たと思いましたね。しかし空襲が終ってから、大阪駅まで歩いて生徒と一緒に探しました。家も訪ねたんですがその家が焼けて姿がありません。困りましたね。結局まあ淀川の堤防へ逃げていたことが分かったのですけれど。

森田　その一寸前に三期生の桑葉君が高圧電気に触れた事故がありましたね。あの時もやられたと思った。

岡本　僕は工業試験所のえらいさんと喧嘩したことがある。やっぱり空襲の最中ですがね、その男が、「先生空襲になって逃げては困る」というんですね。それで僕は「この子たちは家庭ではかけがえのない大事な息子なんだ。少しでも怪我をさせるわけにはいかん」と言ってね、皆池のところへ避難させました。

井村　私は動員には出なかったのですが、勤労奉仕というので、山本さんたちが平らになさった運動場を、もう一度一生懸命掘り返して芋畑にしていたんです。（大笑）

山本　私は東邦自動車へ行ってたのですが、初めのうち英語も数学もなくて楽しいと思っていましたけど、二ケ月もするとやっぱり何か勉強があった方がいいと思うようになりましたね。二週間に一度学校へ行って他の工場へ行っている連中と顔を合す

のが楽しかったですね。

岡本　三浦工作所でね、私は塩のぜんざいを煮て生徒と食べたことがある。（笑）

山本　砂糖なんか全然なかったですからね。それで思い出しましたが、学校でも物資の配給がいろいろありましたね。

尾上　私がお世話をして鰯の配給をしたことがある。処が目方を知らずに頼んだものだから部屋中一杯魚だらけになってね、冷凍が溶けて来るし大騒動でした。（笑）

岡本　下駄の配給もありましたね。

大川　草の入ったパン、あれも生徒が苦心して草刈っていたね、夏休み返上でね。

高木　背広地の配給が戦後ありました。高槻市へ取りに行った帰り途、トラックの運ちゃんが服地一巻くれないと運転せんと言い出して困った事がありました。（笑）

安居　あの洋服地はよかったですね。

山本　学校生活はいかがでした、終戦直後は？。

大川　机がなくてね、二日がかりで大阪機工尼崎工場まで取りに行った。

森田　飛行場へ草刈りに行きましてね、アメリカ兵に生徒がジープに乗せられて引張り廻されるのですよ。私はハラハラしていたことを覚えています。

高木　校章が陸軍の星だというので叱られたり、間違ってアメリカ兵に殴られたこともあったね。

宮田　戦争中に教室で言った排英、排米の言葉を、誰かに投書されて迷惑を蒙られた先生がありました。

大川　投書といえば私もＣＩＣ（米国情報局）に引張り出されて何だかさんざん油を搾られた経験があります。

宮田　終戦後アメリカが所謂指令教育というのをやったでしょう。各校の教師一、二名を集めてＣＩＥが中心にいろいろマッカーサー指令に適合するように啓蒙するやり方ですね。その中で私が持って帰ったのはスクールシティーという制度です。

高木　自治会の前身ですね。岸和田産業高校に次いでうちが実施した。

大川　当時共産党細胞も盛んだったな。私なんか「大川を馘にせよ」などと紙新聞に大きく書かれた。（笑）

山本　男女交流前後の状況は？

森田　桜塚高校の女生徒で蟹ケ池以北の者が池田高校へ来ることになったのですが、女生徒が来たがらなかったのは確かですね。

山本　狼のところへ小羊を送るようなものだとか言って（笑）しかし交流してしまうと反撥などなく、かえってロマンスが生れたりした？（笑）

森田　大川先生などもやさしくなられてね、（大笑）ただ設備の面で便所や裁縫室など問題がありましたね。上島さんにいろいろお世話になりました。

岩田　昭和二十三年四月十八日でしたね。朝登校すると女の子が校門の前にたむろしていましてね、入ろうとしないんです。私どもも恥かしい思いでその前を通りました。（笑）

岡本　今の三号校舎と家庭科教室の間で対面式をやったんだ。あれは誠に劇的瞬間だったなあ。（笑）

森田　女の生徒も初めてだが、女の先生も初めてだった。（笑）

高木　今まで団服だった先生が、急に背広に変わったな。（笑）

上島　今の設備でね、ピアノだとか、ミシンだとか、食器だとか桜塚から無理いって貰って来たのです。嫁入り道具だと申しましてね。（笑）大川先生もずい分努力下さいまして今の設備ができたのです。

井村　共学一年で火事が起ったのですね。

岡本　そう、あの火事の時ね、僕は後藤校長宅を訪問しておりましたので一番に駆けつけました。夕方七時半頃だったと思うんです。間もなく進駐軍の消防隊がやって来ました。

高木　前の日に盗難事件がありましてね。その生徒の放火ではないかと心配したのですけれども、その生徒はアリバイがありました。（笑）

上島　二月二十六日でしたな、二・二六です。（笑）翌日阪急はストでした。それでその翌日私お見舞いに上りました。後藤先生は悲痛な表情をなさっていましたが、その足で早速知事公舎へお伴して、お詫びに行ったんです。その時、赤間知事に物凄い剣幕で叱られましてね。処がその赤間知事が後に我々の熱心な陳情を汲みとってくれましてね、わざわざ学校まで来てくれて、復興に努力してくれたのです。勿論学校は寄附集めやら生徒さんのアルバイトや大へんだったですけれどもね。

岩田　戦災と火事と二度も火災にあったので、我々はこの学校が廃校になるのではないかと心配しました。それから自治会では、折角の女の子が桜塚へ帰ってしまわないかと考えて、真剣に議論したんですね。そしたら女生徒の多田美智子さん（高校四期生現岩倉姓）が立って、「私たち一年でも池高にいたら池高生だから、そんな情ないこと言わないで、何でも言いつけて復興を手伝わせてくれ」と言いましたね。それで春休みを返上してアルバイトとマッチ売りをしたのです。

上島　あの火事のためにかえって男女共学がうまく行きましたね。

岩田　アルバイト稼ぎとマッチ売りの収益で五十万円位ありましたね。それが迎え水になって絶対廃校にしないという約束を府から得られた訳ですね。大へん大きな力でした。それにその年の進学成績は開校以来の好成績だし、翌年の秋にはサッカーが国体の決勝戦までいって、次の年の一月には全国優勝を遂げた訳ですからね。文字通り灰燼の中から立ち上がって日本一になったのですから、偉かったと思いますね。

大川　授業は床に座ってノートをとっていたな。

山本　砂川さん如何ですか、後輩としてこういう話は？

砂川　ほんとに感激でございますね。私達申し訳ないようです。お掃除もいい加減にやっていた位ですから。（笑）

加藤　美化委員BIというのもありましたね。自分で金槌持って自発的に校舎を修繕して廻るクラブ。

羽間　ほお、なかなか美談があるのですね。そういう話を今の生徒は知っているのですか。

砂川　余り知りませんね。火事の後のマッチ売り位で。

羽間　それはPR不足だ。（笑）そんなことではいけません。山本先生や井村先生から大いに宣伝してもらわねば。（笑）

加藤　岩田先生の理髪クラブも愉快だったですね（笑）

森田　散髪しながら岩田先生は説教していた。（笑）

井村　私も散髪されました、説教はなかったですが。（笑）

森田　僕は海洋訓練にいって水兵の甲板洗いを覚えて来た。

岡本　それがあの廊下洗いになった訳ですな、（大笑）

山本　それでは、時間も大分たちましたので、これからの池高の歩み方について先輩や旧師から御忠告といったようなものを伺いたいと思います。先づ砂川さん。

砂川　私職場で他校の卒業生と一緒にお仕事をしていまして、池高の卒業生は素直でいいと思うのです。ただ一寸野暮ったくて……（笑）

安居　私も同感です。屈託なくて非常にいい雰囲気を持っていて、好ましい方向に進んでいると思います。

羽間　今話題に上った美しい努力を持ち続けて頂きたい。火災にあった時の団結とか協力とか、そんなものが忘れられるのは淋しいですね。

宮田　池高という学校は創立当初から何か革新的な空気のある学校だったと思うのです、先生方も生徒諸君もね。ところがそのことは欠点にもなっていると思うのです。例えば戦争態勢に日本が入ったときに、歴史のある学校はそれほどでもないのに池高は早くその中へ飛込んでしまった。それと同じことが戦後についてもいえるのではないかと思うのです。つまり伝統のある学校は戦後の混乱から比較的早くあるべき姿に復しているのに、池高はその帰るべき姿を見失っているという気がするのです。そこで何か学校の特色というか校風というか、そういうものを確立して頂きたいと思います。

森田　私たち池高の発足当時にね、登校路と運動場のまわりに桜の苗木を植えたのです。それが今行ってみると驚く程大きく成長している。いわばあの桜の木と同じように、池高もどうぞ、風格のある、重厚ないろいろの面で特長のある学校になって頂きたい気持なのです。

山本　どうもいろいろ有難うございました。

（編集責任山本）

1 現職員

（昭和三十五年三月三十一日現在）

（就任順）

氏名	職名	担当教科目	本校就任年月日
秋山　敏	校長	英語	昭三二・四・一
大川三郎	教頭	生物	一五・三・三一
岩田久郎	教諭	国語	一八・三・三一
高木　隆	教諭	社会	一八・四・三〇
矢野淳一	教諭	英語	一九・三・三一
岡本毅一	教諭	社会	一九・八・一六
加藤重義	教諭	社会	一九・八・三一
福富角二	教諭	英語	二〇・七・三一
津田昌信	教諭	化学	二〇・九・三〇
服部吉三	教諭	音楽	二一・一・一五
堀口正次郎	教諭	数学	二一・四・一五
平田太郎	教諭	数学	二一・六・三〇
金井早苗	養護教諭		二一・八・三一
薬師仟子	実習助手		二一・八・三一
山崎勝次	教諭	物理	二一・一一・三〇
須賀卯夫	教諭	美術	二二・四・一一
篠原　隆	教諭	英語、社会	二二・一一・一五
篠田恭一	教諭	英語	二二・一一・二〇
赤坂繁幸	教諭	化学	二三・一・一三
土田　術	教諭	国語	二三・三・三一
菅　千代子	教諭	家庭	二三・四・三〇
鈴木太良	教諭	国語	二三・四・三〇
増田忠雄	教諭	英語	二三・四・三〇
馬場　紫津子	教諭	体育	二三・五・一二
吉竹　博	教諭	地学、生物	二四・三・三一
小川謙三	事務長		二五・一・二四
佐々木酉雄	校医		二五・三・三一
吉田恒二	教諭	体育	二五・三・三一

別府 善次郎	教諭	英語	二五・四・四
伊東 尹	校務員		二五・八・三一
北島 フミ子	書記		二五・九・一五
中村 俊子	教諭	国語	二五・九・二〇
山木 繁蔵	教諭	国語	二五・一二・三一
市村 俊郎	教諭	英語	二六・四・一
大森 宏	教諭	社会	二六・四・一
重本 長生	教諭	社会	二六・四・一七
安田 由之助	教諭	数学	二六・五・一
三浦 大蔵	教諭	数学	二六・六・一〇
二宮 咲	教諭	国語	二六・七・一
金子 又兵衛	教諭	数学	二六・九・一
小牧 三郎	教諭	数学	二六・九・一
三宅 テルヱ	教諭	家庭	二六・一〇・一
細見 清枝	教諭	書道	二六・一一・一
野上 茂郎	教諭	生物	二七・一・一
太田 洋子	教諭	体育	二七・四・一
杉山 広済	教諭	社会	二七・四・一
山本 家道	教諭	英語	二七・四・一

井村 英夫	教諭	物理	二八・四・一
斉藤 正雄	校務員		二八・四・一
冨浪 良夫	教諭	体育	二八・四・一
佐々木 健一	校医(歯)		三〇・一・一
船木 恵美子	実習助手		三〇・四・一
川上 義三	教諭	国語	三〇・六・一
加藤 昌美	書記		三〇・一一・一
中島 満智子	書記		三一・四・一六
黒子 マチ	校務員		三一・七・一六
三浦 文男	教諭	数学	三一・九・一
亀井 和子	実習助手		三二・一〇・一六
桑谷 静松	校務員		三二・一二・一
有木 多鶴子	養護教諭		三四・四・一
藤井 順子	給仕		三四・七・一
今井 嘉子	書記補		三四・一二・一

2 旧職員（就任順）

氏名	在職年月	担当教科目	現職
安達正一	一五・一 一七・三	（事務）	
庄　静夫	一五・二 二〇・三	（校長）	姫路市教育長
宮木丑松	一五・二 二七・三	（校務員）	（死亡）
綾仁信治郎	一五・三 二一・四	数学	府立旭高校長
安良暁一	一五・三 一七・三	英語	大阪市立大学
尾上恒雄	一五・三 二一・一〇	英語	大阪府立女子大学
岡村武雄	一五・三 一九・七	（事務）	（戦死）
上月　順	一五・三 一八・三	図画	
鹿内健三	一五・三 一七・三	国漢	大阪成蹊学園長
中島　遜	一五・三 二二・五	地歴	農　業
林田　実	一五・三 一七・三	国漢	樟蔭女子大学
吉田正雄	一五・三 一七・九	体操	
樫本　正	一五・四 一六・三	音楽	大阪学芸大学
高橋　修	一五・四 一五・九	（助手）	
安田　武	一五・四 一六・三	剣道	
鳩谷　征	一五・一〇 二三・三	教練	近畿管区警察学校
大沢辰雄	一六・二 一九・四	剣道	
加野高行	一六・三 二〇・九	音楽	宝塚音楽学校
北川重男	一六・三 一八・三	数学	大阪学芸大学

氏名	在職年月	担当教科目	現職
桑田旨夫	一六・三 二〇・五	数学	備後染色役員
小林百合子	一六・三 一八・三	（助手）	
曽沢太吉	一六・三 一八・五	国漢	奈良女子大学
藤原悠紀雄	一六・三 一八・九	生物	神戸大学
宮田明夫	一六・三 二二・四	英語	大阪大学
森田武躬	一六・三 二三・五	国漢	大阪市教委指導課長
守屋岩男	一六・三 一七・八	体操	倉敷市立連島中学校長
前田寿朱夫	一六・四 一八・二	（校医）	
奥村和夫	一六・七 二三・三	地理	大阪学芸大学
田中　昭	一六・八 一九・九	（助手）	ダイハツ池田工場
水谷愛之介	一六・八 二〇・四	習字	（死亡）
村中吉盛	一六・九 一七・三	剣道	
猪谷文臣	一六・一一 一七・九	歴史	大阪大学
原　正	一六・一一 一八・四	歴史	神戸新聞社
市崎常臣	一七・三 二二・三	国漢	市立豊中三中
池永留吉	一七・三 二二・七	教練	燃料商
内山正良	一七・三 二二・三	国漢	府立東淀川高
上田広高	一七・三 二二・六	国漢	高知県立高岡高
神村(行田)三郎	一七・三 一八・九	物象	京都府立桃山高

小林(有馬)茂　一七・三　二六・三　歴史　府立北野高
白石寿子　一七・三　一八・二(助手)
鳥居喬熙　一七・三　一七・九　剣道
中野久夫　一七・三　一九・六　英語　岡山大学
原(吉木)千寿子　一七・三　二一・八(事務)
宮本数秀　一七・三　二二・三　英語　兵庫県立加古川東高
横井鹿之助　一七・三　二〇・三　数学
川上徳蔵　一七・四　一七・一〇　剣道
高田仁一　一七・五　一八・七　化学　相愛学園
山根琢司　一七・五　一八・三(助手)
西条茂美　一七・七　三一・五(校務員)
西条シノ　一七・七　二八・三(給仕)
西原哲吉　一七・七　一九・八(事務)
窪野桂　一七・九　一八・四　国漢　静岡大学
佐々木宗太郎　一七・九　二一・八　剣道　(戦死)
本橋和　一七・九　一八・一〇　体操
柚山忠明　一七・九　一九・一〇　英語　県立今治北高
竹内千助　一八・一　一八・三　英語
大竹(松本)益雄　一八・三　二三・三　国漢　新潟県立三条高
北川浩　一八・三　一九・一〇　体操
志賀祖一　一八・三　二五・五　体操　京都府立宮津高
滝井与志司　一八・三　二一・一〇　数学　大阪学芸大学
林清　一八・三　二〇・三　図画　府立園芸高
本庄重蔵　一八・三　一八・二(助手)
政木義員　一八・三　一九・四　修・公(死亡)
松本敏秋　一八・三　二一・四　教練
宮内芳郎　一八・三　二三・四　英語　学芸大付属高
溝川功　一八・三　二〇・九　作業　姫路市立山陽中
江崎雪　一八・四　一九・四　歴史　府立豊中高
大槻重信　一八・四　二一・七　物象　京都府立綾部高
阪上浅吉　一八・四　一九・三(校務員)
布施久蔵　一八・四　一九・一〇(校務員)
中島修　一八・五　二〇・九　数学　滋賀県立日野高長
桑田一恵　一八・七　二三・三　体操　姫路工大
嶋村吉雄　一八・七　二三・四　国漢　高知大学
永井巌治　一八・七　一九・三　体操
朝倉敏一　一八・九　二〇・九　化学
土田真太郎　一八・九　二一・六　数学　(戦死)
山田直一　一八・九　一八・一〇　柔道
山本一美　一八・九　一九・四　柔道
東重次郎　一八・一〇　一九・九(配属将校)
籔本テル子　一八・一　一九・七(助手)
弓場靖　一八・一　一九・三(校医)　弓場医院長
大沢健二　一八・三　二一・四　化学
北上信雄　一九・一　一九・四　教練
肥塚正太夫　一九・三　二一・四　数学　府立桜塚高
佐々木好太郎　一九・三　三〇・三(教練・事務)府立東淀川高事務長
服部一郎　一九・三　二〇・九　生物

大津　静夫　一九・四　二四・三　生物　生協組本町診療所
小寺　幸正　一九・四　二一・五修・公　堺市立第二商高
田中　ヨシ子　一九・四　二一・三（給仕）
外海　啓一　一九・四　二〇・九　化学
西井　長一郎　一九・四　二四・四（校医）　医　院
村田　フクエ　一九・四　二〇・三（給仕）
弥吉　宣一　一九・四　一九・二　国漢　大阪学芸大学
丸山　十一郎　一九・五　二二・五　数学　豊中市立三中
坂上　博一　一九・六　二〇・一　剣道
小林　正明　一九・七　二〇・一（事務）
藤井　千鶴子　一九・八　二〇・九（助手）
細井　久男　一九・八　二一・七（事務）
山之内　節子　一九・九　二〇・九（事務）
秋山　博愛　一九・一〇　二二・二　歴史　関西大学
中村　一九・一〇　二〇・九（配属将校）
寺田　正一郎　一九・一二　二八・三　国漢　府立北野高
三好　常喜　二〇・一　二〇・一〇（助手）
佐々木　茂八　二〇・三　二三・五（校長）　大阪市立桜宮高校長
田中　静夫　二〇・三　二二・三　数学　箕面一中
柳谷（大松）安太郎　二〇・三　二〇・九　体育・武道　真壁組
平石　鉱吉　二〇・四　二〇・九　国漢　府立北野高
白壁　傑次郎　二〇・五　二〇・三　物象　（死亡）
平井　二〇・五　二〇・六（配属将校）
幸田　康之助　二〇・七　二〇・一〇（配属将校）　宝塚索道管
中尾　博昭　二〇・九　二一・三（助手）　刀根山病院
浜中　武彦　二〇・九　二三・三　国語　府立住吉高
原　清治　二〇・九　二一・三　物象　府立寝屋川高
三隅　珠一　二〇・一〇　二五・一　体育　府教委保健体育課
岡本　義春　二〇・一一　二一・一〇　作業　大阪学芸大学
下村　高明　二〇・一二　三〇・三　事務　府立東淀川高
高橋　桂四郎　二〇・三　二三・三　英語　府立桜塚高
根岸　英二　二〇・三　二一・一二　図画
北村（下村）敏子　二一・一　三〇・七（事務）
松田　幾子　二一・三　二二・三（助手）
飯尾　和義　二一・四　二三・三　数学　府立桜塚高
中川　正善　二一・四　二一・九　数学　大阪大学
花畑　平男　二一・六　二二・三　体操　大阪市立大学
植村　義行　二一・八　三四・一一（事務）　府立旭高校事務長
佐野　ツルエ　二一・八　二一・一一（事務）
末本　宣一　二一・九　二二・三　社会　大阪市立工芸高
山崎（山部）尚士　二一・九　二三・四　生物　岡山県立朝日高
有坂　隆道　二一・一〇　二三・三　歴史　関西大学
佐藤　健太郎　二一・一〇　二二・三　化学　都立日比谷高
藤　道雄　二一・一〇　二七・二　実業　府立阿倍野高事務長
中務　保之　二一・一〇　二四・三　社会　（死亡）
藤田　真之助　二一・一〇　二三・四　数学　府立桜塚高
石井　立　二一・一二　二三・一　歴史　筑摩書房
平畑　豊　二二・三　二二・三　数学　島根県立浜田水産高

岩田(村山)セイ	二二・一〇	二二・八(事務)	
栄井 敏郎	二二・三	二三・三	数学 大阪市立船場中
中林 豊市	二二・三	二六・三	英語 兵庫県立有馬高
井口 隆	二二・四	二三・四	国漢
梅田 健一	二二・四	二二・三	化学 府立桜塚高
汐見 元男	二二・四	二二・三	化学
中西 敬一	二二・四	二三・八	体育
吉岡 明	二二・四	二三・一	体育 大阪市立汎愛高
富田 敏造	二二・五	二三・三	数学 府立島上高
中本 一男	二二・五	二二・一二	化学
落合 勇	二二・八	二五・三	社会 大阪大学
細川 勝馬	二二・八	三二・四(事務)	府立市岡高
多賀 保志	二二・九	二六・六	数学 文部省統計研究所
田中 恒雄	二二・九	二三・四	社会 河内銀行
西山 敏之	二二・九	二三・三	物理
加納 憲二	二二・一〇	二三・三	物理
坂上 彦四郎	二二・一〇	二三・四	国漢 府教委社会教育課
藤田 文章	二二・一二	二三・九	物象
小田 孝一	二三・四	二八・三	物理 大阪成蹊学園
尾崎 健三	二三・四	二六・三	数学 樟蔭高
大浜 多美子	二三・四	二六・三	生物 東大生物研究室
大西 千枝	二三・四	二五・三	家庭 兵庫県立長田高
関 俊一	二三・四	二六・一	国漢・習字 府立茨木高
中西(奥田)政子	二三・四	二四・三	数学
松浦(川口)淑子	二三・四	二四・八	国語 雲雀丘学園
白川 憲孝	二三・五	二四・三	数学 府立阪南高
福井 良一	二三・五	二三・三	数学
広瀬 満里子	二三・六	二四・六	英語
後藤 安久	二三・三	二七・四(校長)	府立天王寺高校長
梅溪 昇	二四・三	二五・五	歴史 大阪大学
中村 弘昌	二四・三	二五・三(助手)	川西市役所
正井 寿英	二四・四	二五・三(校医)	正井病院長
永田 幸令	二四・五	二六・六	数学 室蘭工業大学
水嶋 昌	二四・五	二六・一〇	習字
福原 行三	二四・六	二五・三	英語
福田 善雄	二四・六	二五・九	数学
谷川 雅敏	二五・三	二八・三	体育 府立堺工高
後藤 春雄	二五・四	二六・三	数学 日本ソーダ
津田(北尾)久子	二五・四	二六・九	家庭
増田 毅	二五・五	二六・三	社会 神戸大学
大槻 直代子	二五・九	三一・七(助手)	府立泉尾高
北林 裕	二五・九	二七・三	社会 朝日新聞社
佐藤 作次	二五・九	二七・三(校務員)	
塩野 芳夫	二五・九	二六・三	歴史 府立天王寺高
井上(永富)幸子	二六・三	三一・三(助手)	
浜田(黒山)初生	二六・三	三二・九(助手)	
岡本 賀世子	二六・四	二六・五	書道
近藤 亨	二六・四	二七・八	数学 府立大手前高

清水(沢田)洋子 二六・四　三一・四（書記補）府立鶴中高
野々村　淳 二六・四　二六・一〇　地理　島根県立大社高
池田　繁子 二六・五　二七・三　家庭
金子　睦夫 二七・四　三二・四（校長）府立生野高校長
津田　繁夫 二七・四　三二・一〇（校務員）
萩原　辰三郎 二七・四　二八・三　社会　府立天王寺高
原田(萩本)澄子 二七・四　三〇・三　家庭
福島　新作 二七・九　三一・八　数学　学芸大付属高
三宅　博子 三〇・六　三四・六（給仕）大銑産業
石原　文吉 三三・七　三四・三　体育　大阪学芸大学
鈴木　武光 三三・七　三四・三　体育　大阪学芸大学
辻　清也 三四・三　三五・二　体育　府立今宮工高
井谷　義昭 三四・四　三五・三　体育　府立山本高

3 歴代生徒自治会長

年度	前期会長名	後期会長名	備考
昭和二二年	藪内幸一		スクールシティ（生徒長）
昭和二三年	久沢克己	木下正利	生徒自治会
昭和二四年	久沢克己	三宅弘人	生徒自治会
昭和二五年	三宅弘人	細見英	生徒自治会
昭和二六年	辻田邦夫	伊藤洋	生徒自治会
昭和二七年	鈴木淳夫	西田進	生徒自治会
昭和二八年	半林亨	宮崎博文	生徒自治会
昭和二九年	中谷義孝	谷向忠雄	生徒自治会
昭和三〇年	藤井敏男	渡辺直己	生徒自治会
昭和三一年	横尾武夫	奥戸雄二	生徒自治会
昭和三二年	東稔達三	堀川紀年	生徒自治会
昭和三三年	大北順二	久保田譲	生徒自治会
昭和三四年	山田昭	木藤浩之	生徒自治会

4 歴代PTA会長

年度	種別	会長名	年度	種別	会長名
昭二五年	保護者会	中山隆吉	昭二六年	PTA	故飾磨為次郎
昭二六年	保護者会	故高松亨	昭二七年	PTA	徳永善四郎
昭二七年	保護者会	故高松亨	昭二八年	PTA	桐山秀雄
昭二八年	保護者会	長井明見	昭二九年	PTA	高橋義久
昭二九年	保護者会	長井明見	昭三〇年	PTA	高橋義久
昭三〇年	保護者会	長井明見	昭三一年	PTA	永田広海
昭三一年	保護者会	長井明見	昭三二年	PTA	山岸正秋
昭三二年	保護者会	長井明見	昭三三年	PTA	上島恒造
昭三三年	PTA	幾野重遠	昭三四年	PTA	井上道夫
昭三四年	PTA	上島恒造	昭三五年	PTA	上島恒造

5 在校生徒数

（昭和35年3月31日現在）

学年		1年	2年	3年	合計
学級数		8	8	8	24
生徒数		398	398	394	1,190
内訳	男	226	218	228	672
	女	172	180	166	518

6 生徒の居住地調

校種	所属	学区内 池田市	学区内 箕面市	学区内 豊中市	学区内 豊能郡	学区外 大阪市	学区外 吹田市	学区外 三島郡	学区外 その他	府外（兵庫県） 川西市	府外（兵庫県） 宝塚市	府外（兵庫県） 伊丹市	府外（兵庫県） 尼崎市	府外（兵庫県） 西宮市	府外（兵庫県） 神戸市	府外（兵庫県） その他	その他	合計
池田中学校（昭17年）	男	171	114	93	4	363	20	0	6	12	10	0	9	4	2	2	2	812
池田高等学校（昭34年）	男	330	173	106	9	7	2	0	1	26	13	4	0	1	0	0	0	672
	女	261	188	18	11	6	1	0	3	21	8	0	0	1	0	0	0	518
	計	591	361	124	20	13	3	0	4	47	21	4	0	2	0	0	0	1,190

（注）池中時代は学区制はなかった。学区制ができたのは昭和22年4月である。

7 累年合格者数と合格率

校種	府立第16中学校	府立池田中学校						
年度	昭15	昭16	昭17	昭18	昭19	昭20	昭21	昭22
志願者	606	486	370	459	378	360	456	
合格者	252	305	291	291	302	360	291	
合格率	42%	63%	79%	63%	80%	100%	64%	
入学定員	250	300	300	300	300	300	300	
期生	中1	中2	中3	中4 高1	中5 高2	中5 高3	高4	

次頁に続く

校種	府立池田高等学校												
年度	昭23	昭24	昭25	昭26	昭27	昭28	昭29	昭30	昭31	昭32	昭33	昭34	昭35
志願者			433	462	385	491	452	439	512	464	526	531	489
合格者			350	404	385	400	400	400	400	400	400	400	400
合格率			81%	88%	100%	80%	89%	91%	78%	86%	76%	75%	82%
入学定員			350	400	400	400	400	400	400	400	400	400	400
期生			高5	高6	高7	高8	高9	高10	高11	高12	高13	高14	高15

備考 ①昭和20年度は戦争混乱のため全員合格とす。（府下全域）
②昭22～24年度は学制改革のため募集せず。

8 卒業者数

校種	府立池田中学校						
卒業年次	昭19	昭20	昭21	昭22	昭23	昭24	小計
男	57	354	80	131	114	3	739
女							
計	57	354	80	131	114	3	739
卒業期別	①	①②	②	②④	④⑤	⑤	

校種	府立池田高等学校												
卒業年次	昭24	昭25	昭26	昭27	昭28	昭29	昭30	昭31	昭32	昭33	昭34	昭35	小計
男	76	225	215	268	203	215	203	217	195	219	222	228	2486
女			109	122	150	173	147	180	187	179	177	166	1590
計	76	225	324	390	353	388	350	397	382	398	399	394	4076
卒業期別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	

（注）1.中学卒業生のなかに4年修了のものを含む。
2.中学④期は高①期、中学⑤期は高②期生となる。

総数 男 3225
女 1590

9 卒業生の進学・就職状況

卒業年別	昭24（1期）		昭25（2期）		昭26（3期）		昭27（4期）		昭28（5期）	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
卒業者	76		225		215	109	268	122	203	150
大学進学者	48		138		101	47	126	36	108	37
就職者	9		45		21	27	43	33	11	42
家事見習及び家事	8		22		25	33	36	48	11	69
その他	11		20		68	2	63	5	73	2
計	76		225		324		390		355	

卒業年別	昭29（6期）		昭30（7期）		昭31（8期）		昭32（9期）		昭33（10期）		昭34（11期）	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
卒業者	215	173	203	147	217	180	195	187	219	179	222	177
大学進学者	146	45	143	60	165	43	146	71	155	51	154	64
就職者	19	66	25	53	11	71	17	101	30	96	25	96
家事見習家事	19	58	15	31	17	59	2	10	0	29	3	14
その他	31	4	20	3	24	7	30	5	34	3	40	3
計	388		350		397		382		398		399	

10 大学進学者の内訳（高校1期生～11期生）

卒業年	昭24（1期）	昭25（2期）	昭26（3期）		昭27（4期）		昭28（5期）	
	男	男	男	女	男	女	男	女
国立大学進学者	11	56	36	9	49	3	47	5
公立大学進学者	10	36	22	9	31	11	19	5
私立大学進学者	27	46	43	29	46	22	42	27
小計	48	138	101	47	126	36	108	37
合計	48	138	148		162		145	

卒業年	昭29（6期）		昭30（7期）		昭31（8期）		昭32（9期）		昭33（10期）		昭34（11期）	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
国大進学者	45	6	38	10	36	6	57	13	46	8	48	10
公大進学者	22	11	25	8	18	8	42	7	26	7	32	11
私大進学者	79	28	80	42	111	29	47	51	83	34	74	43
小計	146	45	143	60	165	43	146	71	155	51	154	64
合計	191		203		208		217		206		218	

11 生徒自治会クラブの変遷

(1) 文化クラブ

	理科班							地歴班		芸術班	文芸班		図書班	(学芸部)	報国団	昭和十七年
	博物同好会	理化同好会	数学同好会	政経研究会		地歴同好会	音楽部		美術部	文芸部	新聞部	図書部	(文化部)	校友会	昭和二一年
	生物部	物化部	数学部	社研部		地歴部	軽音楽部	コーラス部	美術部	文芸部	新聞部	図書部	(文化部)	自治会	昭和二四年
天文部	生物部	理科部	数学部	ユネスコ部		地歴部		コーラス部	美術部	文芸部	新聞部	図書部	(文化部)	自治会	昭和三〇年
天文気象部	生物部			ユネスコ部		地歴部	軽音同好会	コーラス部	美術部	文芸部	新聞部	図書部	(文化部)	自治会	昭和三四年

	保健衛生	生活	園芸班	(生活部)					弁論部		園芸班					昭和十七年
		厚生部	農芸部	(生活部)					弁論部		農芸部		国語同好会	英語同好会		昭和二一年
	(B・I)美化委員	理髪部	農芸部					茶花道部	弁論部		農芸部	演劇部		英語部		昭和二四年
ダンス	保健衛生						写真部	茶花道部	弁論部	放送部		演劇部	書道部	E・S・S		昭和三〇年
ダンス			園芸同好会			詩吟同好会	写真部	茶花道部		放送部	園芸同好会	演劇部	書道部	E・S・S		昭和三四年

(2) 体育クラブ

	軟練班	清空班（国防訓練部）							排球班	籠球班	国防競技班	陸上競技班	体操班	相撲班	剣道班	（鍛錬部）	報国団	昭和十七年
		登山部	野球部	水泳部	送球部		米式蹴球部		庭球部		蹴球部	排球部		馬術部	陸上競技部	体操部	相撲部	（運動部）	校友会	昭和二十一年
ソフトボール	ラグビー部	山岳部	硬式野球部	水泳部	送球部	米式蹴球部	軟式庭球部	硬式庭球部	サッカー部	卓球部	排球部	籠球部			陸上競技部	体操部		（運動部）	自治会	昭和二十四年
ソフトボール	ラグビー部	山岳部	野球部	水泳部	送球部	タ・フ・ボール	軟式テニス	硬式テニス	サッカー部	卓球部	排球部	籠球部	ボクシング部		陸上部	体操部		（運動部）	自治会	昭和三十年
バドミントン	ラグビー部	山岳部	野球部	水泳部	送球部	米式蹴球部	軟式テニス部	硬式テニス部	サッカー部	卓球部	排球部	バスケット部	ボクシング部		陸上部	体操部		（運動部）	自治会	昭和三十四年

12 図書館の現状

① 設　　備　閲覧室 115.7m²　司書室兼書庫 46.2m²

② 蔵 書 数　（昭和35. 2. 1現在）

種別図書 16,072冊　雑誌 34 種

分類別蔵書数

分類	総記	哲学宗教	歴史地理	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	合計
冊数	1863	631	1496	2807	2990	396	192	885	574	4238	16,072
百分比	12%	4%	9%	17%	18%	2%	1%	6%	4%	27%	100%

二十周年記念事業概観

一、昭和三十二年十二月　創立二十周年記念事業を行なうことにつき、PTA実行委員会、同窓会理事会、職員会議にそれぞれ上程可決。
一、昭和三十三年二月一日　PTA、同窓会、学校職員、生徒自治会、の各代表より成る記念事業実行委員会を結成、その第一回会議を開き、(イ)委員長はその年度のPTA会長、会計書記は事務長とすること、(ロ)記念事業として同窓会館兼学校食堂の建設と二十周年記念誌の編さんとの二つを完遂すること、(ハ)この事業費として、七百万円の募金を行なうこと、以上を決定。
一、昭和三十三年六月　記念事業趣意書を作製、PTA、同窓会、それぞれ募金運動開始。
一、昭和三十四年一月　参考に資するため、池田市八尾工務店八尾憲隆氏（高校二期生）に依頼して会館の仮設計図を作製。
一、昭和三十四年四月　記念誌編さん委員会、編さん方針を最終的に決定して実際活動を開始。
一、昭和三十四年六月　会館の正式設計を大阪市三座建築事務所徳永正三氏に依嘱、八月初旬同設計完了。
一、昭和三十四年八月二十一日　会館建築に関し、大阪府教委より校地使用許可（三四教委施内二九七号）。
一、昭和三十四年九月二日　七業者による会館建築の指名競争入札を行ない、池田市八尾工務店が落札。
一、昭和三十四年九月八日　地鎮祭執行。同十日着工。
一、昭和三十五年二月八日　記念誌原稿整理完了。
一、昭和三十五年二月十三日　同窓会館兼学校食堂竣工。同日、三業者による記念誌印刷の指名競争入札を行ない、大阪市高橋南益社が落札。
一、昭和三十五年四月十六日　創立二十周年記念式典挙行。

二十周年記念事業会館建設内部設備費寄附芳名録

（敬称略）

池田市　箕面市　KK池田銀行
鳥井信治郎　上島恒造　岩谷直治
井上道夫　春江耕作　岸上幸一郎
田中四郎　久保　瀞　滝井　璣
青井芳三郎　村山長一　徳永善四郎
堀口泰雄　藤井保久　井上英雄
長谷川七郎　高室　修　麻生庄次郎
小木　豊　菅生雄一　鈴木太良
柴田捷三　吉治仁代治　江口次郎
田中　実　川島清次　森　三郎
稲山誠次郎　小椋荘之助　石原　実
溝口俊士　盛　道雄　永田広海
柴田常一　柊木　進　黒田重太郎
鈴木為三　向阪　進　桐山利三郎
長井明見　西岡正三　加能一雄
徳永正三　西垣虎之助　亀岡宗吉

大阪府立池田高等学校
創立二十周年記念事業実行委員会

委員長　上島恒造（PTA会長）
委員　中島　誠（PTA副会長）
同　作山貴代子（PTA副会長）
同　藤井義一（PAT会計）
同　井上道夫（PTA前会長）
同　大川三郎（教頭）
同　小川謙三（事務長）
同　高木　隆（教諭　PTA書記）
同　矢野淳一（教諭）
同　岩田久郎（教諭）
同　杉山広済（教諭　自治会顧問）
同　山本家道（教諭　承風会理事）
同　原　武（承風会理事）
同　木藤浩之（自治会執行委員長）
同　細見　洋（自治会議会議長）

編集後記

・創立二十周年を迎えるに当たって記念行事として〝承風会館〟の建設とともにこの記念誌の編集が計画され、昨年四月、編集委員会の成立をみ、爾来、編集に対し各位の御援助を受け本日ようやく刊行をみました。

・本校のたどったこの二十年間は、終戦前後という物資不足の裡に経過し、加えて再度の火災を蒙ったため、写真その他の資料が格別に乏しく、充分に蒐集し得なかった事はかえすがえす残念に思います。

・尚、御繁忙の中をさいて快く玉稿を賜わりました方々に満腔の感謝を捧げます。しかしながら紙幅の都合上、一部折角の玉稿をそのまま掲載することが出来ず、削除しなければならなかった事や、題名を勝手につけたことをくれぐれもお詫び致します。

（岩田、高木、矢野、岡本、加藤、山本）

昭和35年4月16日発行

池田市畑町160
大阪府立池田高等学校
創立二十周年記念事業実行委員会

印刷所　高橋南益社
大阪市福島区上福島南1の84
電話大阪㊥7822